

梓山 a 遺跡  
梓山 d 遺跡  
町在家館跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第151集



町在家  
a 遺跡  
d 遺跡  
発掘調査報告書

2006

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



すさ やま  
梓 山 a 遺跡  
すさ やま d 遺跡  
まち ざい け  
町 山 在 家 館 跡

発掘調査報告書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第151集

平成18年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





# 序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、梓山a遺跡・梓山d遺跡・町在家館跡の調査成果をまとめたものです。

遺跡は、山形県の東南端に位置する米沢市に所在します。米沢市は中・近世において伊達氏や上杉氏の城下町として栄えた都市で、市内の各所には歴史的な地名や名所・旧跡が残っています。現在では山形県の南の玄関口として、また置賜地方の中心都市として機能しています。

この度、東北中央自動車道相馬尾花沢線（福島～米沢間）建設に伴い、平成16年度に梓山aほか2遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では対象面積の広い梓山a遺跡を主体にして、縄文時代早期から後期にかけての遺構・遺物が見つかりました。周辺の地形は幾筋のも尾根が発達した山麓で、検出された遺構は陥穴や土坑が主であったことから、これらの遺跡は狩猟場やキャンプサイト的な集落であったようです。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤 敏彦

本書は、東北中央自動車道相馬尾花沢線(福島～米沢間)建設に係る「梓山a遺跡・梓山d遺跡・町在家館跡」の発掘調査報告書である。

既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

調査は日本道路公団東北支社の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

出土遺物・調査記録類は、報告書作成終了後、山形県教育委員会に移管する。

## 調査要項

遺跡名 ①梓山a遺跡

②梓山d遺跡

③町在家館跡

遺跡番号 ①米沢市遺跡地図A-278

②米沢市遺跡地図A-297

③米沢市遺跡地図A-373

所在地 ①山形県米沢市万世町梓山字馬乗場

②山形県米沢市万世町梓山字田ノ上

③山形県米沢市万世町梓山字町在家

調査委託者 日本道路公団 現：東日本高速道路株式会社 東北支社

調査受託者 財団法人山形県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤 敏彦

受託期間 平成16年4月1日～平成18年3月31日

現地調査 ①平成16年6月7日～10月7日

②平成16年6月15日～7月2日

③平成16年7月1日～8月3日

調査担当者 調査第三課長 洪谷 孝雄

主任調査研究員 須賀井新人

調査指導 山形県教育庁社会教育課文化財保護室

調査協力 日本道路公団東北支社山形工事事務所

山形県教育委員会置賜教育事務所

米沢市教育委員会

## 凡 例

1 本書の作成は渋谷孝雄・須賀井新人が担当し、執筆は第Ⅲ章- 第3節(放射性炭素年代測定)を除き、須賀井が担当した。

2 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系(測地成果2000)により、高さは海拔高で表す。また、方位は座標北を表す。

3 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S T ... 竪穴住居跡 S K ... 土坑・陥穴 S P ... ピット

S D ... 溝跡 S X ... 性格不明遺構

R P ... 登録土器 R Q ... 登録石器 S ... 磚

4 遺構・遺物実測図の縮尺・網点等の用法は各図に示した。

5 土器の拓影の内、表裏を表したものについては、断面図を挟んで右が表面、左が裏面として図を作成した。

6 基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に従った。

7 委託業務は下記のとおりである。

基準点測量業務 株式会社大洋測量設計社

遺物実測図化業務 株式会社ラング

理化学分析業務 株式会社パレオ・ラボ

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査の経過	1
II 立地と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 柿山a遺跡	
1 遺跡の概要	7
2 検出遺構	9
3 出土遺物	37
4 放射性炭素年代測定	65
IV 柿山d遺跡	
1 遺跡の概要	67
2 遺構と遺物	68
V 町在家館跡	
1 遺跡の概要	71
2 遺構と遺物	72
VI 総括	
1 繩文土器	82
2 石器	84
3 各遺跡の様相	85
報告書抄録	卷末

## 表

表1 調査工程表	3	表7 石槍属性表	88
表2 歴年代較正結果	66	表8 石椎属性表	88
表3 測定試料及び処理	66	表9 石匙属性表	88
表4 放射性炭素年代測定及び歴年代較正の結果	66	表10 石節属性表	89
表5 繩文土器縦横対比表	84	表11 握器・削器属性表	89
表6 石器属性表	88		

## 図 版

第1図 地形分類図.....	5	第34図 3区出土打製石器(1).....	48
第2図 遺跡位置図.....	6	第35図 3区出土打製石器(2).....	49
第3図 梓山a遺跡調査区概要図.....	8	第36図 4区出土打製石器(1).....	50
第4図 2区遺構配置図.....	10	第37図 4区出土打製石器(2).....	51
第5図 S T 1 壁穴住居跡.....	11	第38図 4区出土打製石器(3).....	52
第6図 S T 2 壁穴住居跡.....	12	第39図 4区出土打製石器(4).....	53
第7図 2区核出土坑・陥穴.....	13	第40図 4区出土打製石器(5).....	54
第8図 2区核出土坑.....	14	第41図 4区出土打製石器(6).....	55
第9図 3区核出土坑(1).....	16	第42図 1~3区出土礫石器.....	56
第10図 3区遺構配置図.....	17	第43図 4区出土磨製石器・礫石器・石製品.....	57
第11図 3区核出土坑(2).....	19	第44図 4区出土礫石器(1).....	58
第12図 3区核出土坑(3).....	20	第45図 4区出土礫石器(2).....	59
第13図 3区核出土坑(4).....	21	第46図 4区出土礫石器(3).....	60
第14図 3区核出土坑(5).....	22	第47図 4区出土礫石器(4).....	61
第15図 3区核出土坑(6).....	23	第48図 4区出土礫石器(5).....	62
第16図 3区核出土坑(7).....	24	第49図 4区出土礫石器(6).....	63
第17図 3区核出土坑(8).....	25	第50図 4区出土礫石器(7).....	64
第18図 3区核出土坑・陥穴(1).....	26	第51図 梓山d遺跡調査区概要図・遺構配置図.....	67
第19図 3区核出土坑・陥穴(2).....	27	第52図 土坑・陥穴(1).....	69
第20図 3区核出土坑・陥穴(3).....	28	第53図 土坑・陥穴(2).....	70
第21図 4区遺構配置図.....	30	第54図 出土土器・石器.....	70
第22図 4区核出土坑(1).....	31	第55図 町在家館跡調査区概要図.....	71
第23図 4区核出土坑(2).....	32	第56図 2区遺構配置図.....	72
第24図 4区核出土坑・陥穴(1).....	33	第57図 S K 1~3土坑.....	73
第25図 4区核出土坑・陥穴(2).....	34	第58図 繡文土器.....	75
第26図 4区核出土坑・陥穴(3).....	35	第59図 打製石器(1).....	76
第27図 4区核出溝跡.....	36	第60図 打製石器(2).....	77
第28図 1~2区出土土器.....	39	第61図 磨製石器・礫石器.....	78
第29図 3区出土土器.....	41	第62図 矽石器(1).....	79
第30図 4区出土土器(1).....	42	第63図 矽石器(2).....	80
第31図 4区出土土器(2).....	43	第64図 矽石器(3).....	81
第32図 4区出土土器(3).....	44	第65図 打製石器計測位置模式図.....	87
第33図 1~2区出土打製石器.....	47		

## 写 真 図 版

写真図版 1 桦山 a 遺跡 1 区全景ほか  
写真図版 2 2 区調査風景ほか  
写真図版 3 S T 1・2 住居跡  
写真図版 4 S T 1 住居跡完掘状況  
写真図版 5 S T 1・2 住居跡完掘状況  
写真図版 6 S K 31 土坑ほか  
写真図版 7 3 区遺構完掘状況(1)  
写真図版 8 3 区遺構完掘状況(2)  
写真図版 9 4 区遺構検出状況  
写真図版 10 S K 214 土坑ほか  
写真図版 11 S K 245 陥穴ほか  
写真図版 12 4 区遺構完掘状況  
写真図版 13 4 区遺物出土状況  
写真図版 14 第Ⅰ群 1～9 類土器  
写真図版 15 第Ⅰ群 9 類・第Ⅱ群 1 類土器  
写真図版 16 第Ⅱ群 1～4 類土器  
写真図版 17 第Ⅱ群 5～10 類土器  
写真図版 18 織文土器・石槍・石錐

写真図版 19 石鎧・石匙  
写真図版 20 石箭  
写真図版 21 石鎧・搔器・削器  
写真図版 22 削器・抉入石器  
写真図版 23 塊状耳飾り・磨製石斧ほか  
写真図版 24 凹石・磨石(1)  
写真図版 25 凹石・磨石(2)  
写真図版 26 桦山 d 遺跡遠景ほか  
写真図版 27 遺構検出状況ほか  
写真図版 28 S K 1 陥穴ほか  
写真図版 29 S K 2 土坑・出土遺物ほか  
写真図版 30 可在家館跡遠景ほか  
写真図版 31 2 区土層断面ほか  
写真図版 32 2 区完掘状況ほか  
写真図版 33 織文土器・打製石器  
写真図版 34 打製石器・磨製石斧・礫石器  
写真図版 35 磺石器

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

東北中央自動車道は福島県相馬市と秋田県横手市とを結ぶ高速道路網で、福島市からは国道13号と並行する縦貫道として計画されている。日本道路公団が施工する相馬・尾花沢線のうち、福島～米沢間は国土交通省事業で山形県も事業費を負担して整備する「新直轄方式」に計画変更されて現在一部建設中である。

梓山a・d遺跡、町在家館跡とも米沢市遺跡地図に記載された周知の遺跡であり、梓山a遺跡では、米沢市教育委員会が平成12年に、民間の農業関連施設開発に伴う試掘調査を実施している。この調査で遺構・遺物が検出された約1,560m<sup>2</sup>の範囲に関しては、遺跡保護の観点から当時の開発区域より除外された経緯がある。

市教委による  
試掘調査

これらの遺跡が計画路線に含まれたことから、平成15年7月、県教育委員会が事業地域内の試掘調査を実施した。その結果、3遺跡とも土木工事等に際しては、遺跡保存のための協議および文化財保護法に基づく手続きが必要と判断された。この結果報告を受けた日本道路公団は、遺跡の取り扱いについて県教育委員会との協議を重ね、同年11月、平成16年度内に発掘調査を行い記録保存に資することで調整が図られた。

これらの調整を受けて、発掘調査実施機関である県埋蔵文化財センターでは、調査にかかる経費積算調書を平成16年2月に道路公団宛て提出した。4月1日付けで「埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定」を道路公団東北支社、県教育委員会、埋蔵文化財センターの三者で締結。併せて「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」を公団東北支社との間で締結した。統一して4月9日には、文化財保護法第57条第1項に基づき「埋蔵文化財発掘調査の届出」を県教育委員会へ提出、同15日、「埋蔵文化財の発掘調査について」の通知を受け取った。

以上の諸手続きを経て、事業者側や米沢市教育委員会など関係機関との事前打ち合わせ会を6月2日に開催し、調査期間や方法等の実施計画について協議、了承された。当初の現地調査は6月7日から7月23日までの延べ47日間、その後に記録・出土遺物等の整理を行って、当該年度中に報告書を刊行するものであった。

当初計画

## 2 発掘調査の経過

6月7日～11日(第1週)：現地調査開始、機材搬入と鉢入れ式。梓山a遺跡で1区～3区の調査区を設定した後、8日から重機による表土除去。併せて基準杭を設置(業務委託)して5m方形単位のグリッド設定し、1区より面整理と遺物包含層の掘り下げ開始。

6月14日～18日(第2週)：14日に3区の表土除去終了。重機を移動させ、15日より梓山d遺跡の表土除去開始。梓山a遺跡では2・3区の遺構検出状況から判断して、調査区外への広がりが予測されたため、この旨を県教育委員会へ報告。県教育委員会が範囲再確認のため17日に試

調査範囲の拡大

掘調査を実施した結果、調査区拡張と新たな調査区(4区)設定の必要性が生じた。その取り扱いについては、県教委が道路公団と協議することとなった。

**縄文早期末葉の  
堅穴住居跡**

6月21日～25日(第3週)：梓山a遺跡の2区で検出された堅穴住居跡(S T 1・2)の時期把握のための掘り下げと、梓山d遺跡の面整理・遺構検出作業を並行して実施。21日に梓山d遺跡のグリッド杭打設(業務委託)。梓山a遺跡S T 1からは縄文時代早期末の土器が出土、遺物の測点を行った後に取り上げ。その後は梓山d遺跡を先行させるため、遺構精査を一旦休止。23日から両遺跡で遺構配置図作成にかかる。24日、梓山d遺跡検出遺構(登録数16基)の掘り下げ開始。

**梓山d遺跡  
調査終了**

6月28日～7月2日(第4週)：梓山d遺跡で断面図等の記録作業を経ながら、遺構の完掘。平面実測とレベリングを行って、2日に調査終了。また、29日に町在家館跡の調査区設定。1日より調査開始、表土除去を行う。

**調査計画変更**

7月5日～9日(第5週)：町在家館跡での遺物包含層掘り下げと面整理作業。当初、1区で検出されたブドウ棚アンカーの掘り方跡を柱穴と誤認し、調査区外への延伸が確実なことから、梓山a遺跡同様に範囲確認のための試掘調査が必要と判断された。5日、道路公団・県教委・センターの三者で、梓山a遺跡の調査範囲拡大に伴う協議。調査面積増にかかる期間延長および経費増額、整理・報告書作成の一部次年度送りなどの計画変更を協議し、事業者側で調整が付き次第、変更契約を行うことになった。7日、町在家館跡の調査区西域にて試掘調査実施し、遺構・遺物の分布状況を確認。8日より梓山a遺跡の調査区拡張に着手。

**7月12日～16日(第6週)**：調査面積増に伴って12日より作業員を増員。梓山a遺跡拡張部の面整理と、並行して町在家館跡での遺構検出作業。

**7月20日～22日(第7週)**：町在家館跡検出柱穴の精査により、旧耕ブドウ棚のアンカー痕と判明。調査区から館跡に付随する遺構は確認されず。2区で遺物包含層の掘り下げ、出土遺物は1・2区とも縄文土器と石器。調査区外の試掘の結果、近代の開発や耕作で破壊を受けた区画もあることから、調査区拡張は不要と判断した。梓山a遺跡2・3区拡張部の表土除去は20日には終了。

**変更契約締結**

7月26日～30日(第8週)：町在家館跡は2区の包含層掘り下げと面整理、縄文時代の土坑3基(S K 1～3)を検出し、遺構配置図作成後に精査開始。梓山a遺跡は拡張部の遺構検出作業と配置図作成。29日、道路公団・県教委・埋文センターとの変更契約の内容確認。調査期間を10月15日まで延長、これにかかる経費約1,100万の増額で、文書による協議後、8月5日付けで道路公団と変更契約を締結した。

**町在家館跡  
調査終了**

8月2日～6日(第9週)：町在家館跡は2区の遺構完掘後、平面実測・レベリング等の諸記録を行って3日に調査終了。梓山a遺跡では3区を先行して5日より遺構精査開始。

**8月9日～11日(第10週)**：梓山a遺跡3区検出遺構の半截掘り下げ、同時に断面実測。土坑群には貯蔵穴と考えられる袋状形態ものや、陥穴が含まれる。

**8月19日～20日(第11週)**：盆明け後の調査再開。検出面の清掃を行って遺構精査継続。断面図終了遺構については完掘開始。

**8月23日～27日(第12週)**：3区遺構精査継続、25日で完掘作業終了、平面図作成。23日より、4区とした新規調査区(約2,000m<sup>2</sup>)の表土除去開始。グリッド杭打設後、遺物包含層の掘り下げ。

8月30日～9月3日(第13週)：3区の平面実測継続。4区は31日で表土除去終了、包含層の掘り下げと面整理実施。縄文期の遺構のほか、須恵器片を伴う平安時代の溝跡数条を検出。

9月6日～10日(第14週)：3区は平面実測継続。4区では包含層出土登録遺物の測点、取り上げ。その後、面整理を行って遺構検出作業。並行して9日から遺構配置図作成。10日、2区の遺構精査再開。

9月13日～17日(第15週)：2区でST1・2住居跡と土坑群を掘り下げ精査。3区は平面図にレベリングを行い、14日に調査終了。4区では南端部より遺構精査開始。

9月21日～22日(第16週)：2区・4区とも遺構精査継続。住居跡の床・壁面はST1で遺存状態がよいが、ST2では削平を受け床面直上で検出と判明。

9月27日～10月1日(第17週)：2区・4区の遺構精査と諸記録。完掘状況の写真撮影。

10月4日～7日(第18週)：2区で平面実測とレベリング、7日に終了。4区は遺構完掘と並行して平面図作成。5日に掘り方終了。6日に3遺跡合同の調査説明会を開催。7日、測量用品を残して発掘機材の撤収。道路公園に対して3遺跡の現地引渡しを行う。

10月12日～15日(第19週)：4区の平面実測とレベリング。危険防止のため、梓山a遺跡3区と梓山d遺跡の調査区埋め戻し。15にすべての機材を撤収して、現地調査を終了した。

表1 調査工程表

	6月				7月				8月				9月				10月			
	第1週	第2週	第3週	第4週	第5週	第6週	第7週	第8週	第9週	第10週	第11週	第12週	第13週	第14週	第15週	第16週	第17週	第18週		
梓山a遺跡	調査区設定・表土除去																			
	グリッド設定																			
	面整理・遺構検出																			
	遺構精査																			
	作図・写真撮影																			
梓山d遺跡	調査区設定・表土除去																			
	グリッド設定																			
	面整理・遺構検出																			
	遺構精査																			
	作図・写真撮影																			
町在家維跡	調査区設定・表土除去																			
	グリッド設定																			
	面整理・遺構検出																			
	遺構精査																			
	作図・写真撮影																			

## II 立地と環境

### 1 地理的環境

気候	山形県の東南部に位置する置賜盆地は、豪士山・駒ヶ岳・栗子山といった奥羽山系の峰々に東を遮られ、磐梯朝日国立公園の一角をなす吾妻の山塊が南を画している。これら東南に聳え立つ山々が、福島県の境界ともなっている。米沢市はこれらの山並みと、西部に位置する低く小さなだらかな玉丘丘陵によって囲まれた、典型的な盆地である。したがって、気候は寒暖の差が大きい盆地性内陸型で、県内でも冬期の積雪量が多い地域として知られている。
水系	奥羽山系や吾妻山系に源を発する幾筋もの水流は、鬼面川・松川・羽黒川などの河川となって、氾濫原を形成しつつ北流している。これらはやがて合流して最上川となり、県土を潤しながら日本海へと注ぐ。
地形	米沢盆地は比較的平坦地が多いために農地が多く、森林の割合が少ないので特徴である。米沢市街地は緩やかな扇状地面上に立地し、良好な地盤に恵まれている。近年、八幡原中核工業団地をはじめ、各工業団地が国道13号沿いに展開しており、その周辺地域にも都市化に伴う宅地の造成が進んでいる。
遺跡の立地	梓山a・d遺跡、町在家館跡は米沢市街地より東南へ約7km、標高502mを測る早坂山の東方山麓または山腹緩斜面に立地する。北側は梓川(天王川)による扇状地帯を形成しており、東方へ隣接する大笠生地区は谷底平野である。遺跡付近の地目は山林が多く、一部が畠地や果樹園となっている。表層地質は未固結の段丘堆積物で、礫および砂よりなる。耕土地土は粘質の褐色森林土壤であり、侵食を受け易いために養分含有量が低い。

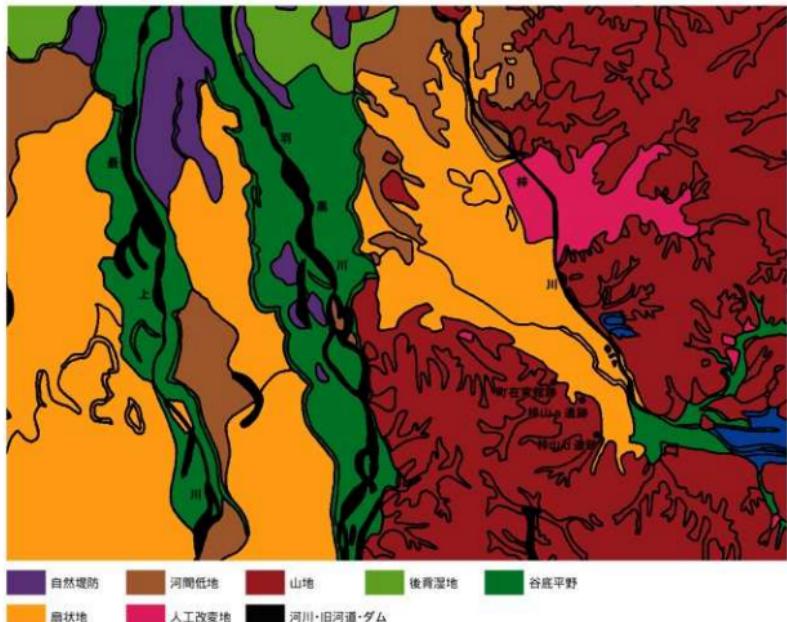
### 2 歴史的環境

縄文時代	周知遺跡の約半数は縄文時代の遺跡であり、市街南部・西部の台地上を中心で分布している。代表的な事例として、前期初頭の石器工房跡と推定される大型竪穴住居が検出された国指定史跡の一ノ坂遺跡、土偶をはじめとした中期中葉の遺物が大量に出土し、大規模かつ拠点的な集落跡と判断される台ノ上遺跡などが挙げられよう。
古墳時代	後続する弥生時代の遺跡は極めて少なく、縄文時代との複合遺跡として登録されているものに限られる。古墳時代には、周辺の丘陵や山麓を舞台に大小の古墳が造営される。市街北東部には193基の群集墳である戸塚山古墳群、北西部には成島古墳群が存在する。また、北部の窪田地区には東北地方でも最大級の前方後円墳である寶領塚古墳をはじめ、窪田古墳や八幡塚古墳

などが点在している。また、本遺跡群の北西約3.5kmに位置する比丘尼平遺跡では、県内で初出となった前期の方形周溝墓が発見されている。

奈良・平安時代の遺跡は、主要な河川に沿って平野部へ広範囲に分布する様相が窺われる。  
奈良・平安時代  
具注歴の漆紙文書や布目瓦などが出土し、置賜郡街跡とも推定された大浦遺跡群、木簡・墨書き器や円面鏡などの出土から、古代置賜六郷のひとつ「広瀬郷」との見解もある笠原遺跡などは、官衙関連遺跡として捉えられている。平成12年に国史跡の指定を受けた古志田東遺跡は、出土木簡等の解析から、多くの労働者を集約しての大規模な農業経営や、船による交易などをを行っていた10世紀代の有力豪族の居館として注目された。

中世に入ると、鎌倉期の武将大江広元の次男時広が「長井庄」の地頭として、暦仁元年(1238年) 中世  
米沢に居城を構えたと伝えられるが証拠はない。その後、大江氏は長井氏を称して、八代約200年におよび支配を続けたが、天授六年(1380年)に伊達宗遠の侵略によって滅び、置賜地方は伊達領となつた。伊達氏による置賜支配の中心は高畠であったが、十五代晴宗が当主になって米沢に入封し、米沢を本拠とした伊達の治世は輝宗・政宗と続いた。伊達氏による置賜支配は、1591年に政宗が岩出山へ移封となるまでの210年間にわたつた。米沢市に存在する中世城館跡は200ヶ所以上とされているが、築城者や築城時期が不明なものが多い。



第1図 地形分類図(S=1:50,000)



第2図 遺跡位置図 国土地理院発行2万5千分の1地形図(米沢東部)を使用)

No	遺跡名	種別	時代	No	遺跡名	種別	時代
1	桙山 a 遺跡	集落跡	縄文・平安	20	大清水遺跡	集落跡	縄文
2	桙山 d 遺跡	集落跡	縄文	21	桙の木遺跡	集落跡	縄文・古墳
3	町在家館跡	集落跡	縄文	22	水神前遺跡	集落跡	縄文
4	法勝寺遺跡	集落跡	縄文	23	小谷地遺跡	散布地	縄文
5	桙山 b 遺跡	集落跡	縄文	24	栗沢館跡	城館跡	中世
6	桙山 c 遺跡	集落跡	縄文	25	堤屋敷遺跡	城館跡	中世
7	李代遺跡	集落跡	縄文	26	早坂山 a 遺跡	集落跡	縄文・中世
8	上室遺跡	集落跡	縄文・弥生	27	早坂山 b 遺跡	集落跡・城館跡	縄文・中世
9	松林寺 c 遺跡	集落跡	縄文	28	早坂山 c 遺跡	集落跡	縄文・中世
10	松林寺 d 遺跡	集落跡	縄文	29	早坂山 d 遺跡	集落跡	縄文・中世
11	松林寺館跡	城館跡	中世	30	早坂山館跡	城館跡	中世
12	八幡原土塁群	集落跡・土塁	縄文・中世	31	鶯城跡	城館跡	中世
13	桙山館跡	城館跡	中世	32	丸山日影館跡	城館跡	中世
14	万世館山城跡	城館跡	中世	33	山崎 c 遺跡	集落跡	縄文
15	柳荷山館跡	城館跡	中世	34	山崎 a 遺跡	集落跡	縄文
16	善門寺遺跡	集落跡	縄文	35	山崎 b 遺跡	集落跡	縄文
17	原 j 上遺跡	集落跡	縄文	36	三沢館跡	城館跡	中世
18	井ノ鼻遺跡	集落跡	縄文・中世	37	前方沢遺跡	集落跡	縄文
19	牛森遺跡	集落跡	縄文	38	水窪行場	宗教遺跡	中世

## III 梓山a遺跡

### 1 遺跡の概要

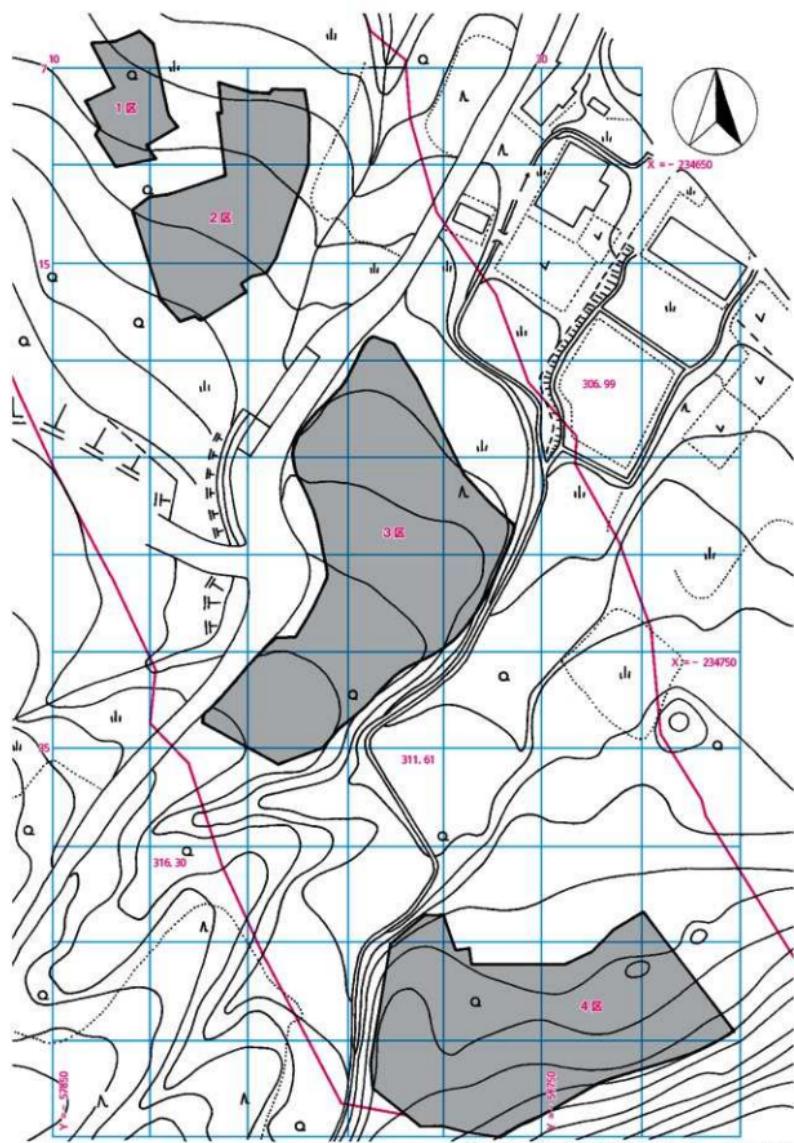
米沢市遺跡地図による遺跡の範囲は、東西・南北とも約350mを測る三角形様のエリアと推定されている。範囲中央部を南西から北東方向に沢が縱貫しており、遺跡はその両端の台地上に立地する。したがって、地形的に見れば沢によって分離されることから、その東西に位置する遺跡を区別して捉えることも可能である。今回の調査で4区とした沢東の傾斜地は、平成12年に米沢市教育委員会がトレーンチによる分布調査を実施した際、沢沿いの縁辺部で遺物包含層が良好に遺存していることが確認され、縄文時代早期末～前期の遺物が出土している。

今回の調査は遺跡範囲の南北域が対象となり、県教委による試掘調査の結果から事業予定路線内の3箇所に調査区を設定したが、先にも記したとおり拡張等で調査面積は当初計画よりも大幅に増加した。1区～3区は沢の西側段丘に位置し、周辺は北東方に向かって傾斜する地形である。事業予定地内の標高は309～312mを測り、約3mの比高差がある。旧地形で1区と2区には南北方向に沢状の鞍部が存在し、その両端で馬の背状の微高地を形成している。沢沿いに設定した3区は、現地形どおり南北から北東方に緩やかに傾斜する。3区と沢を挟んで対峙する位置関係の4区は南から北への斜行地であるが、東半域では近年の土地改変により傾斜が取り払われて平坦化しており、斜面上にあたる南部の削平が著しい状況であった。

検出された主な遺構は、竪穴住居跡2棟、陥穴9基、規模・形状等多様な形態の土坑約150基と、出土遺物から平安時代の所産に比定される溝跡5条などである。これらが分布するのは2区中央域、3区南北域と4区の東・西両端域で、1区からは検出されない。2棟の竪穴住居跡は2区中央部の微高地上に配置され、その東側に土坑や陥穴が存在する。陥穴は2区に1基、3区に5基、4区に3基が分布するが、配列等に規則性は見受けられない。3区の遺構分布状況は南側から段丘縁辺に沿って密度が濃い。4区は中央部が搅乱を受けており遺構の存在が明らかでないが、西側では遺存状態がよく、密集した分布状況を呈している。また、この付近の地山は砂質土で水捌けがよく、平安時代の溝跡は当該地から検出された。

出土した遺物には縄文土器・石器・石製品・須恵器があり、整理用コンテナ11箱分で量的に少ない。縄文土器はすべて破片資料で、復元して器形が窺えるものはほとんどない。一方、打製石器には成品が一定量認められ、定形的な各器種が揃っている。遺物の分布状況は遺構別で見ると、2区ST1住居跡のほか、4区西側の段丘縁辺部に所在するSK224等いくつかの土坑で比較的まとまった出土量を得たが、遺物を含まない例が多く、散発的な出土状況と見なされた。また、グリッド単位で取り上げた包含層出土のものは、概ね遺構の分布と軌を一にする在り方が看取された。

III 梓山 a 遺跡



第3図 梓山 a 遺跡調査区概要図 (S = 1 : 1,000)

## 2 検出遺構

### 1区

旧地形で調査区東半が沢状の鞍部に位置し、北西側に標高が高い。南西部で遺物包含層の残存が確認され、僅少の土器や石器が出土したが遺構は存在しない。北西部は薄い表土直下に地山が現れ、旧来の微高地がかなり削平を受けたと思われる。

遺構未検出

### 2区(第4~8図)

南北方向に向く馬の背状の微高地に、竪穴住居跡2棟と陥穴や土坑など数基の遺構が検出された。主軸方向を同じにする2棟の竪穴住居跡(S T 1・2)が調査区中央部に位置し、地形的要因からその東側に土坑等が配される。

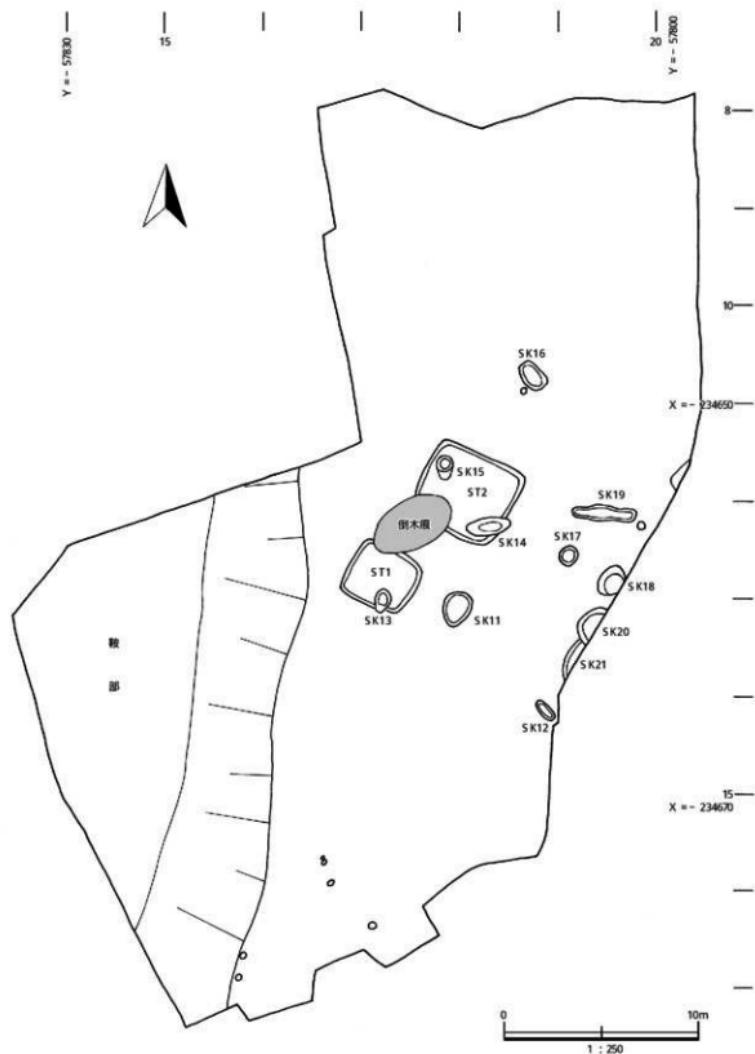
S T 1は北辺約3.4m、南・西辺約3.0m、東辺約2.5mを測り、東西方に幾分長い台形様のプランを呈する。重複関係は南辺部でS K 13土坑により切られるほか、北辺の一部が倒木痕によって破壊される。壁面は全周ではほぼ垂直に立ち上がり、地山を壁として床面から最高20cmの遺存が確認された。堆積土は大別4層位と識別され、壁周部から埋没していった自然堆積の様相を呈している。床面には多少の凹凸があり、中央部に対して壁周域が幾分高まる。壁面同様に地山を直接の床としており、貼り床は施されない。床面からは中央部東側に配された住居内土坑1基と、33を数えるピットが検出された。ピット群は主に壁周に沿って配された状況から壁柱穴と推測でき、さらに中央部を囲うような配置でも構築される。これらは近接して掘り込まれるものが多く、規則性は察知されないが、一部で等間隔をなす配置例も認められる。ピットの径は8~20cm、床面からの深さ6~30cm程と不揃いである。遺物は覆土第2層からその多くが出土し、分布的な傾向では東半域の中央部に集中する状況が窺われた。S T 2はS T 1の北東約2.5mに位置し、主軸を同じにする。形状もS T 1同様で東西方に幾分長い方形を呈し、東西約4.8m・南北約4.2mの規模を測る。南東部と北西部でそれぞれS K 14とS K 15が重複し、さらに南西部を倒木痕により切られるほか、小規模な擾乱の痕跡が数箇所で見受けられた。表土直下が検出面となり、壁面は4~10cmの遺存であったことから、上部はかなり削平されているものと判断された。床面は地形に沿って西側から東側へ傾斜しており、東・西端では約20cmの高低差を測った。地山直接の床であり、重複するS K 14・15の掘り込みは、床面まで達していない。床面からは7基のピット状の掘り込みが確認できたが、規模や配置等からいずれも柱穴として捉えられるものではなかった。出土した遺物は僅少で、掲載し得たのは深鉢体部片の拓影図1点(第28図21)に限られた。平面プランから住居跡として登録したが、床面の状況や柱穴が不明な点から再考が必要かもしれない。

壁柱穴が巡る  
方形の住居跡

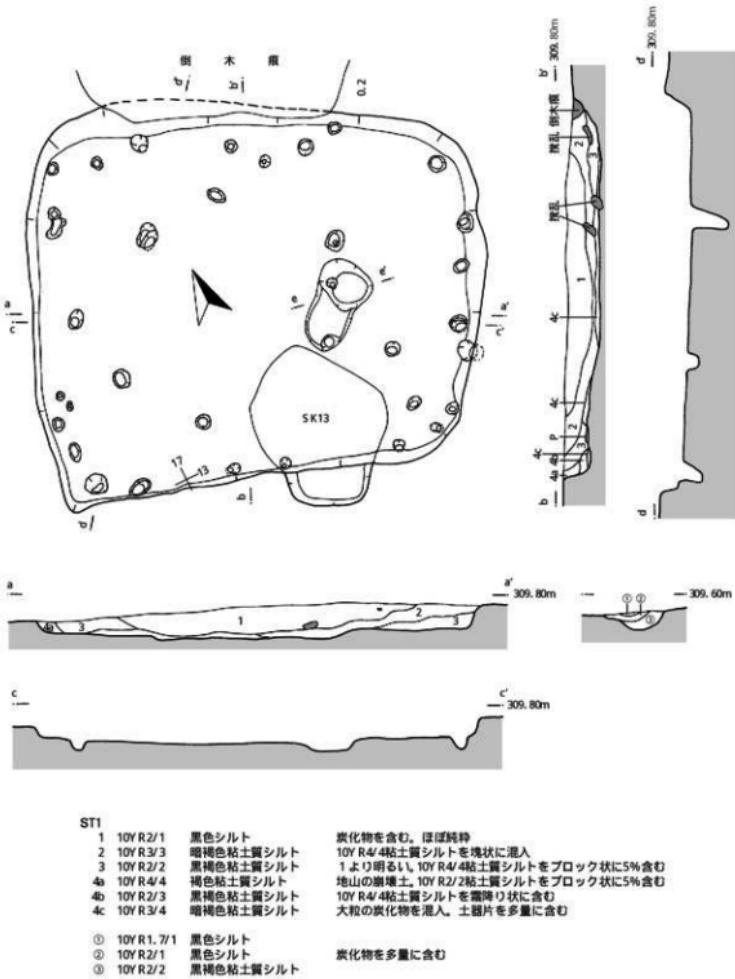
調査区東辺の18—14グリッドで検出したS K 12は陥穴である。長軸1.2m程の長方形様プランで、断面形がバケツ状の逆台形を呈する。深さ約1.1mを測り、周壁は垂直的な掘り方がなされて平坦な底面に至る。底面に逆茂木痕等を示す土色変化は認められない。形態や掘り方の特徴から、3区検出のS K 94に類似することが窺われる。S T 1の東方に近接するS K 11は、不整円形を呈する土坑で、調査区内では遺物出土数がS T 1に次いで多い。径約1.9m、検出面からの深さ15cm程を測る皿形の形狀をなす。覆土1層の黒褐色土内から、土器片やフレイクが出土している。細片のみで年代決定には情報が乏しいが、S T 1と同時期の構築と推察される。

陥穴

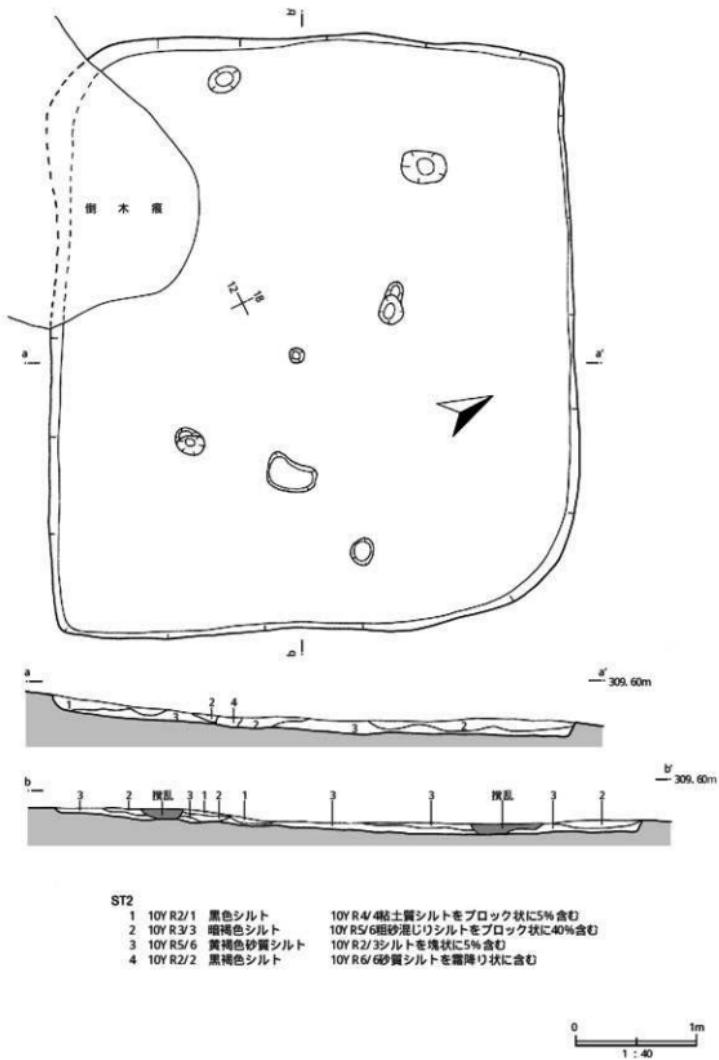
S T 1付随土坑



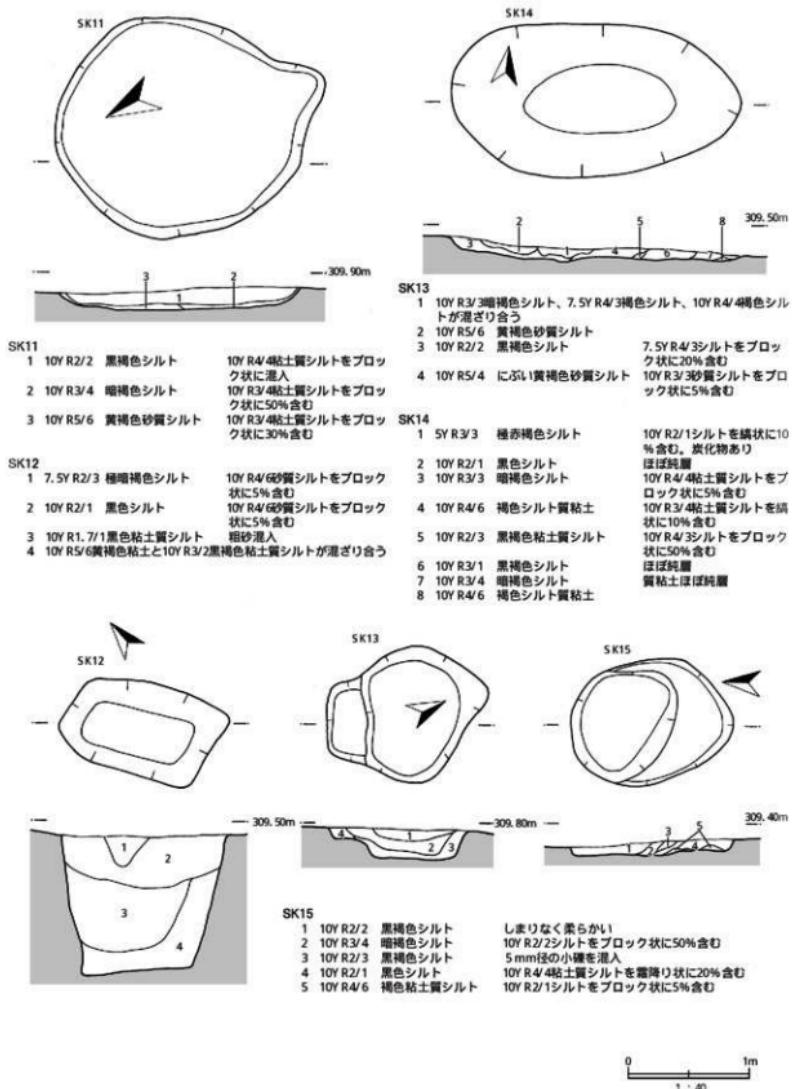
第4図 2区遺構配置図



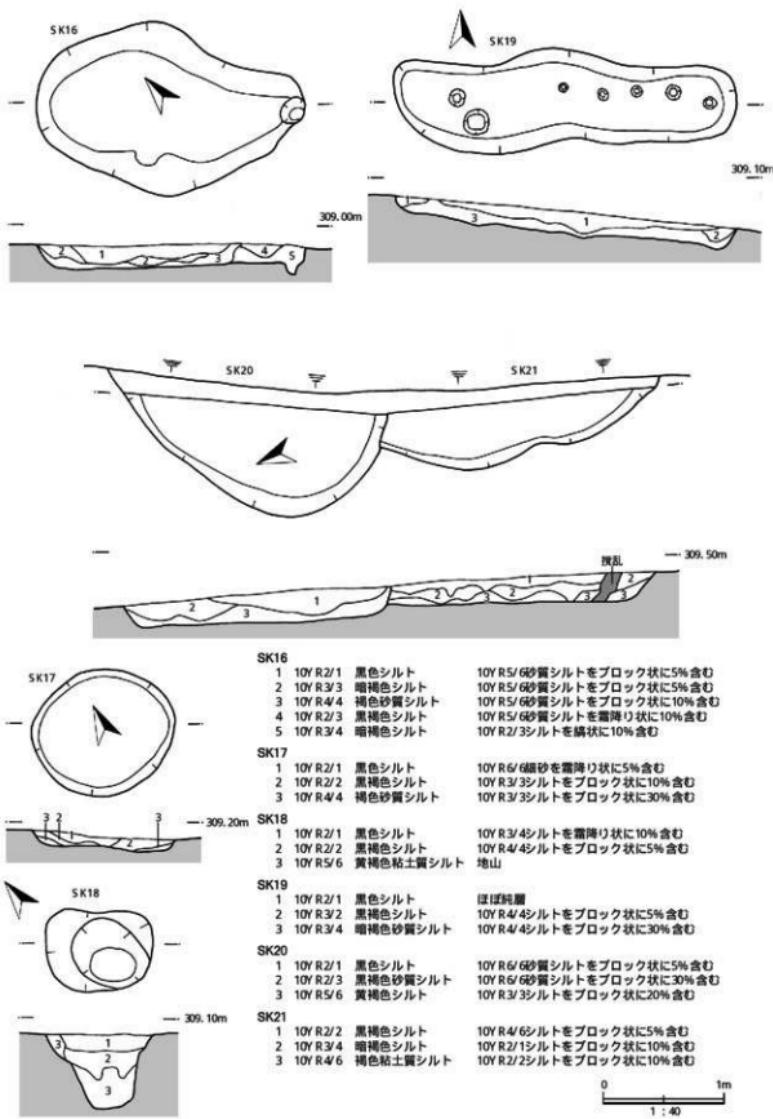
0 1m  
1 : 40  
第5図 ST1竪穴住居跡



第6図 ST2竪穴住居跡



第7図 2区検出土坑・陥穴



第8図 2区検出土坑

## 3図(第9~20図)

南端部と段丘縁辺部において陥穴や土坑等が検出された。陥穴はSK43・57・60・70・94の5基であり、形態の相違から二タイプに大別できる。SK43は20~32グリッドに位置し、平面プランが歪な橿円形を呈する陥穴である。南北1.45mを測る規模で、南側にテラス状の張り出し部を有する掘り方がなされ、主軸は北西~南東方へ向く。検出面からの深さ95cmを測り、中段以降は垂直的に掘り下げられる。底面は平坦であるが、南東端に長径35cm程度のピット様の掘り込みがある。23~30グリッドに位置するSK57は南北方向の主軸をもち、長径1.6m程度の橿円形を呈する。確認面から1.3mの深さを測り、南半部の周壁は凹凸を有して掘り込まれ、底面北側には段を形成する。調査区の中央域で検出したSK60は主軸を東西方向に有し、平面橿円形状で長径約1.4mを測る。確認面下約30cmで北側にテラス状の平場を有するプランで、これより底面に至る掘り方はほぼ垂直である。深さ1.25m程度で、底面は西側にやや傾斜して深くなる。SK70は段丘縁辺部に位置し、主軸を段丘と平行した北東~南西方向にとって構築される。北辺の一部でSK69土坑と重複し、これによって切られる新旧関係を認める。上端平面形が橿円形を呈し、長径2.5m・短径1.1mの規模で、掘り方は検出面下35~40cmに平場を築いて中段を形成する。中央や北側を長軸に沿い細長く掘り込んで底面に至るプランで、底面は幅15cm内外の長橿円形状となる。中段からの深さ45cm前後を測り、西端部が周壁・底面とも袋状に張り出す構造で、検出上端から最大で約30cmオーバーハングする。18~33グリッドに位置するSK94はSK96土坑と重複関係にあり、土坑埋積後に構築された陥穴である。検出段階ではその存在が不明であり、掘り下げ時にSK96の底面にて平面形が判明し、断面観察から新旧関係が捉えられた。南北方向に主軸をとる橿円形様プランで、検出面からの深さは85cm内外を測る。以上の5基は形態的特徴からSK70とそれ以外の二群に大別されるが、いずれからも出土遺物が得られなかつたことから、時期を特定することはできない。また、形態的に類似するSK43等の一群に關しても、配置関係や堆積土の状況から共時存在と判断するまでには至らなかつた。

形態的二大別

土坑のうち貯蔵穴と考えられる袋状形態を呈するものに、SK58・68・99の3基がある。これらは段丘縁辺部で近接した位置関係にあり、その規模や形態も近似している。SK58・68は24~30グリッドで、1.6m程の間隔を経て東西に並んで検出された。平面形はSK58が不整橿円、SK68が円形を呈し、長径はいずれも約90cm規模を測る。周壁は全周で開口より広く掘り込まれ、最大で20cm程オーバーハングして底面に至る。SK99はこれらより約6m南西方へ位置し、規模・形態的にはSK58に類似する掘り方がなされる。3基とも検出面からの深さは30cm前後を測る。19~33グリッドで北西~南東方へ直線状に配されるSK40・41・42の3基は、壁面の一部がオーバーハングして広がる形態の土坑である。大小はあるが円形を基調とするプランで、オーバーハングを受けるのは開口から5cm前後と共通して小さいことを特徴とする。

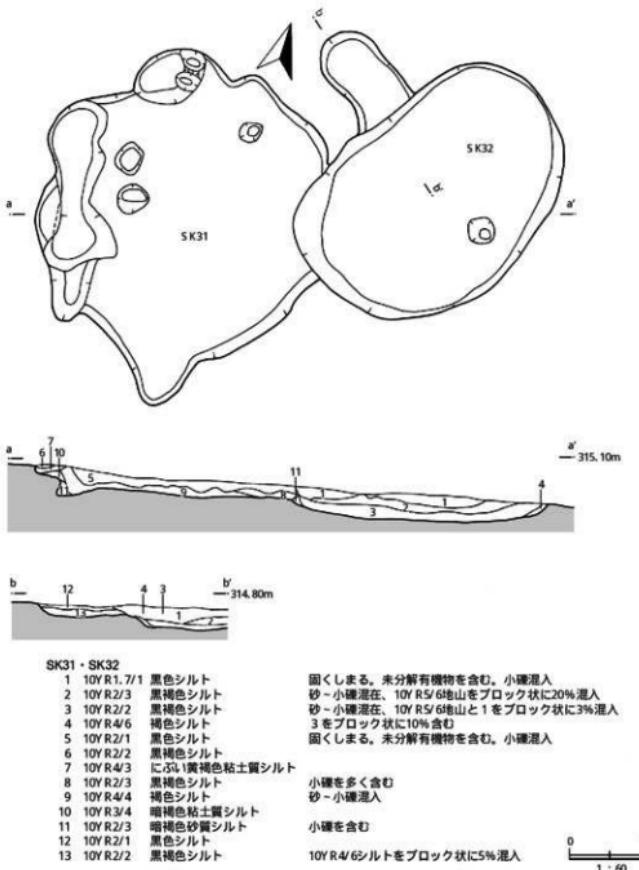
袋状土坑

南西隅部において検出されたSK31・32は大型のプランで、方形様の掘り込みとなるSK31は竪穴住居跡の可能性も示唆されたが、断定できるまでの証左は得られなかつた。16~33グリッドを主体に位置し、SK31東隅とSK32西隅が重複関係にあって、後者が前者を切る。SK31は東西約3.3m・南北3.6m規模の不整な方形を呈し、検出面からの深さは20cm内外を測る。底面は平坦に推移するが、西辺域で一段深く掘り込まれる箇所が見られ、明らかでないものの他遺構との重複とも考えられる。現況で北西側に農道があり、路盤の入替えが行われた影響を受

竪穴住居跡か?

けて付近は不安定な土質であったことから、査証は得られない。また、底面西半域には径30~40cm程のピット3基が認められたが、いずれも深さ15cm未溝の浅い掘り込みであった。

**遺物包含の土坑** 調査区南端の段丘縁辺部に配されたSK71・73・75は、遺構内からの出土遺物により所属時期が窺い知れる土坑群である。3基とも東西方に長軸をもつ橢円形態のプランで、平面規模に差が生じるもの、深さは30cm前後とほぼ均一である。覆土においても3層順の堆積と共通しており、遺物は第1層からの出土であった。

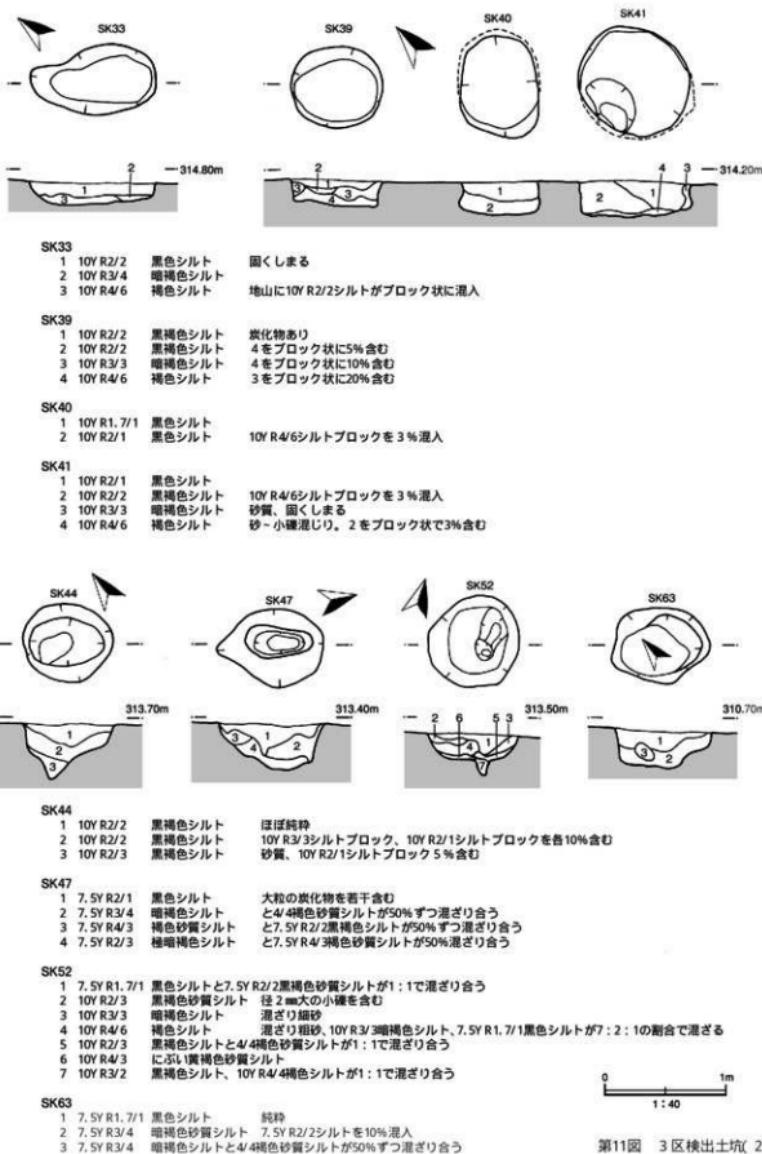


第9図 3区検出土坑(1)

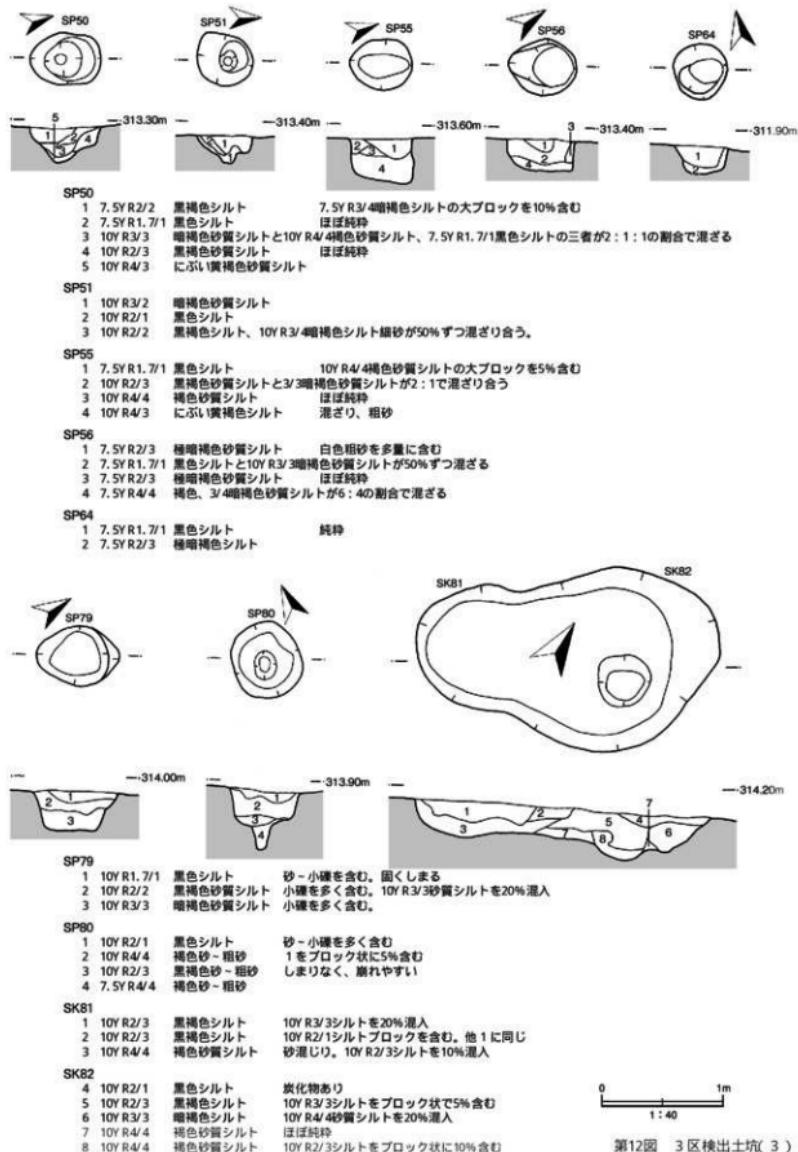


第10図 3区遺構配置図

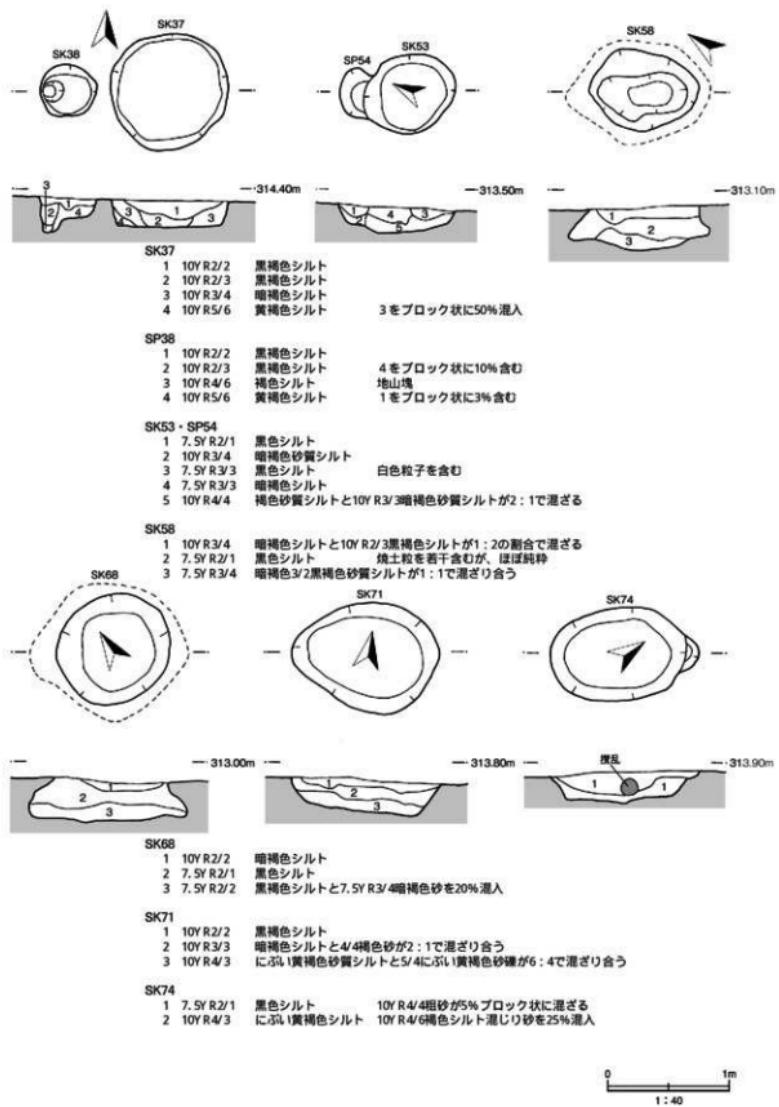




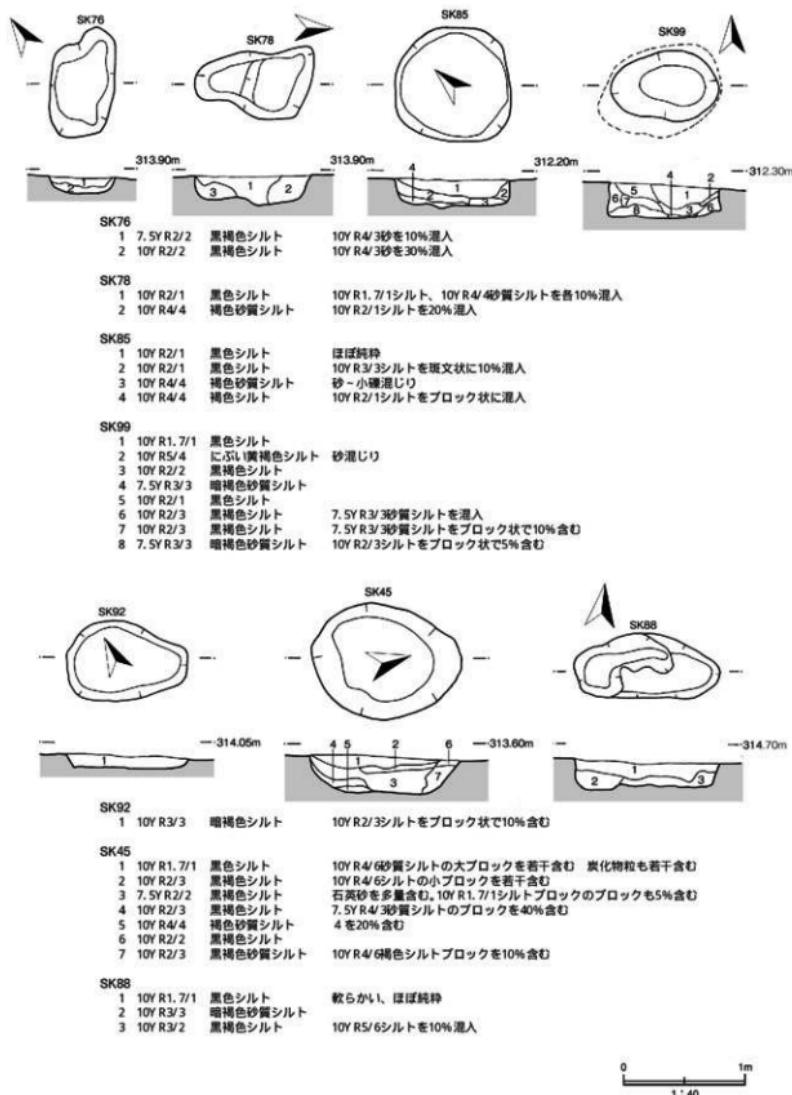
第11図 3区検出土坑(2)



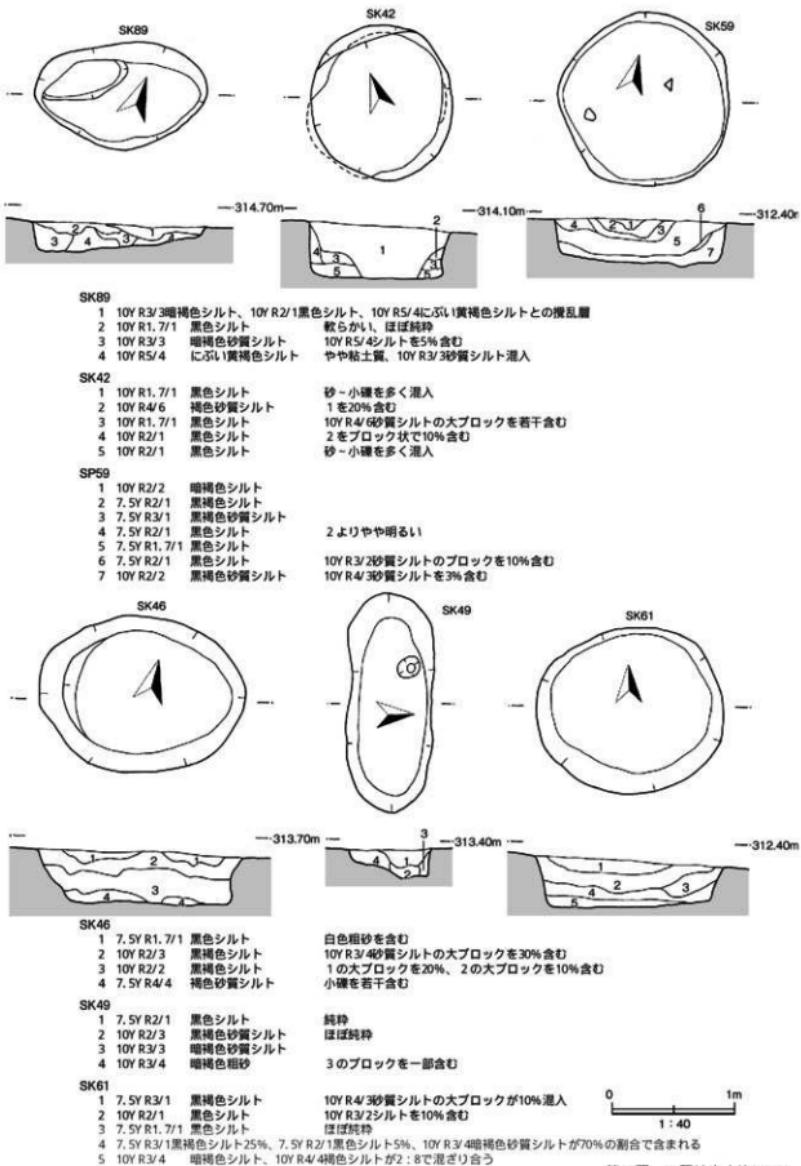
第12図 3区検出土坑(3)



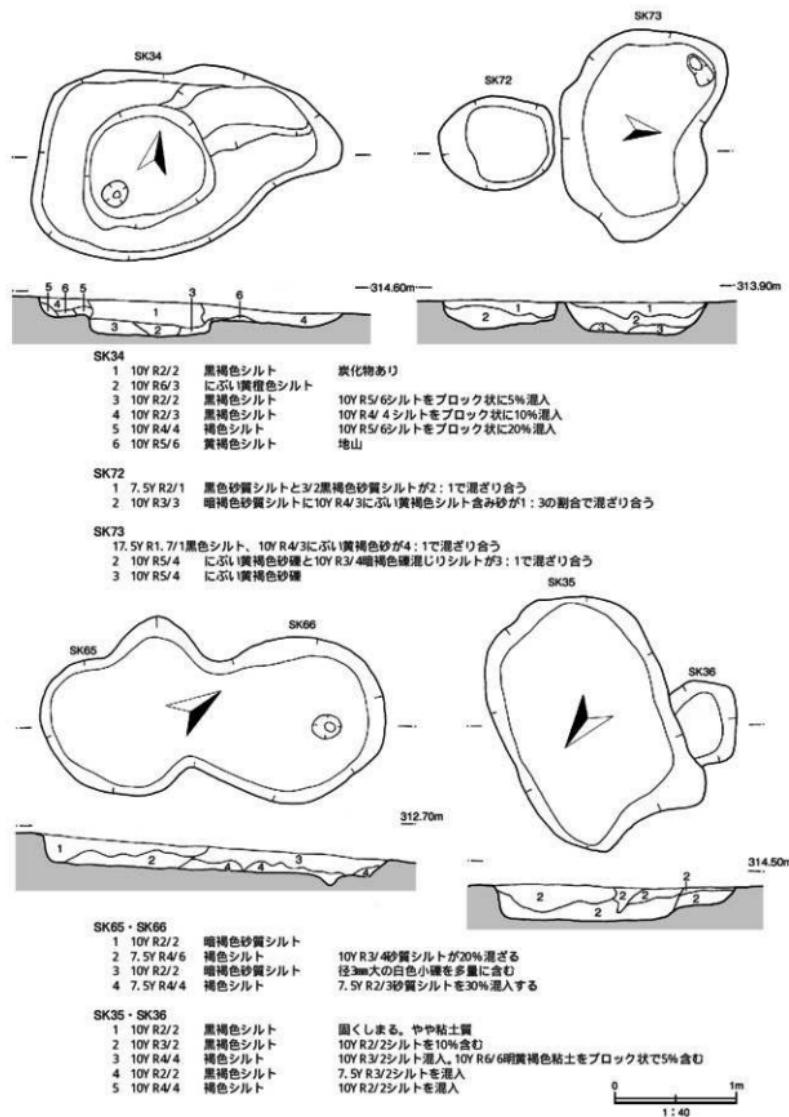
第13図 3区検出土坑(4)



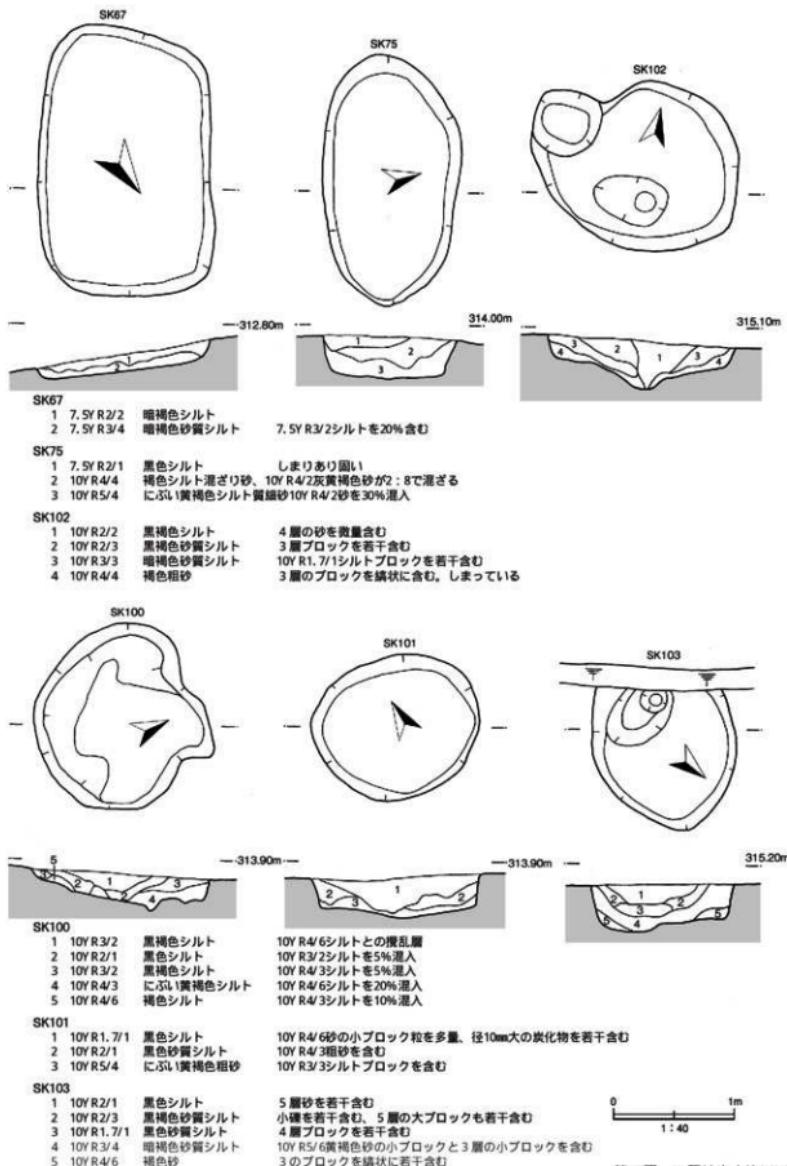
第14図 3区検出土坑(5)



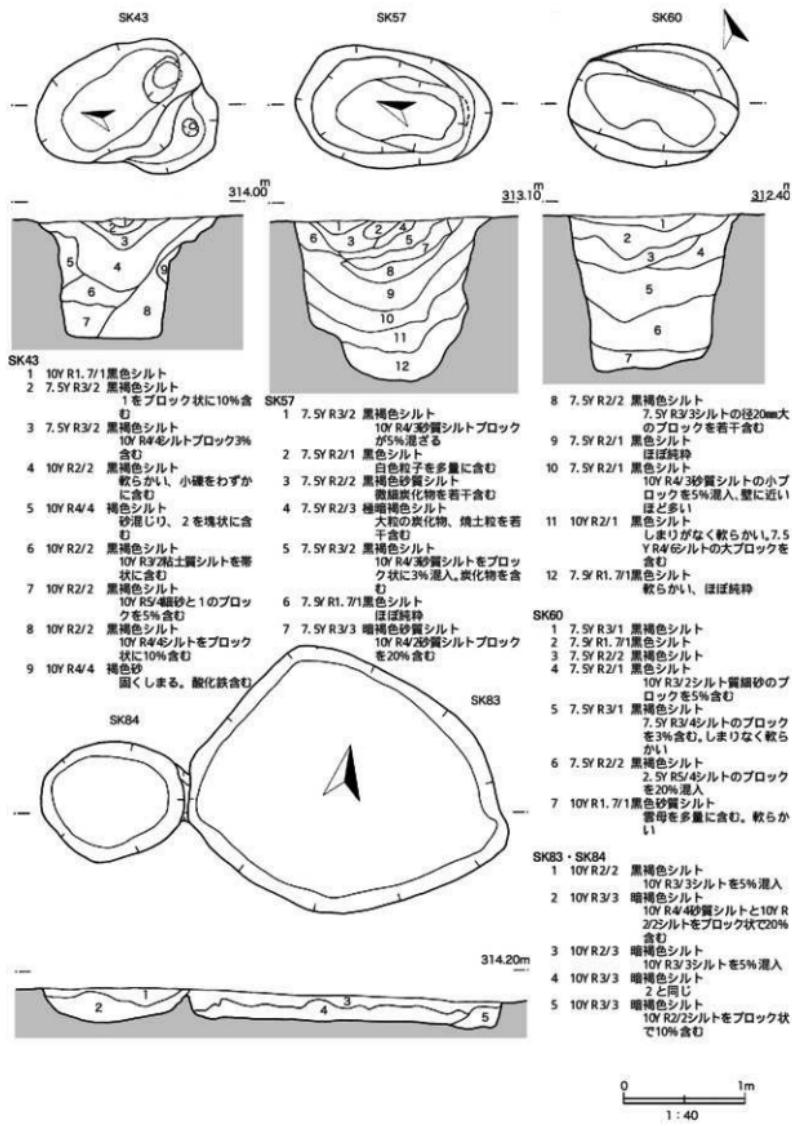
第15図 3区検出土坑(6)



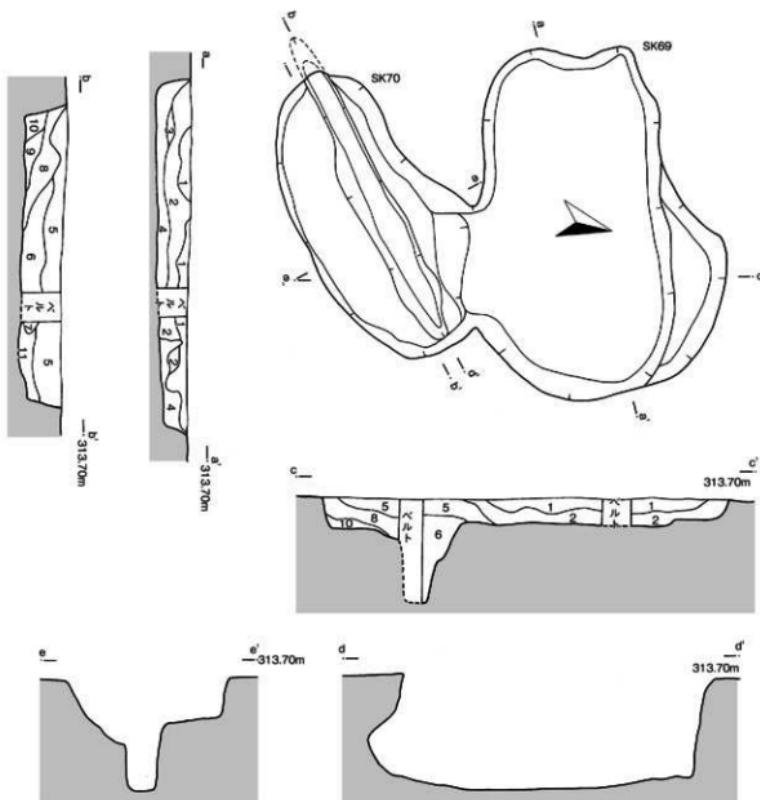
第16図 3区検出土坑(7)



第17図 3区検出土坑(8)



第18図 3区棟出土坑・陥穴(1)

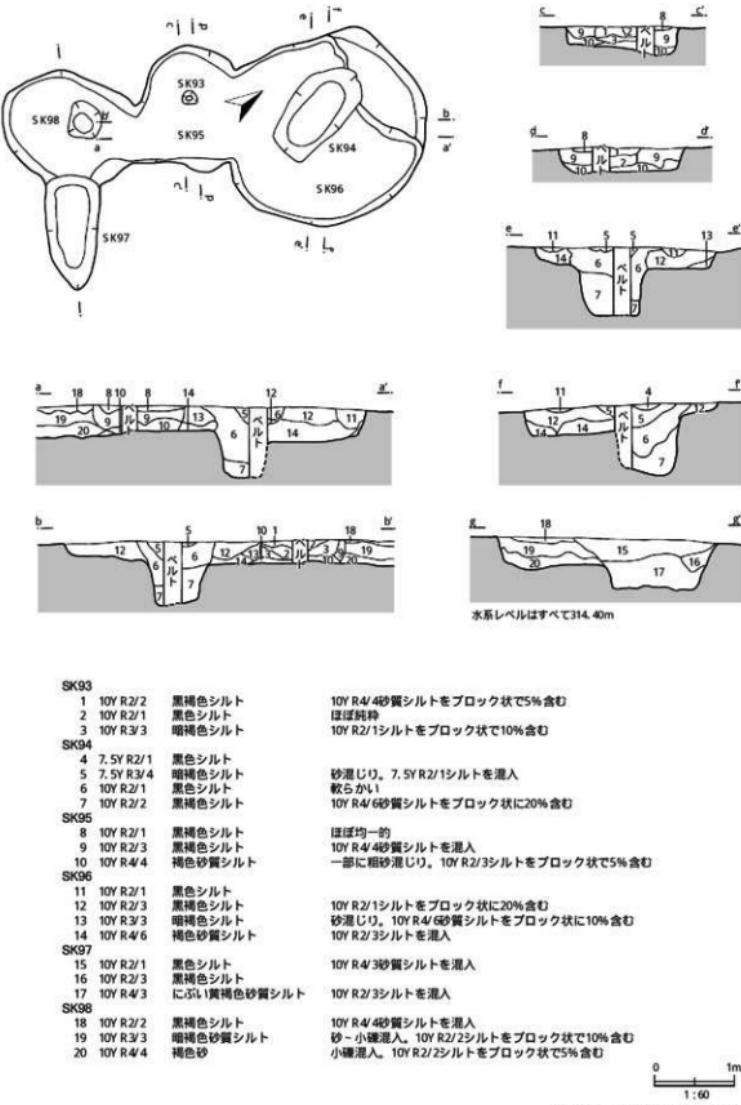


## SK69・SK70

- |               |   |                           |
|---------------|---|---------------------------|
| 1 10Y R2/3    | 黒褐色砂質シルト  | 10Y R3/4細砂が10%混じる         |
| 2 10Y R4/3    | にぶい黄褐色砂   | 10Y R2/3シルト質細砂が20%混じる     |
| 3 10Y R5/4    | にぶい黄褐色砂礫  | 純粋                        |
| 4 10Y R5/3    | にぶい黄褐色砂礫  | 10Y R3/4砂を30%混じる          |
| 5 7.5Y R1.7/1 | 黒色シルト、7.5Y R2/2黒褐色シルト、7.5Y R3/3暗褐色砂質シルトが50・30・20の割合で混じる |                           |
| 6 7.5Y R2/1   | 黒色シルト、7.5Y R3/2黒褐色シルト、10Y R3/3暗褐色シルトが40・40・20の割合で混じる    |                           |
| 7 10Y R2/1    | 黒褐色シルト  | 純粋                        |
| 8 10Y R2/2    | 黒褐色シルト  | 10Y R4/3砂が斑状に50%混じる       |
| 9 10Y R5/4    | にぶい黄褐色粗砂  | 10Y R2/2シルトのブロックを10%含む    |
| 10 10Y R3/3   | 暗褐色砂質シルト  |                           |
| 11 10Y R2/3   | 黒褐色砂質シルト  | 10Y R4/3砂のブロックを5%程含む。軟らかい |



第19図 3区検出土坑・隙穴(2)



第20図 3区検出土坑・隙穴(3)

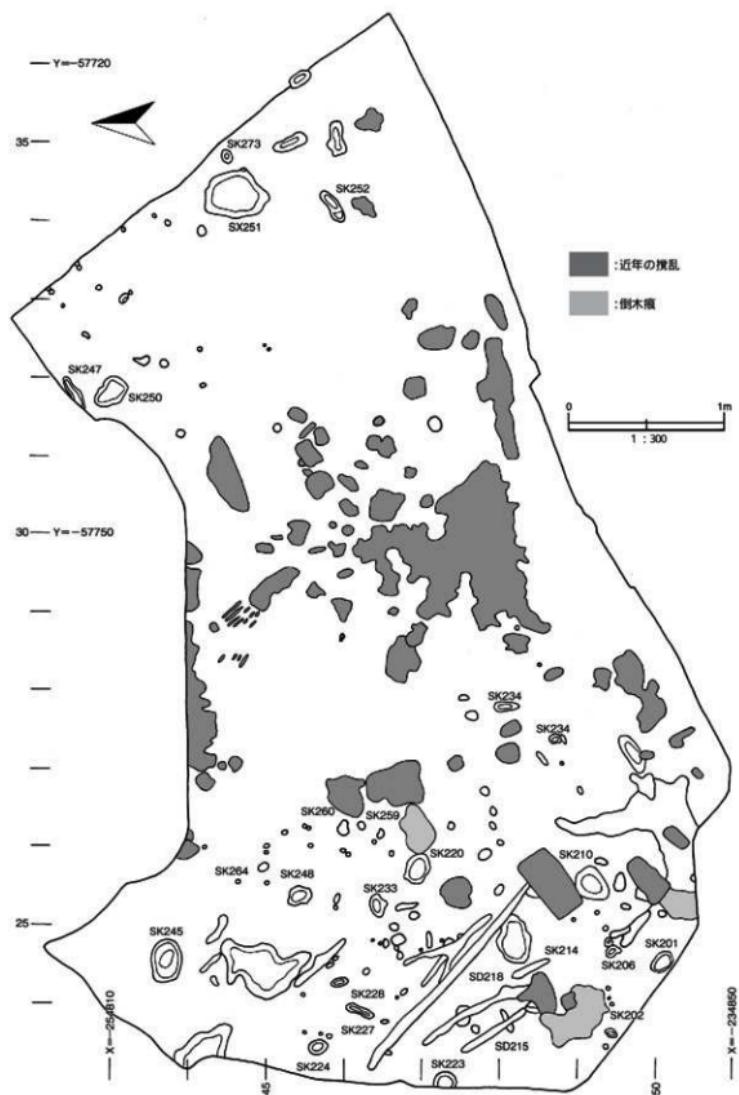
## 4 図(第21~27図)

中央域を中心近年の擾乱跡が隨所に見受けられ、遺構の検出は西半域が主体となった。3区同様に住居跡は確認されず、土坑や陥穴等が主である。陥穴はSK234・245・252の3基を認め、その配置は各々が単独的と察知される。SK234は南北に主軸を有し、細長い小判型の平面形をなす。長径1.65m・短径約55cm、検出面からの深さ60cm程と小規模であるが、これは土地改変により遺構上半部が削平されたことによる。掘り方は南・北端で特に垂直的であり、北壁および西壁の一部ではオーバーハングして外側へ張り出す。SK252は東端域の34—45グリッドに位置する、北東—南西方の主軸をもつ陥穴である。橢円形プランで、規模は長径2.3m・短径約90cm・中央部での深さ90cmを測る。掘り方は検出面下15cmで、南西部に半円状の平場を設けた後に底面まで掘り込んだようだ。このことから、陥穴主体部の長径は1.8m規模となる。形態は上端面に対して底面の幅がかなり狭くなるのが特徴で、下半部はほぼ垂直に掘り込まれる一方、上半には段を形成する掘り方がなされる。調査区西北部の段丘縁辺域で検出されたSK245は、大型円形プランの陥穴である。上端径約2.3m・深さ1.1m前後の規模を測り、壁面に幾つかの段を形成しながら掘り込まれる。断面形が擂鉢形を呈し、底面は北西—南東方に主軸をもつ橢円形状となる。底面には東半部を中心に、逆茂木を設置したと考えられるピット・小穴が検出された。逆茂木痕底面東半の中央に径15cm程のピットが存在し、これを囲うような配置で壁際に複数の小穴を掘り込んでおり、うち1基からは逆茂木の一部かと目される木片が出土している。小穴は竪穴住居の壁柱穴のように底面壁際に散在するが、配置が不規則なうえ西半部には認められない。なお、ピット・小穴の深さは底面から3cm内外を測った。

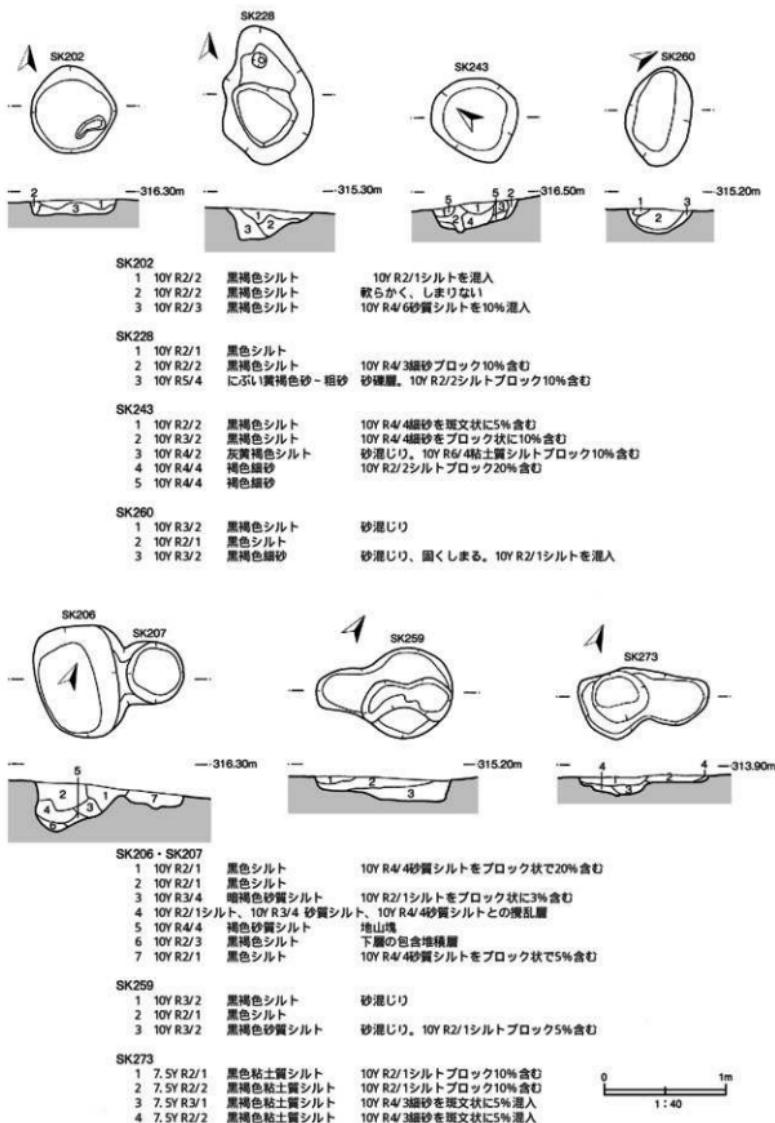
遺構内から一定量の遺物が出土した例として、SK214・220・224等が挙げられる。24—48グリッドに位置するSK214は、東西方向の長軸を有する橢円形状の土坑である。東西約2.5m・南北約1.7mの規模を測り、検出面からの深さ最深33cmで、底面が東側へ向かい徐々に傾斜して深くなる。遺物は検出面上において、土器片等が散在した状況で出土しており、土坑が埋没する最終段階に廃棄されたと推察される。SK220は25—46グリッドで検出した、平面形が隅丸方形を呈する土坑である。規模は長軸約1.8m・短軸約1.3mで、東側辺に半円状の浅い張り出しを伴う。底面までの深さは南東域で25cm程を測るが、張り出し部に沿って径70cmの範囲が擂鉢状に掘り込まれ、検出面からは40cmの深さとなる。遺物は西半域を主体として底面からやや浮いた状態で出土し、土器片のほか石錐などのtoolや凹石などの礫石器を認めた。調査区西端部にて検出したSK224は、東西方の断面形が袋状形態を呈する。径約1mの円形プランで、西壁で開口部よりもオーバーハングして広がるのに対し、中段より下方が幾分抉られる東壁の底辺は開口部よりも内側に收まる。遺物は中央から南西壁面にかけての範囲で、覆土1層内からの出土が主である。

須恵器襖片(第30図90)の出土から平安期の遺構と目される飲状の溝跡群は、調査区西部から検出された。北西—南東方の主軸で構築されるが、平行関係からSD215・217等の一群と、その東側に位置するSD218・232等の一群に大別される。上端幅50cm内外・深さ約10~15cmで、検出長は最短約4.5m(SD232)・最長約16m(SD218)である。これらのうち、SD219は前群と後群が重複した溝跡と窺われ、検出面上での新旧関係は不明ながら、覆土の堆積層序から前群の方が先行したものと推測される。

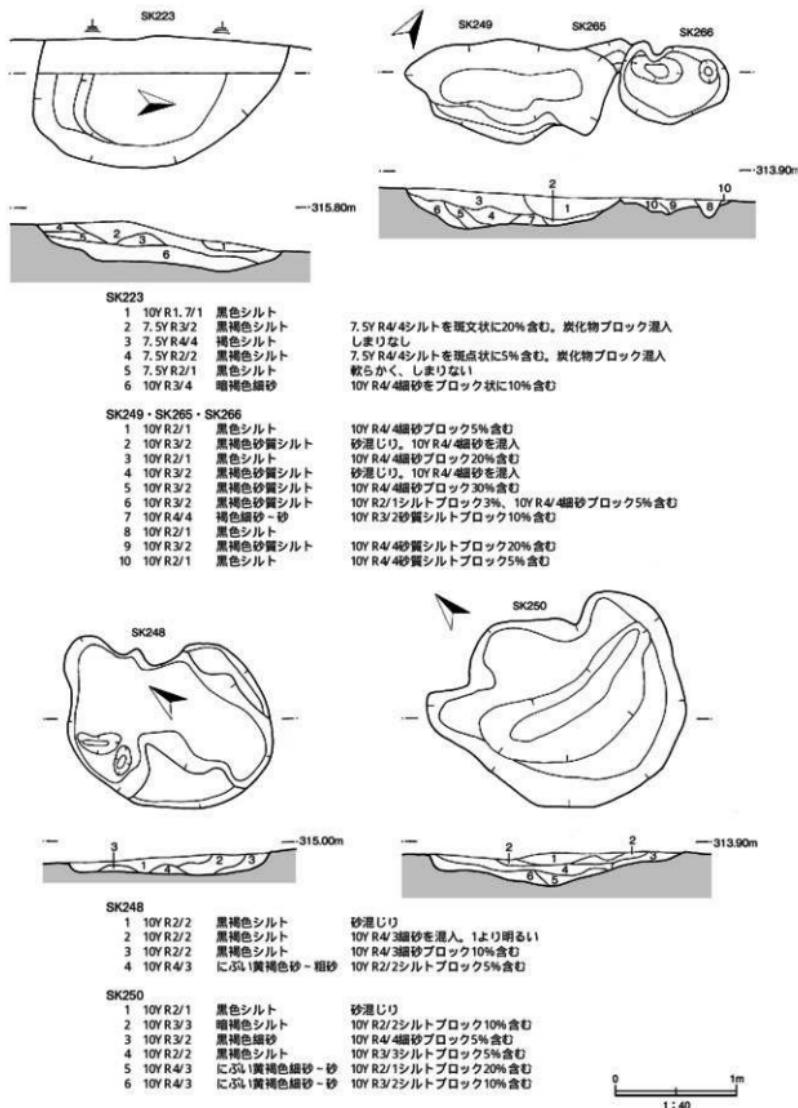
平安時代の  
飲状溝跡群



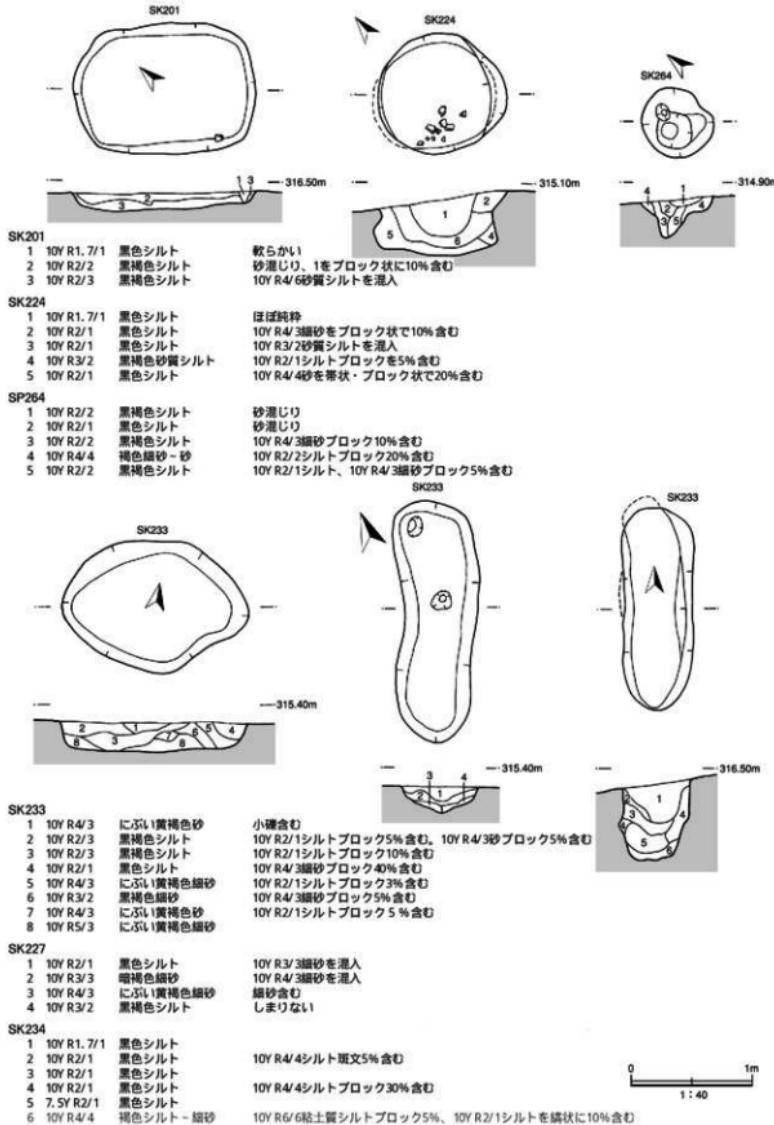
第21図 4区遺構配置図



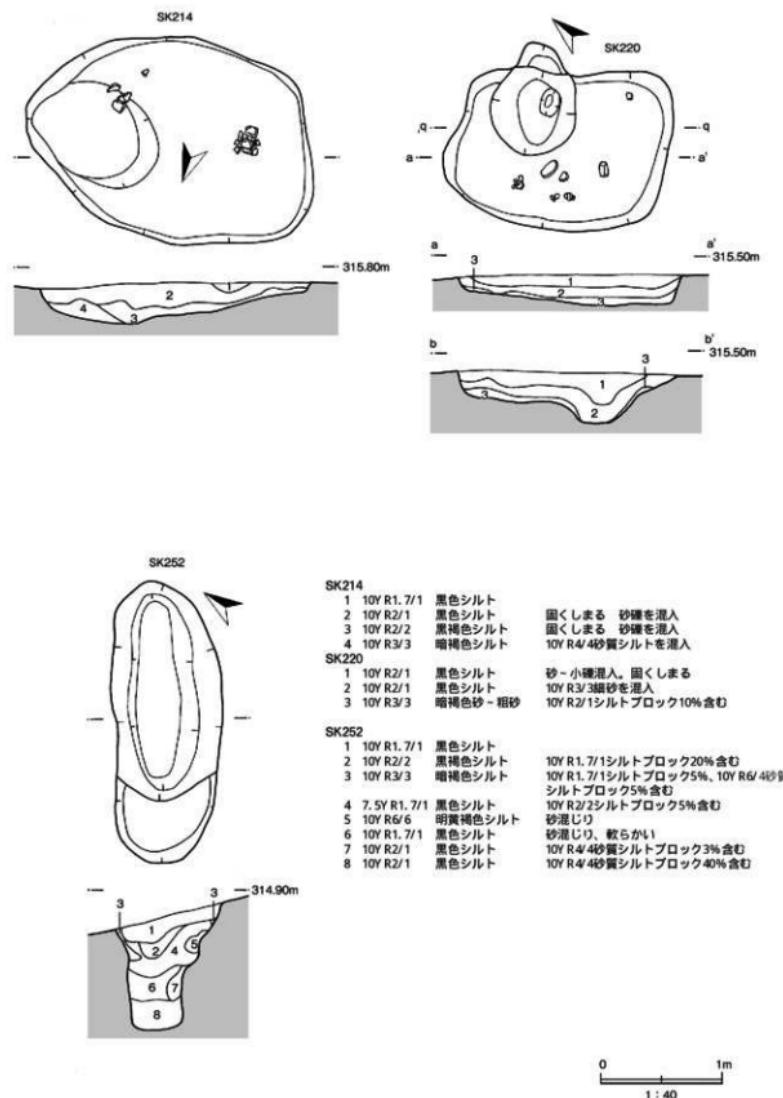
第22図 4区検出土坑(1)



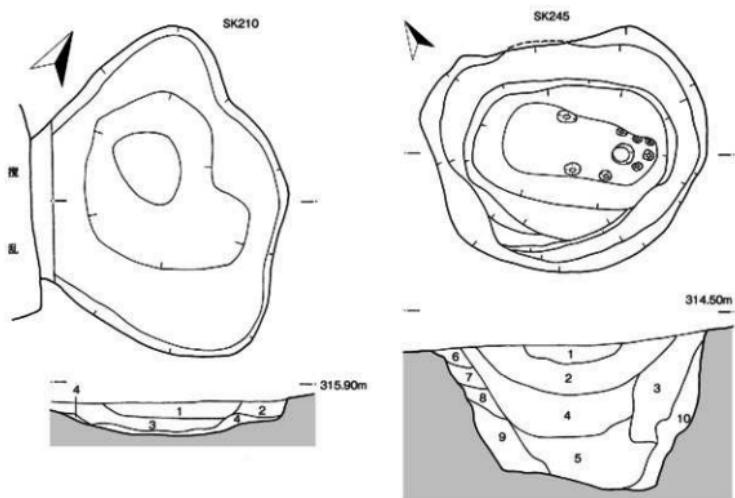
第23図 4区検出土坑(2)



第24図 4区検出土坑・隙穴(1)



第25図 4区検出土坑・隙穴(2)

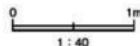


## SK210

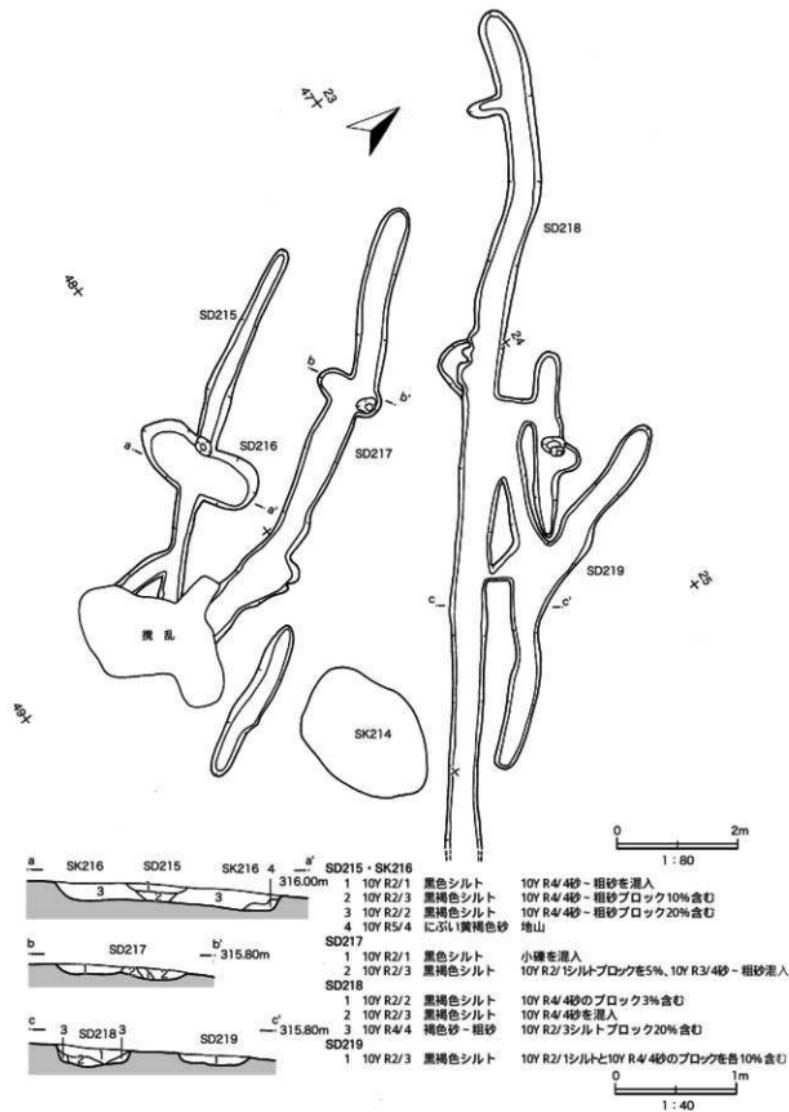
- |   |          |            |                            |
|---|----------|------------|----------------------------|
| 1 | 10Y R2/1 | 黒色シルト      | 10Y R4/4砂質シルトブロックを3%含む     |
| 2 | 10Y R2/1 | 黒色シルト      | 10Y R4/4砂質シルトブロックを20%含む    |
| 3 | 10Y R2/2 | 黒褐色シルト     | 10Y R4/4砂質シルトを混入、砂混じり      |
| 4 | 10Y R4/2 | 灰 黄褐色砂質シルト | 砂混じり。10Y R2/2シルトブロックを10%含む |

## SK245

- |    |          |             |  |
|----|----------|-------------|--|
| 1  | 10Y R2/1 | 黒色シルト       | 10Y R3/3シルトブロック10%含む                     |
| 2  | 10Y R3/3 | 暗褐色シルト      | 10Y R2/1シルトブロック5%、10Y R2/2シルトブロック20%含む   |
| 3  | 10Y R2/2 | 黒褐色シルト      | ほぼ純粹                                     |
| 4  | 10Y R3/3 | 暗褐色シルト      | 10Y R2/2シルトブロック10%、10Y R5/3砂質シルトブロック5%含む |
| 5  | 10Y R2/2 | 黒褐色シルト      | 10Y R5/3砂質シルトブロック20%含む                   |
| 6  | 10Y R2/1 | 黒色シルト       | 10Y R5/3砂質シルトブロック5%含む                    |
| 7  | 10Y R2/1 | 黒色シルト       | 10Y R2/2シルト、10Y R5/3砂質シルトブロック10%含む       |
| 8  | 10Y R2/2 | 黒褐色シルト      | 10Y R5/3砂質シルトブロック10%含む                   |
| 9  | 10Y R2/1 | 黒色シルト       | ほぼ純粹                                     |
| 10 | 10Y R5/3 | にぶい黄褐色砂質シルト | 10Y R2/2シルトブロック、10Y R3/2細砂ブロックとの互層       |



第26図 4区検出土坑・隙穴(3)



第27図 4区検出溝跡

### 3 出土遺物

#### 縄文土器(第28~32図)

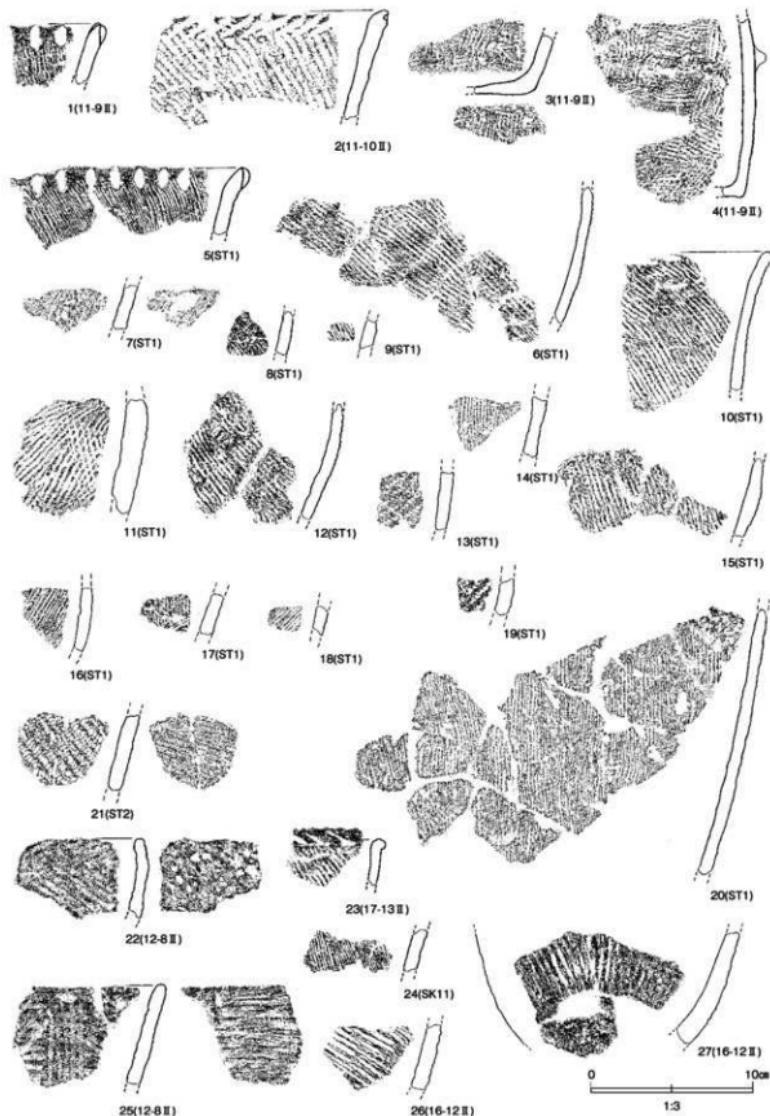
土器の出土量は整理箱にして4箱分であり、量的にかなり少ない。完形品ではなく大半は小破片で、復元して器形が窺えるものは一部に限られた。図化は図上復元が可能なものと文様のある口縁部片を中心に行い、掲載にあたっては調査区ごとに扱った。以下では、主として文様での分類によって大別した後に、主要なものについて個々の説明を加えたい。

##### 第I群土器(縄文時代早期)

- 1類：沈線文土器で、太い棒状工具あるいは竹管状工具の表皮側を器面にあてて施文するも貝殻沈線文土器  
 $\times (35 \cdot 45 \cdot 60 \cdot 68 \cdot 69)$  器面は精緻に研磨される例が多い。
- 2類：横走平行沈線の区画間に、間隔が密で短い斜位の沈線文を施すもの(59)。斜方向の沈線は一端が鋭角的となる。
- 3類：沈線文・押引文・刺突文により文様構成されるもの。口縁部資料には平縁と波状縁のものがあり、いずれも内弯する形態が知られる。これらは施文要素の組み合わせにより、以下のように細分し得る。
- a : 沈線文 + <状押引文+柳葉形連続刺突文(75・122・130・139・148)
  - b : 沈線文 + 列点状連続刺突文(61・64)
  - c : 沈線文 + 貝殻条痕文(63)
- 4類：棒状工具等による連続刺突文が重層的に施文されるもの(131・145・146・153・154)。文様構成は爪形などの同一文様が繰り返して施され、口縁形態に則してか波状に表現している例もある。
- 5類：絹条体压痕文土器(13・19)。小片のために他の文様要素が認められないもの。胎土中には砂粒を多く含み、纖維は混入されない。
- 6類：表裏面ともに無文のもの(57・62)。
- 7類：条痕文を施文する一群で、二種に細分される。
- a : 表裏面に条痕文を施文するもの(22・25)。幅広で浅い条痕文が施され、微隆起線的な効果を得ている。
  - b : 表面にのみ条痕文が施されるもの(26・27)。裏面は丁寧な研磨が行われる。
- 8類：器表面に縄文あるいは撚糸文、裏面に条痕文を施文するもの(7・21・70・85)。口辺部資料には、口唇から口縁部裏側にも縄文地文を施文するものがある。
- 9類：表面に撚糸文や縄文を施文する一群である。器面調整の粗雑な事例が多い。これらは、他の施文要素の有無により細分される。
- a : 脣部上位に隆帯を付加するもの(3・4)。
  - b : 地文の上に半截竹管状の工具による山形沈線文を描出するもの(71)。
  - c : 口唇に斜位のスリットを有するもの(2・10・23)。または、口端に縦長椭円状の刻目文を施すもの(1・5)。
  - d : 地文のみの脣部片を一括する(6・8・9・11・12・14・15~18・20・24・141・156)。

## 第II群土器(縄文時代前期)

- 絡条体压痕文** 1類：縄文原体側面压痕文+短沈線文で文様構成されるもの(72・73・77・78・95・102・114~118・129・132・134・136~138・140・142・147・149・152)。口縁部資料では、口唇に刻目が施される事例が多い。
- 2類：口唇や口縁に横円状、または斜沈線などによる連続した刻目を施文する類(80・98・151)。直下に斜行縄文が施されるが、隆帯を付加するものもある。
- ループ文** 3類：ループ文が施文されるもの(34・40・42・43・49~51・58・92・93・97・105)を一括する。口縁部資料では三角形などの無文部分を作出する例が見られる。
- 羽状縄文** 4類：羽状縄文を施文するもの。原体結束の有無により、a：非結束(46・53・74・76・79・91・101・106・112)、b：結束(47・48・52・55・56・127・135)に細分しておく。
- 5類：0段多条縄の閉端部を強く押捺回転し、山形の閉端部压痕を多段で施文するもの(110・123・124・128・133)。ループ文同様の文様効果を得ている。
- 6類：棒状工具等により平行沈線文が施文されるもの(30・44・88)。口縁部資料で、口唇に三ツ山状の小突起を付加する。
- 刺突文** 7類：多段連続刺突文が施文される類で、刺突文様の差異で細分する。  
a：底辺や底面に爪形刺突文を施すもの(37~39・103・104・108)。  
b：V字状刺突文が重層する底部資料(41)。
- 竹管文** 8類：各種の竹管文が施されるものをまとめて本類とし、施文法の相違で細分する。  
a：半截竹管平行沈線内に刻目文を充填するもの(67)。  
b：半截竹管状工具で押引状の連続刺突文を施文するもの(125)。  
c：半截竹管等による山形沈線文を施文するもの(81・83・155)。  
d：口縁部に竹管状工具による円文を連続して施文するもの(36)。
- 9類：刻目を付した粘土紐貼付文(隆帯文)が施されるもの(113)。
- 10類：単節縄文(28・29・31~33・54・84・89・94・96・107・143・150)の他、0段多条の斜縄文(109・119・121・126・144)、複節縄文(99・100・120)、結節縄文(86)など体部地文のみのものを一括する。
- (1) 1・2区出土の土器(第28図)
- 方形容土器** 豊穴住居跡出土資料を含め、早期後葉から末葉に帰属するもので占められる。3・4は復元し得なかつたが、特異な角底形態となる深鉢の同一個体である。口縁部を欠いた現存高110mmを測る小形品で、方形もしくは長方形状の角筒形を呈すると察せられる。断面が三角形様となる横位の隆帯を廻らすようで、これは口縁部と体部を区画するものであろう。底面を含む全面に粗い燃糸文が多方向から施され、施文は隆帯側面にも及ぶ。胎土には粗砂粒の混入が目立ち、少量ながら繊維を含んでいる。内面は研磨されて平滑で、3の底部隅には煤が付着している。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好と言える。
- 2区出土のものは住居跡内の資料を主に掲載し、第I群の5類から9類に属する内容が確認できた。細片のため器形を窺えるものがなく、地文以外の文様要素が知られる事例は、5・10・23等の口縁部片に見られる刻目文に限られた。27の底辺部資料からは、丸底もしくは乳房状の尖底となる器形が窺い知れる。



第28図 1・2区出土土器

## (2) 3区出土の土器(第29図)

拓影図主体の細片資料である。第I群土器1~3類および6類と第II群の各類で組成され、遺跡最古の一群数的には前期所属土器が多数を占める。出土土器の中では最も古い早期中葉に比定できる類が認められ、砲弾状の尖底部資料(66)を含んでいる。早期の土器群は貝殻沈線文系土器であるが、出土資料を見る限りでは口縁部が多いためか、棒状工具等による平行沈線や刺突が主流である。また6類の無文土器を含めて、すべて口縁が内弯する器形で統一される。これら第I群に属する土器の出土地区は、調査区中央域にまとまる傾向が指摘できる。

底部全面施文 第II群土器ではループ文や羽状縞文などのいわゆる回転縞文の類が主体を占め、羽状縞文は結束された原体による施文例が目に付く。30・44は近接した別遺構内から出土した口縁部があるが、同一個体と目される。41は半截竹管様の角張った施文具によって、底辺から底部全面にV字形刺突文が重層的に施され、キャタピラ状を呈する装飾的な文様を描出している。

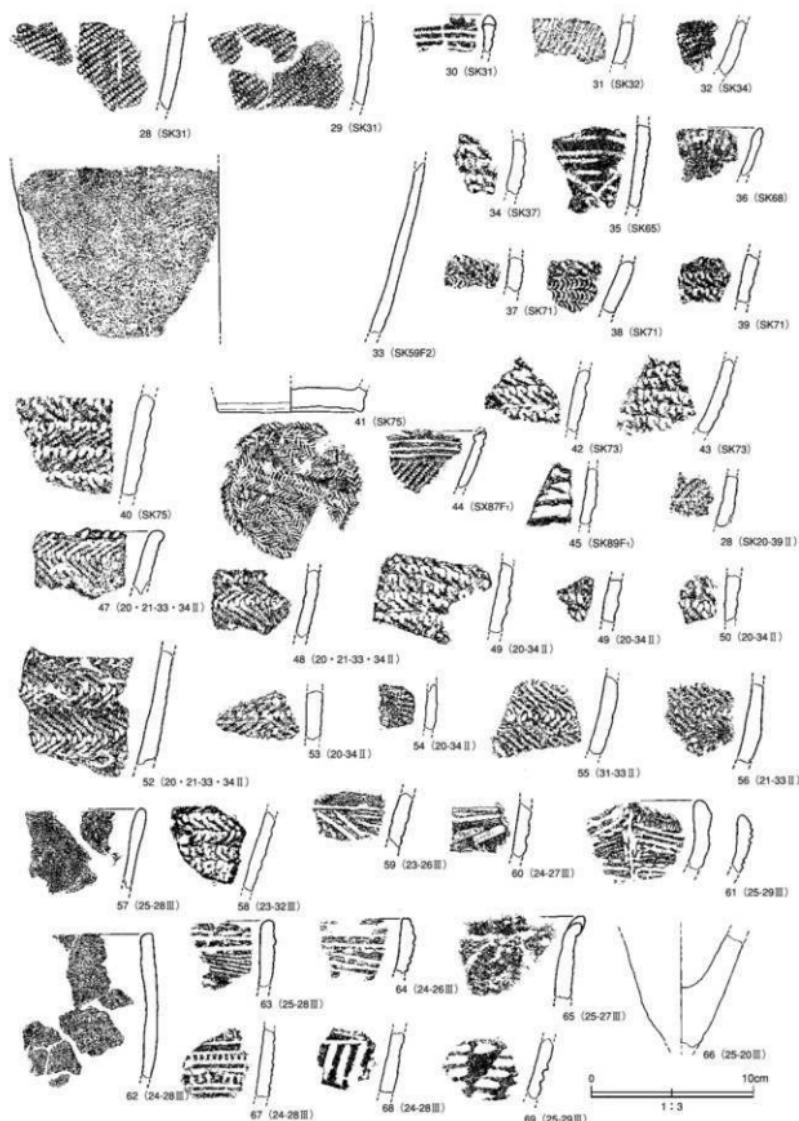
## (3) 4区出土の土器(第30~32図)

遺構内出土のものと包含層取り上げのものに分けて掲示した。数的には第II群土器が圧倒しているが、早期所属の土器も一定量を占める。時期的には早期中葉から前期前葉までの内容を含み、出土数も他の調査区と比較すればまとまっている。

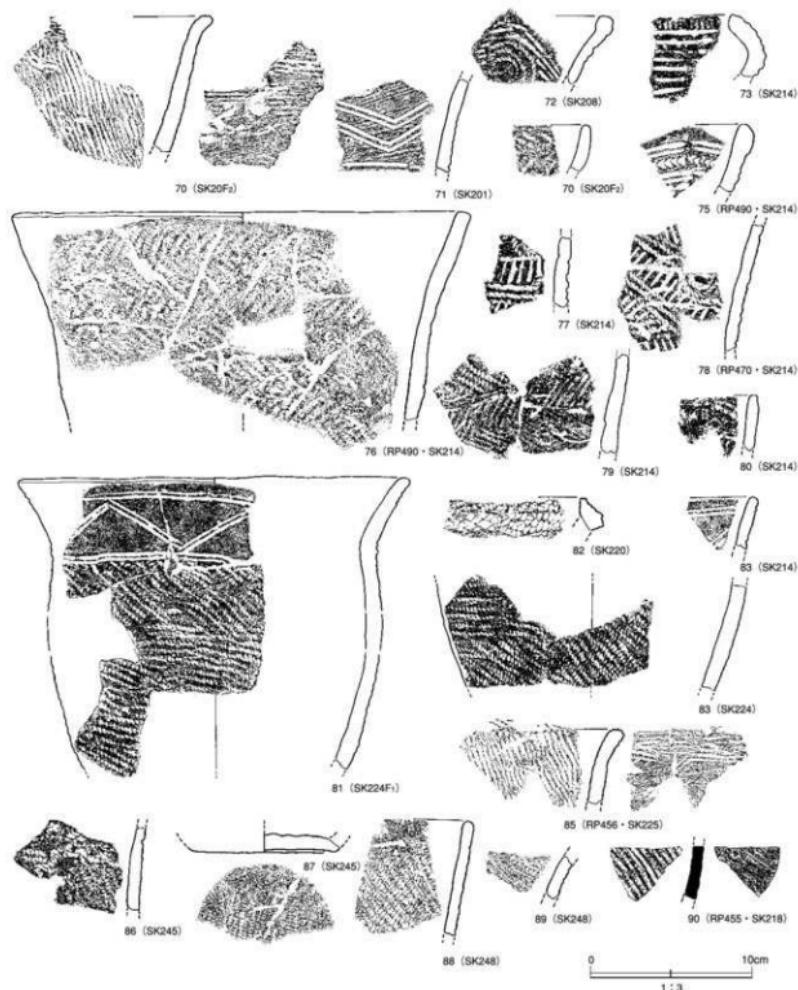
第I群土器は3・4類(貝殻沈線文系)および8・9類(繩文条痕文系)で組成される。3類土器の5点(75・122・130・139・148)は同一個体であり、区画沈線内に特徴的な「状押引文」と柳葉形の刺突文を連続して施文し、口縁形態は4単位の波状縞を呈すると思われる。4類に見られる刺突文はいずれも口辺部に施されたもので、爪形文以外にも角張った半截竹管状工具の内側を鋭角的にあてたもの(153・154)が知られる。遺構内出土で8類の85は、口唇から口縁部裏側にも燃糸文の施文が認められる。70・85の口縁は、短く外反することが特徴である。これら早期所属の土器は、出土地区が調査区西半の南西域と北東域に二分される。

器形分類 第II群土器は1~10の各類で組成され、図上復元にて全形もしくは上半部の器形が窺える資料が存在する。破片資料も含め、73のごとく口縁部がくの字状に内屈するもの、76・109等のように直線的な胴部から口縁部が緩やかに外傾する形態、91に見られる口縁部が内弯する器形、および81に代表されるよう頸部で絞まって口縁部が外反するタイプの、都合四種が知られる。口唇は丸みを帯びるものと平らな面を有するものに大別され、前者は内弯・内屈器形に、後者が外反・外傾器形に多いようだ。口縁形態には平縞と波状縞のものがある。1類に属する140・149は同一個体で、上半部の文様構成が窺われる資料である。緩やかにくびれた頸部に縦位方向の連続刺突による刻目文を廻らし、口辺部文様帶と胴部とを区画している。口辺部には沈線間に藤状の圧痕文が配され、胴部の地文は撚りの異なる2本の原体による非結束の羽状縞文である。3類中の口縁部片92・93は同様の文様構成がなされるが、区画沈線文の有無による相違がある。92は沈線により三角形様の意匠を作出し、区画内にループ文を充填する施文法が用いられるのに対し、93は沈線を引かずして施文範囲に充填する手法で同様の文様帶が描出される。底辺・底部資料では底面に胴部文様の刺突(103)や燃糸文(87)を施す例を認め、胴部下端の底縁までの施文が一般的であるが、107は下端の地文を磨消して無文部を作出している。9類の113はV字状の粘土紐上に列点による刻目を付すもので、貼り付けは地文の斜縞文施文後に行われたようである。

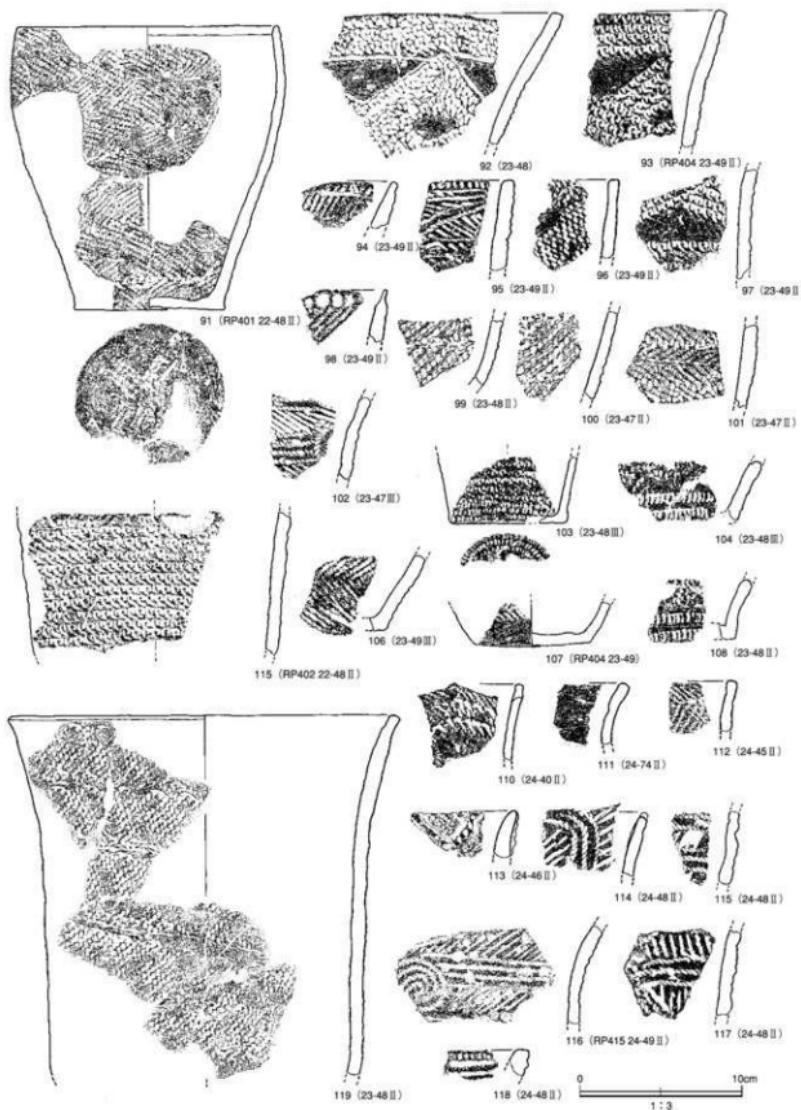
## 磨消縄文



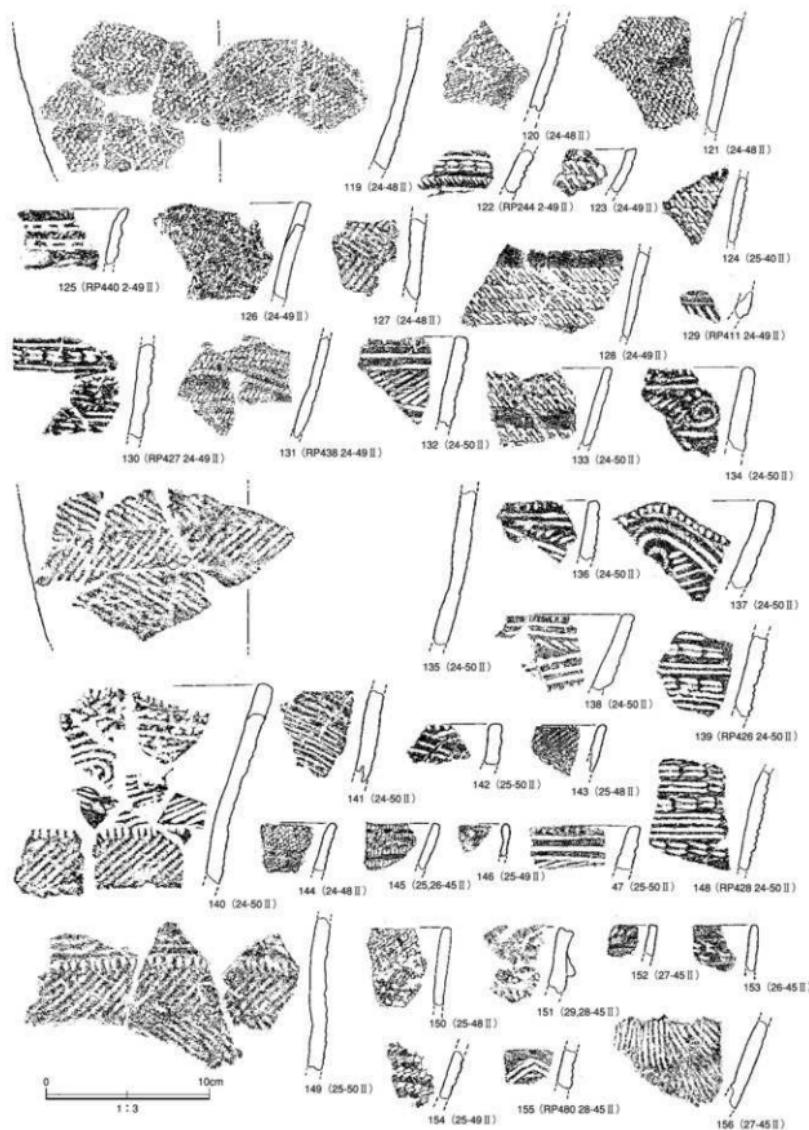
第29図 3区出土土器



第30図 4区出土土器(1)



第31図 4区出土土器(2)



第32図 4区出土土器(3)

## 石器・石製品(第33~50図)

石器では打製・磨製石器と疊石器の別があり、石製品として玦状耳飾りが2点出土している。打製石器には石鏃・石槍・石錐・石匙・石範・搔器・削器などの定形的器種が認められる。また、疊石器では砥石・凹石・磨石・敲石などを認めている。

打製石器の各器種は、出土点数が1・2点の石槍と搔器、および抉入石器を除き、その形状および加工部位の相違により、以下のように分類される。

打製石器の分類

<石鏃> 折損品や未成品を含め14点を掲載した。

I類：基部側に抉り込みの入るもの。1点出土。

II類：基部側が直線状をなす平基鏃。4点出土。

III類：基部側が丸みを帯びて突出する形態となる円基鏃。1点出土。

IV類：折損して基部の形態が不明なものと、未成品と考えられるもの。13点が該当する。

<石槍> 基部を折損した資料が1点出土している。

<石錐> 5点出土しており、二類に分類可能。

I類：剥片の一端を尖らせて刃部としたもの。3点出土している。

II類：細長い棒状形態となり、基部と尖頭部との境界が不明瞭なもの。2点を認めた。

<石匙> 側縁が刃部となる継形のものが7点出土している。

I類：左右対称形となるもの。

a：両面加工によって尖頭器のような先端部をもつもの。1点出土。

b：片面加工であるが尖頭器のような先端部をもつもの。1点出土。

c：折損のため先端部形態の不明なもの。1点出土。

II類：左右が非対称のもので、刃部形態の相違からさらに細分できる。

a：両面加工で右側縁が弧を描き、左側縁がくの字状に屈曲するもの。1点出土。

b：片面加工で、幅広の先端にも刃部を有するもの。1点出土。

c：背面側に主要剥離面の押圧剥離が深く入いるための調整剥離を施している、いわゆる「松原型」石匙。2点出土している。

松原型石匙

<石範> 折損品や未成品と考えられるものを含め23点を認めている。

I類：撥形で刃部が両刃状となるもの。

II類：撥形で刃部が片刃状となるもの。次のように細分される。

a：背面側はほぼ全面が調整加工面で覆われるが、主要剥離面側は側縁部だけに周辺加工が施されるもの。

b：背面側はほぼ全面が調整加工面で覆われるが、主要剥離面側は刃部に浅い加工が認められるもの。

c：主要剥離面側に加工が認められないもの。

III類：短冊形で刃部が片刃状となるもの。

a：両面加工のもの。

b：背面側はほぼ全面が調整加工面で覆われるが、主要剥離面側は側縁部だけに周辺加工が認められるもの。

c：背面側はほぼ全面が調整加工面で覆われるが、主要剥離面側は刃部に浅い加工が

認められるもの。

IV類：平面形が撥形にも短冊形にもならないもの。

V類：刃部の折損品や未成品と考えられるもの。

<撹器>素材の長軸先端部に刃部を作出したものが2点出土している。

<削器>14点が出土しており、素材形や刃部の作出方法により大別され、その位置関係等の相違から細分される。

I類：縦長剥片を素材とし、両面加工によって刃部が作出されるもの。1点出土している。

II類：縦長剥片を素材とし、両面加工によって作出された刃部と片面加工によって作出された刃部を合わせもつものの。1点出土。

III類：縦長剥片を素材とし、片面加工によって刃部が作出されるもの。さらに細分できる。

a：素材の左側縁が刃部となるもの。背面側に加工が施されるa1と、主要剥離面側に加工が施されるa2がある。a1が3点、a2は1点出土。

b：素材の右側縁が刃部となるもの。背面側に加工が施されるb1と、主要剥離面側に加工が施されるb2がある。b1が1点、b2は2点出土。

c：素材の両側縁が刃部となるもの。両側とも背面側に加工を施した資料が2点出土している。

d：素材の右側縁と末端が刃部となるもの。両側縁とも背面側に加工が施されたものが1点出土している。

IV類：横長剥片を素材とし、両面加工によって作出された刃部と片面加工によって作出された刃部を合わせもつものの。1点出土。

V類：横長剥片を素材とし、片面加工によって刃部が作出されるもの。1点出土。

#### (1) 1・2区出土の石器(第33・42図)

点数が少なく、1区から出土した打製石器2点・礫石器1点、2区では3点の打製石器と礫石器2点を掲載した。1区出土の1は石匙IIa類、2は背面側に自然面を残す撹器である。3~5はST1・2住居跡から出土したもので、IV類の石鎌、石錐I類、削器IV類がある。礫石器(71~73)は磨石として使用したと考えられるもので、形態には棒状や扁平の別が認められる。

#### (2) 3区出土の石器(第34・35・42図)

17点の打製石器と7点の礫石器を掲載した。石鎌(6~8)にはI・II類と未成・折損の各1点がある。9は唯一認められた石槍であるが、基部側は折損のため不明である。10~11は石錐でそれぞれII類・I類に属し、12はIaに分類される石匙である。6点掲載した石鎌(13~18)はIIa・IIc・IV・Vの各類で組成され、IV類とした18の刃部はインバースリッパによる加工が施される。削器4点(19~22)はいずれもII類に属するものであるが、刃部の位置関係が各々異なるため細分できる。20の刃部加工は平坦剥離となる。礫石器には凹石(74~76・79)と磨石(77~78・80)の別があり、前者は礫の二面に凹痕を有し、後者では二面ないし三面を磨面として利用した例が知られる。

#### (3) 4区出土の石器・石製品(第36~41・43~50図)

調査区西半の段丘縁辺部を主体に出土数は全体の約7割弱を占め、掲載した内訳は打製石器49点、磨製石器1点、礫石器33点、砥石1点のほか、石製品が2点である。

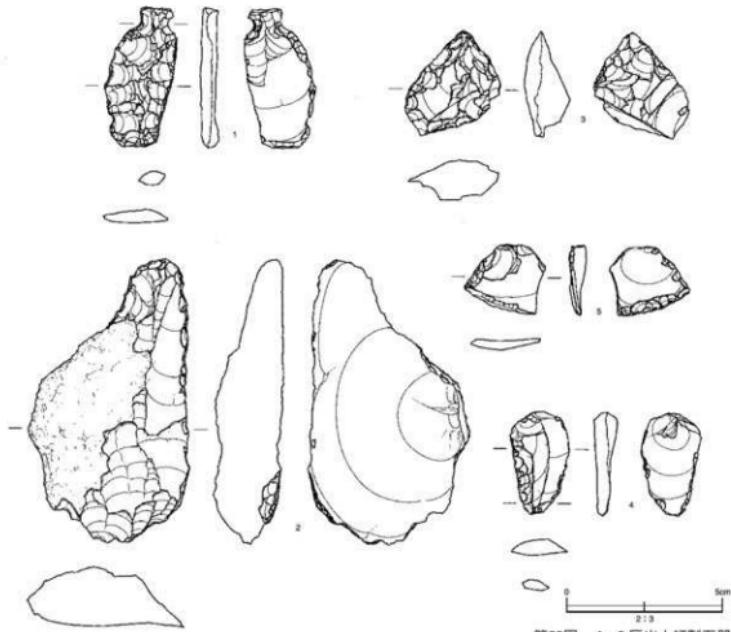
石鎚(23~32)には未完成が多く、分類できるものではII類の割合が高い。石鎚(33~34)はI・II類が各1点出土している。5点認めた石鎚(35~39)のうち、2点は「松原型」に分類される。石鎚(40~55)は16点掲載したうちの6点がIIa類に属し、一定量を占める。56は捶器で、先端部に急角度の調整加工を施している。形態が不定形な削鉗(57~65)では、IV類を除く各類が認められ、組成内容が豊富である。

石製品2点は滑石製の块状耳飾り(81・82)で、完形品の81は外径34mm・中央孔径14mmを測る。扁平で正方形の素材の角を落として丸みを付け、幅約2mmの切り込みは外縁から中央孔に向けて垂直に擦り切られる。四分の一弱が残存する82はこれより一回り大きく、外径42mm前後と推定される。断面形態が三角形様を呈するために、中央孔は表裏で径が異なる。83の磨製石斧は横断面が橢円形になる乳棒状の形態を呈し、縦断面はレンズ状、丸みを帯びた刃部は両刃となる。84は目の粗い砂岩製の有溝砥石で、板状の扁平砥の片面中央部に幅6mm内外を測るY字状の浅い溝が認められ、矢柄研磨器としての用途が考えられる。85は両側縁が面取りされる定角式磨製石斧の未完成品かと推測されるものであるが、製作途中で敲石などに転用された可能性が考えられる。厚みのある大型品で、長軸端部に敲打痕によると思われる瘤みを有する。

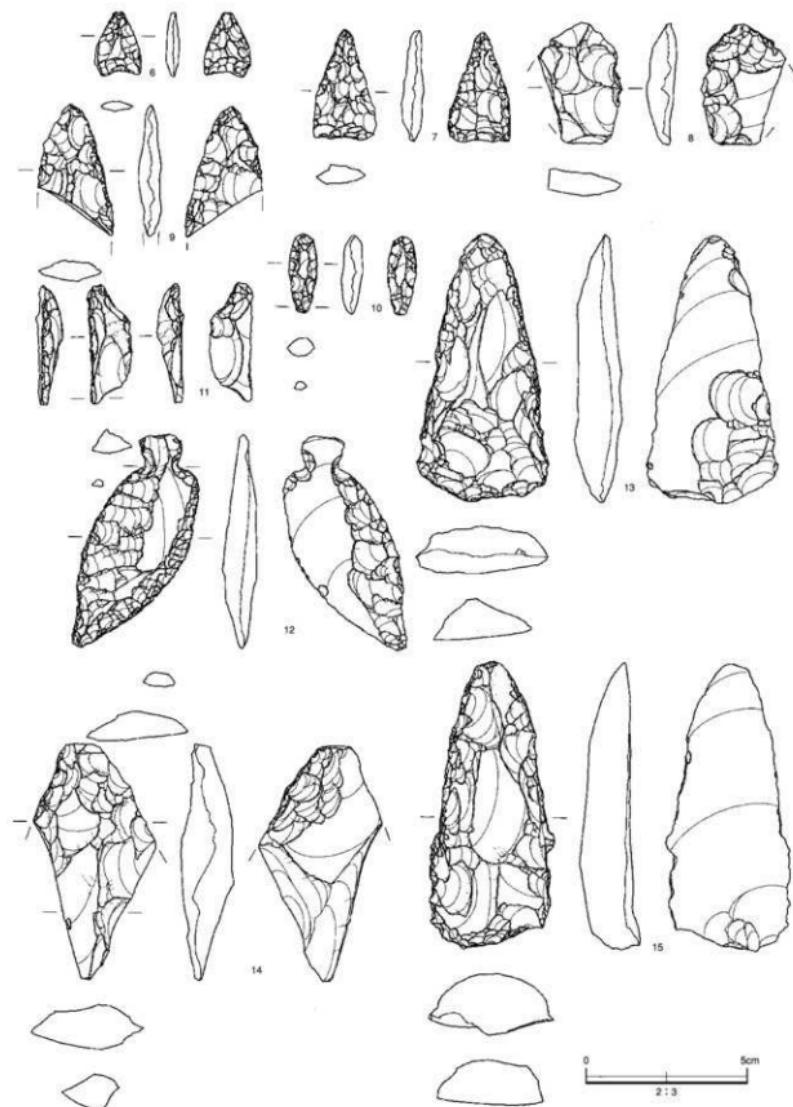
86以下は凹石・磨石の類で、大半は多孔質の河原石を素材としたものである。凹石においてもその多くは磨面を合わせ持った資料であり、111は末端に敲打痕が認められる。

## 块状耳飾り

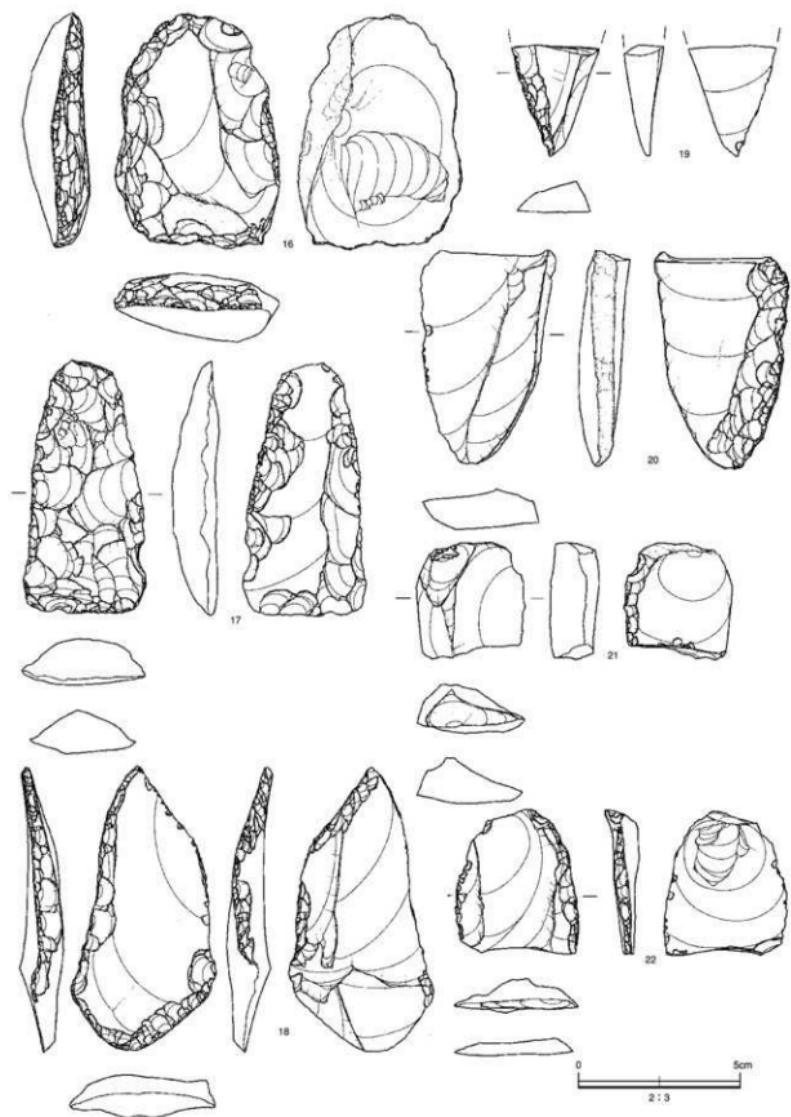
## 矢柄研磨器



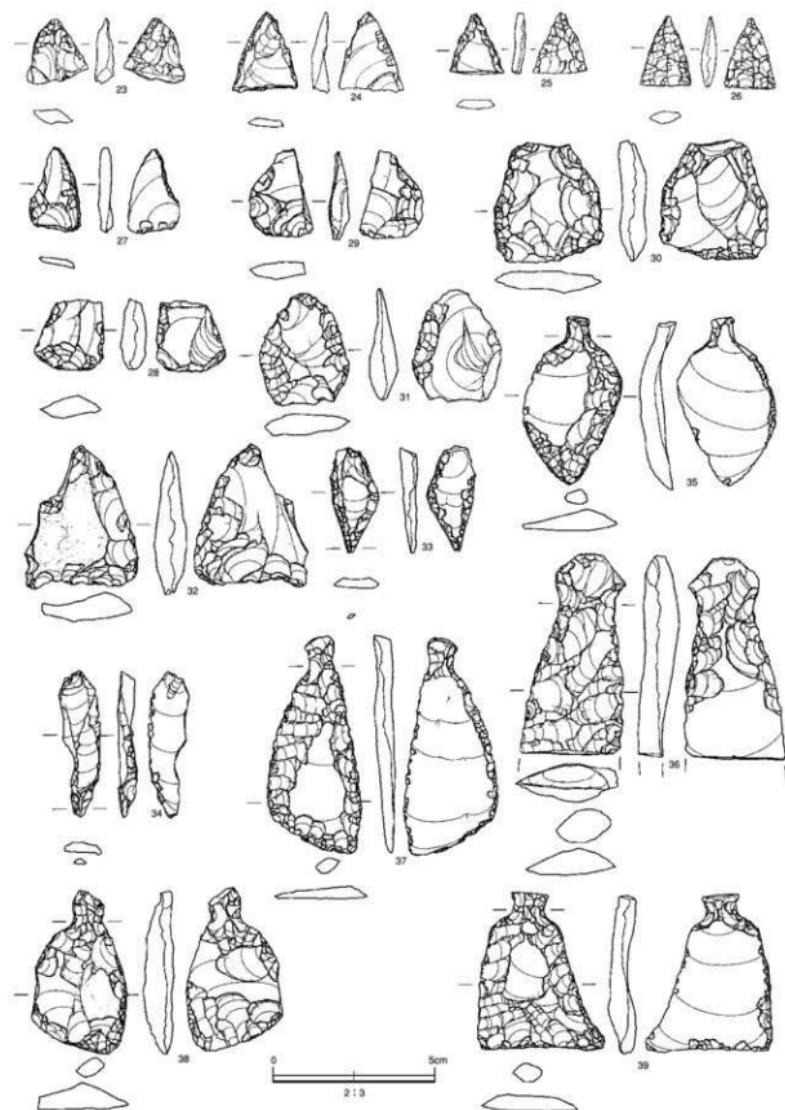
第33図 1・2区出土打製石器



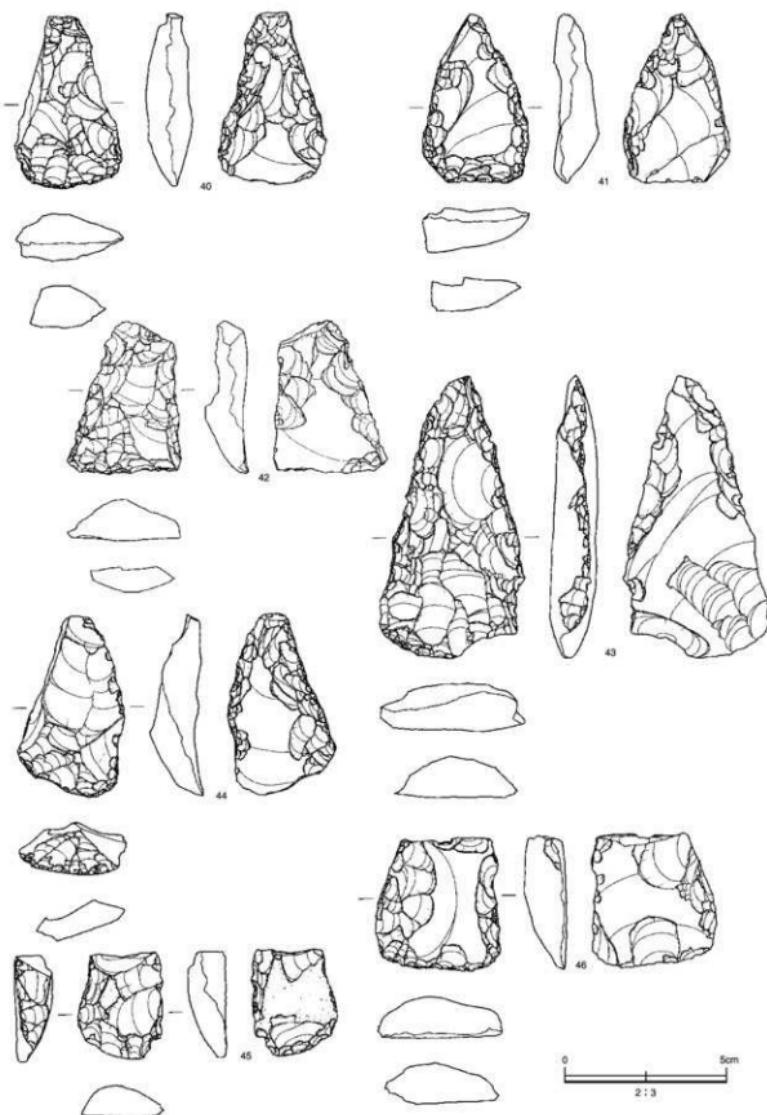
第34図 3区出土打製石器(1)



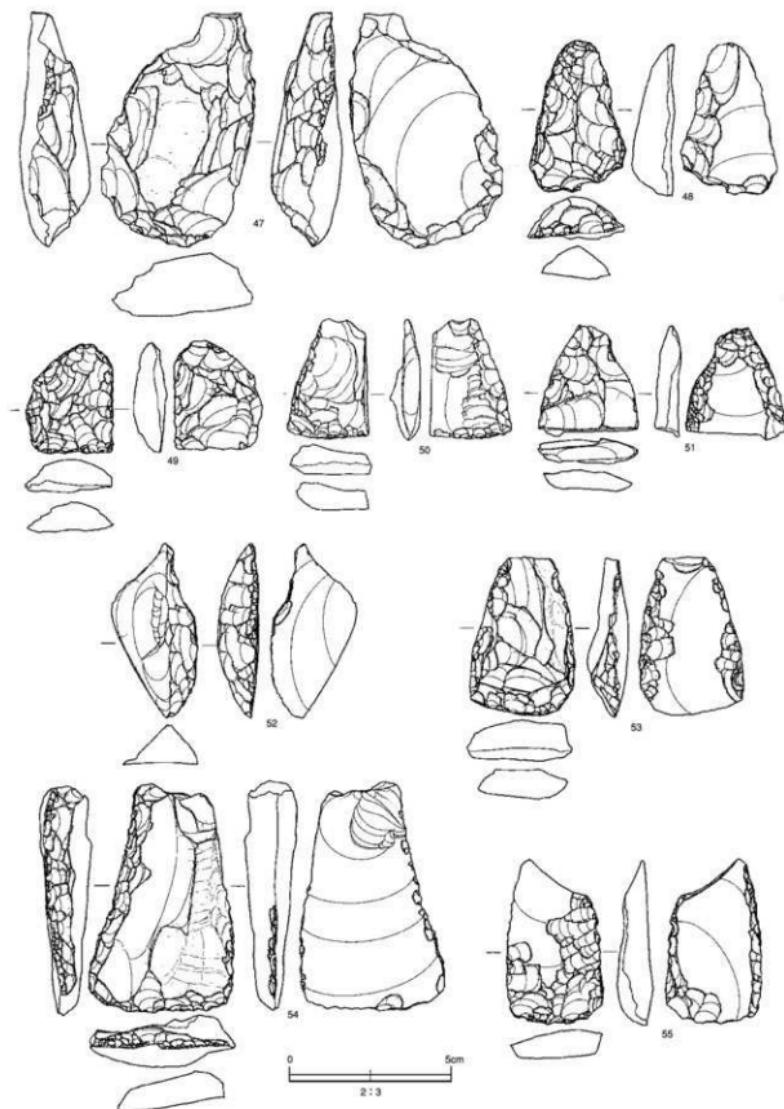
第35図 3区出土打製石器(2)



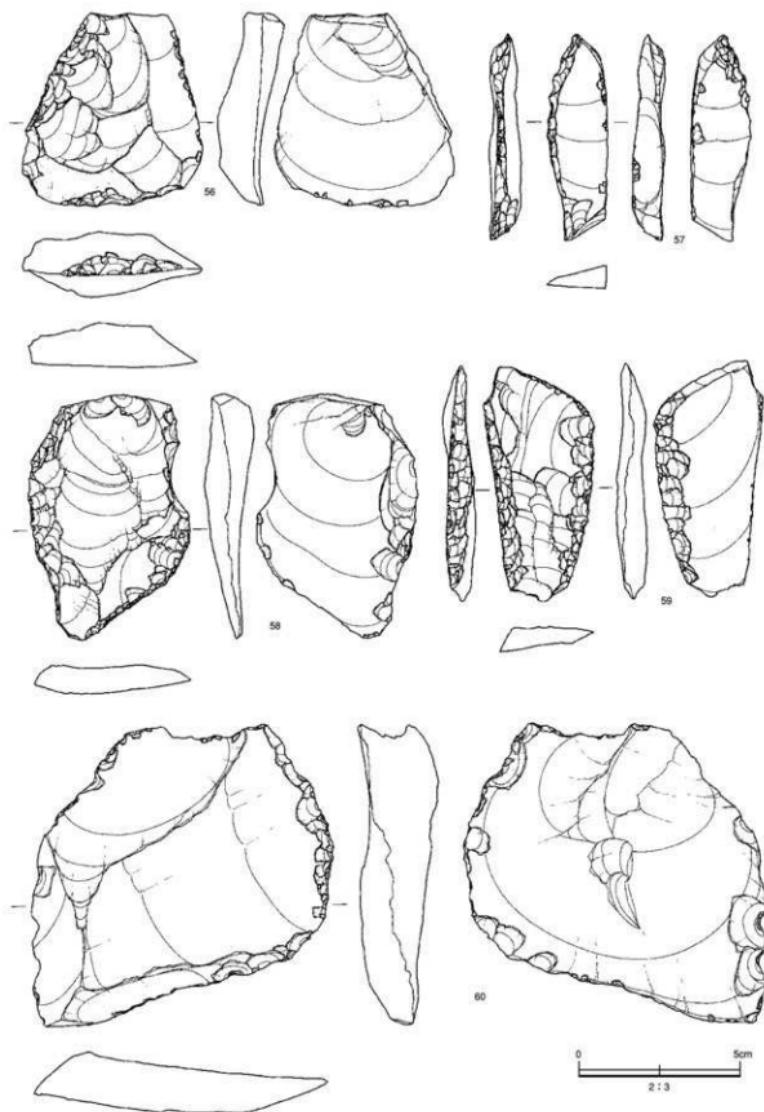
第36図 4区出土打製石器(1)



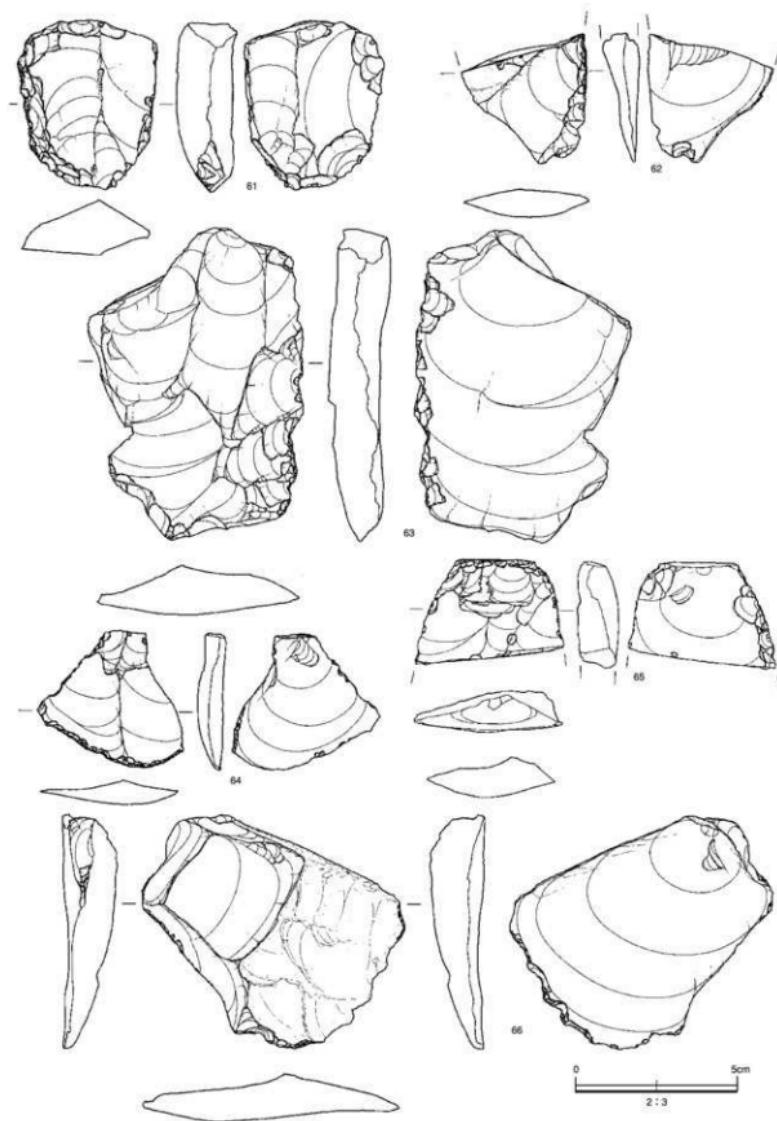
第37図 4区出土打製石器(2)



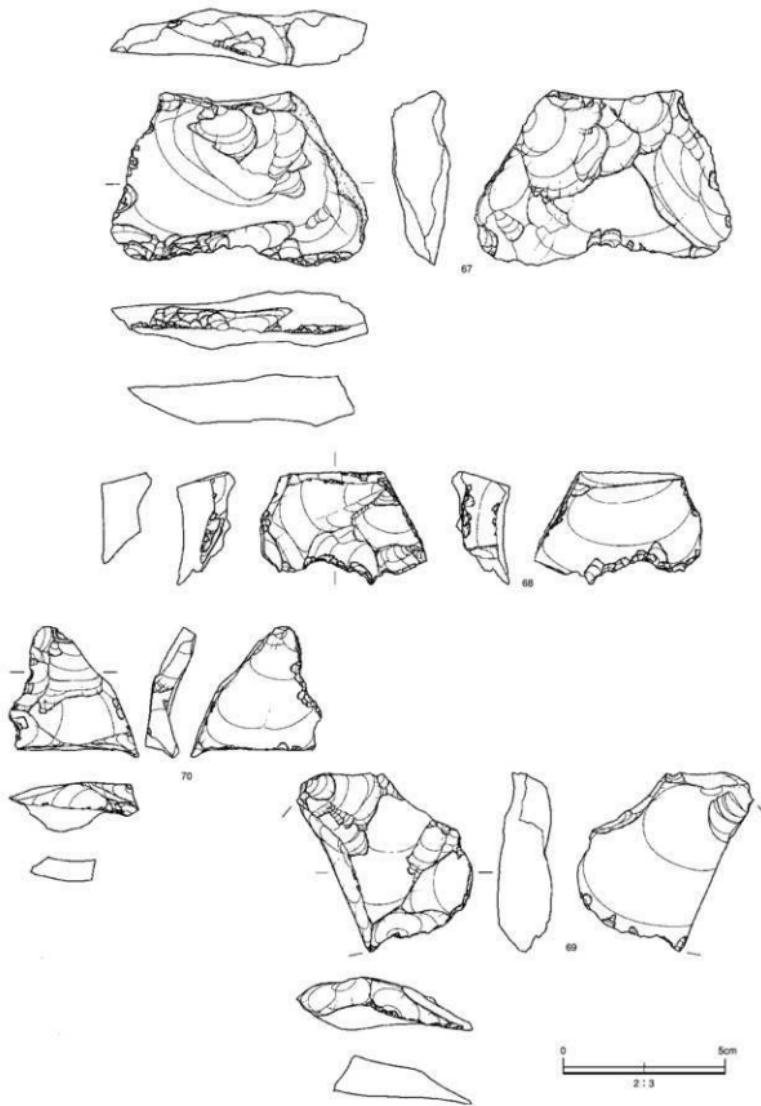
第38図 4区出土打製石器(3)



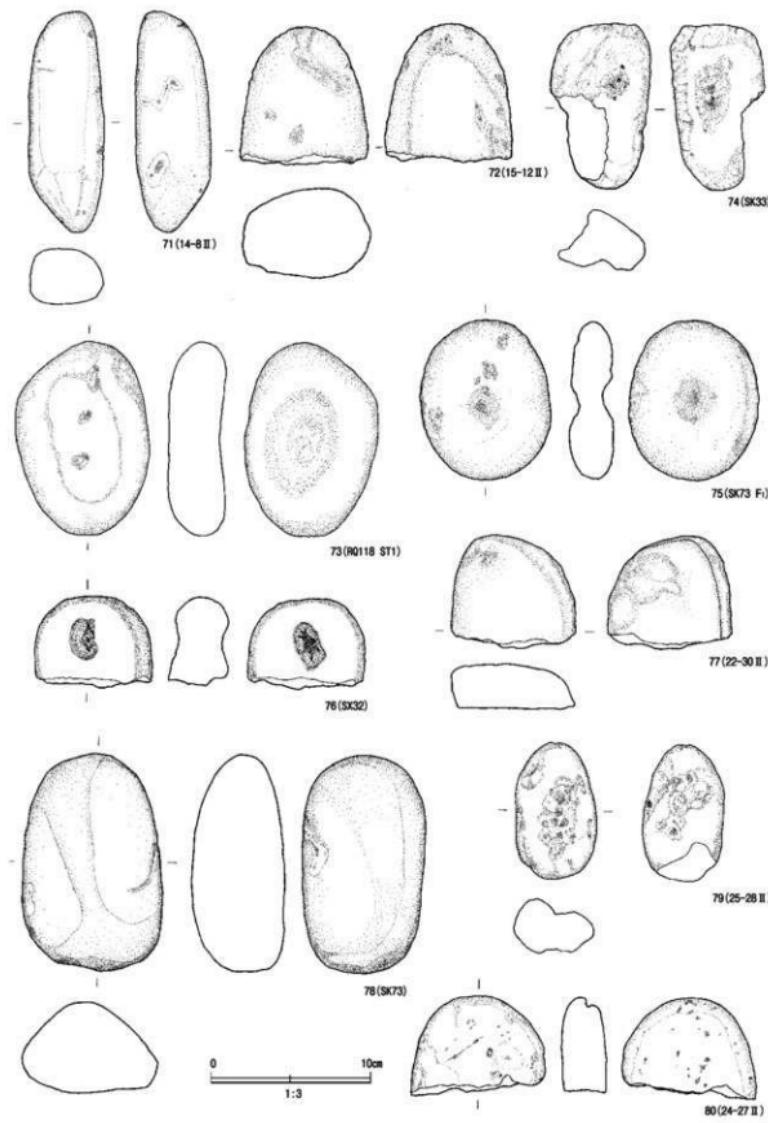
第39図 4区出土打製石器(4)



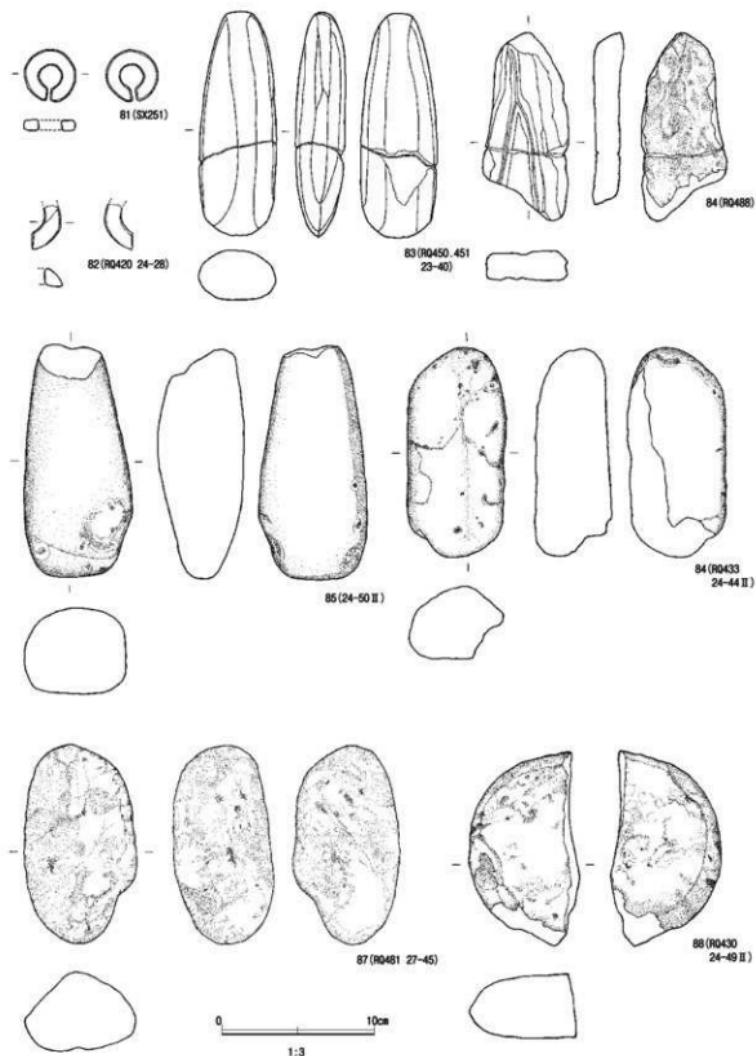
第40図 4区出土打製石器(5)



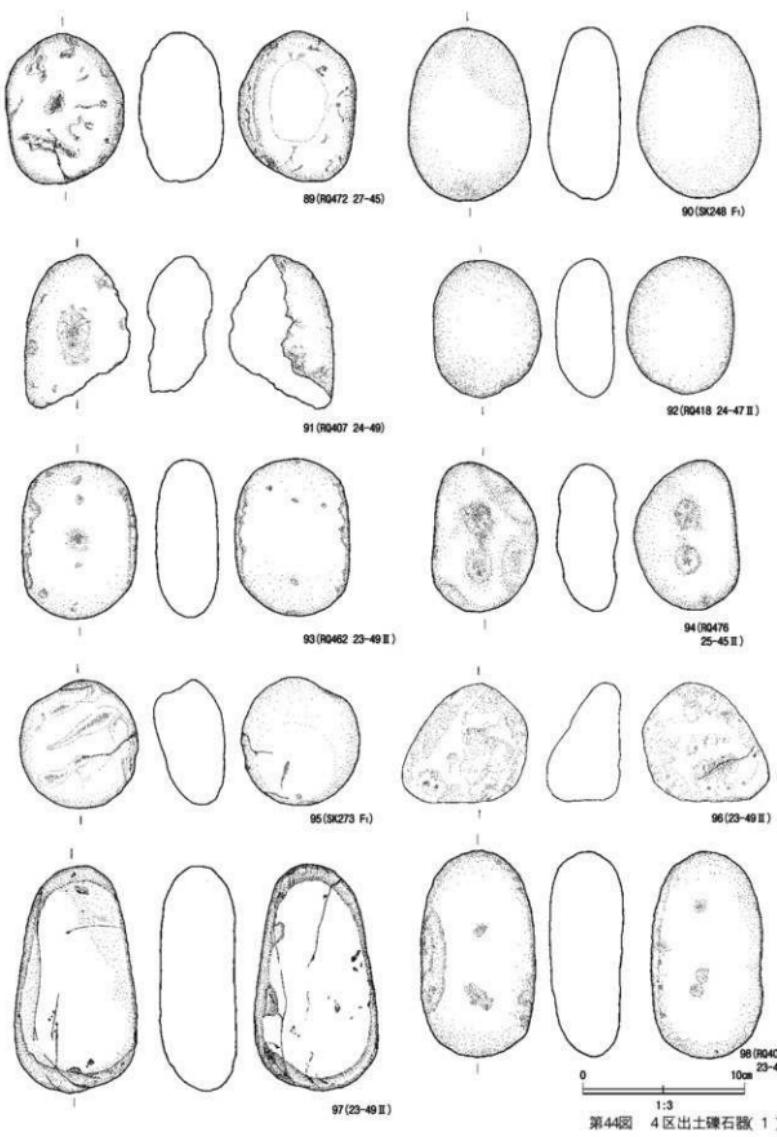
第41図 4区出土打製石器(6)

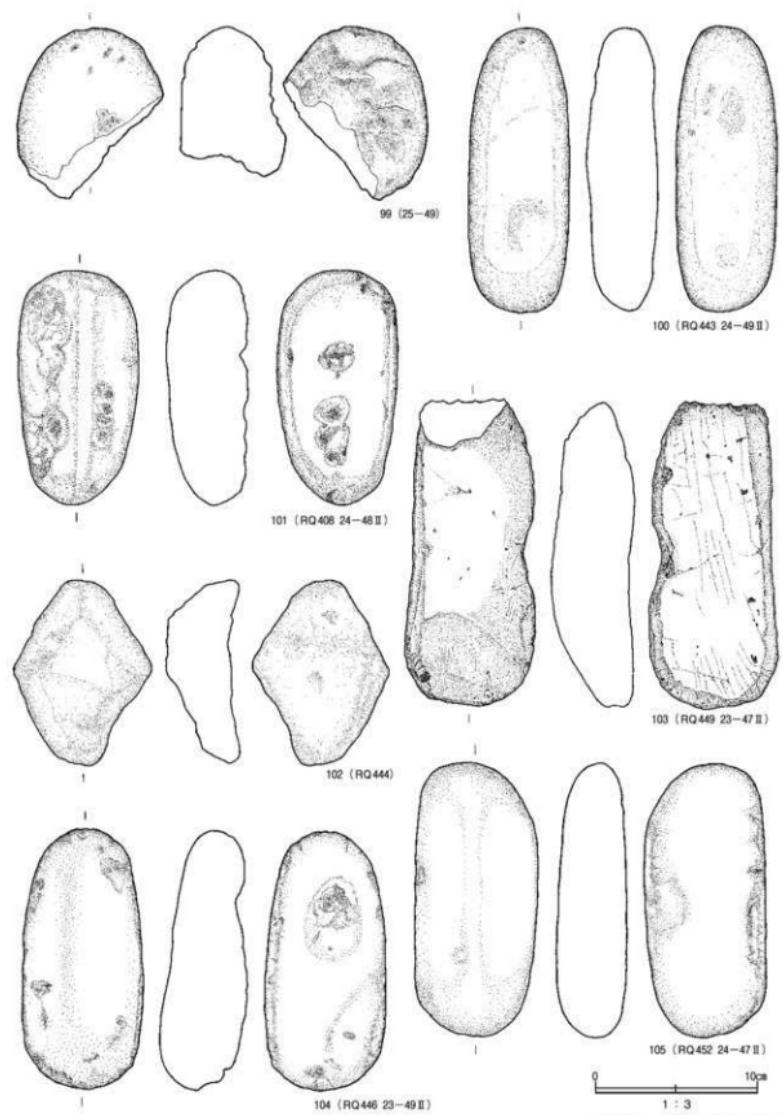


第42図 1~3区出土礫石器

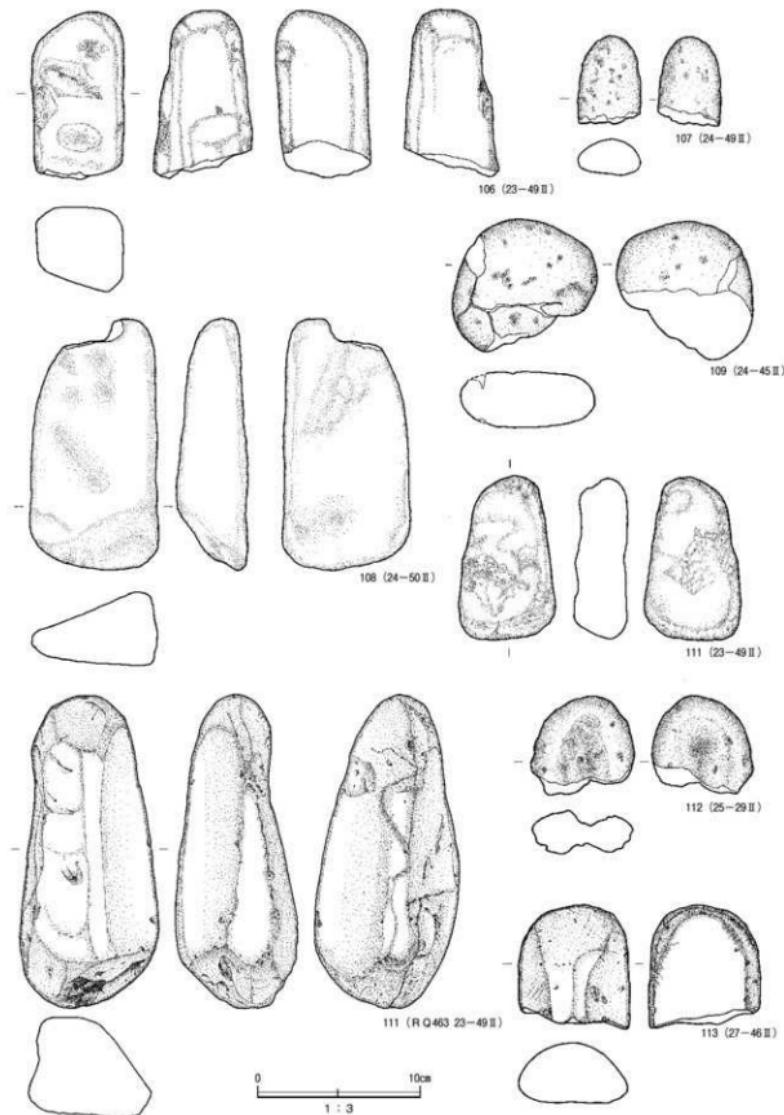


第43図 4区出土磨製石器・礫石器・石製品

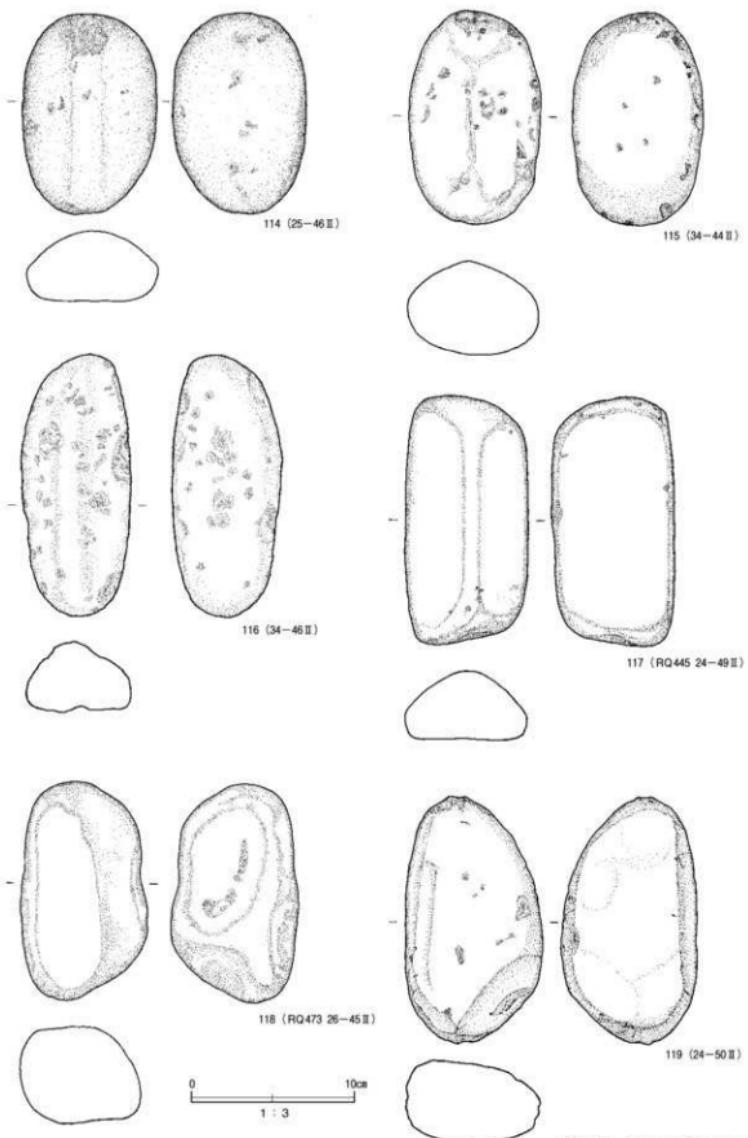




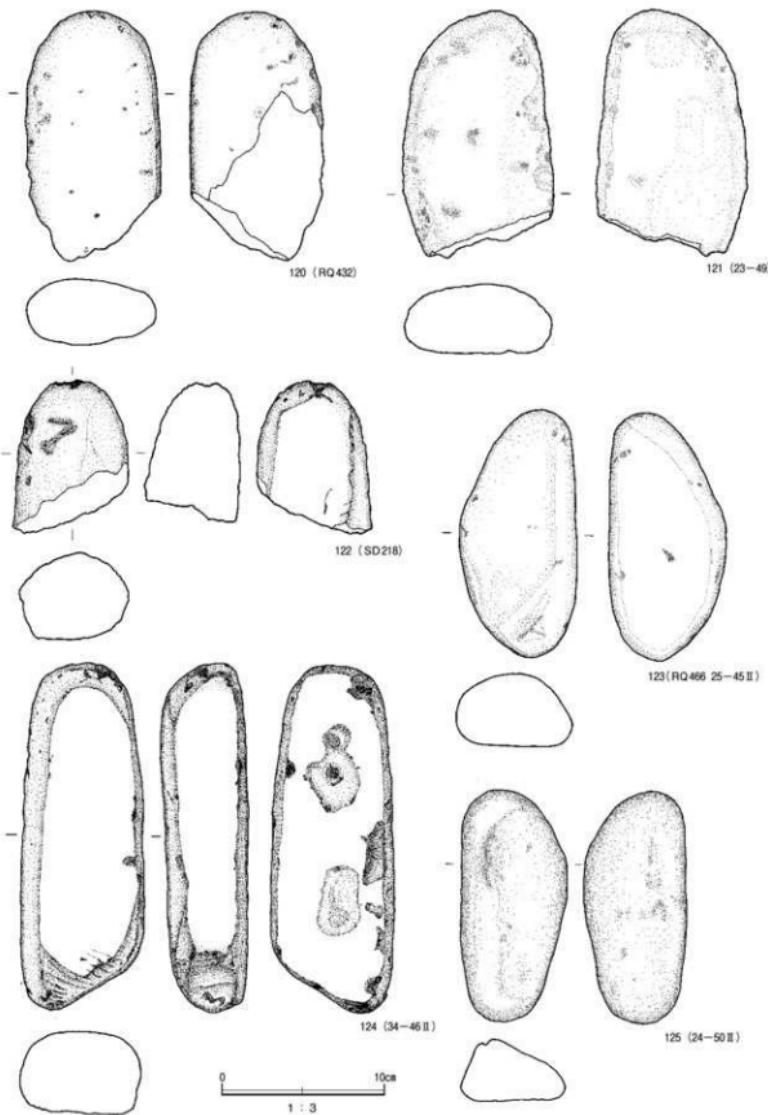
第45図 4区出土石器(2)



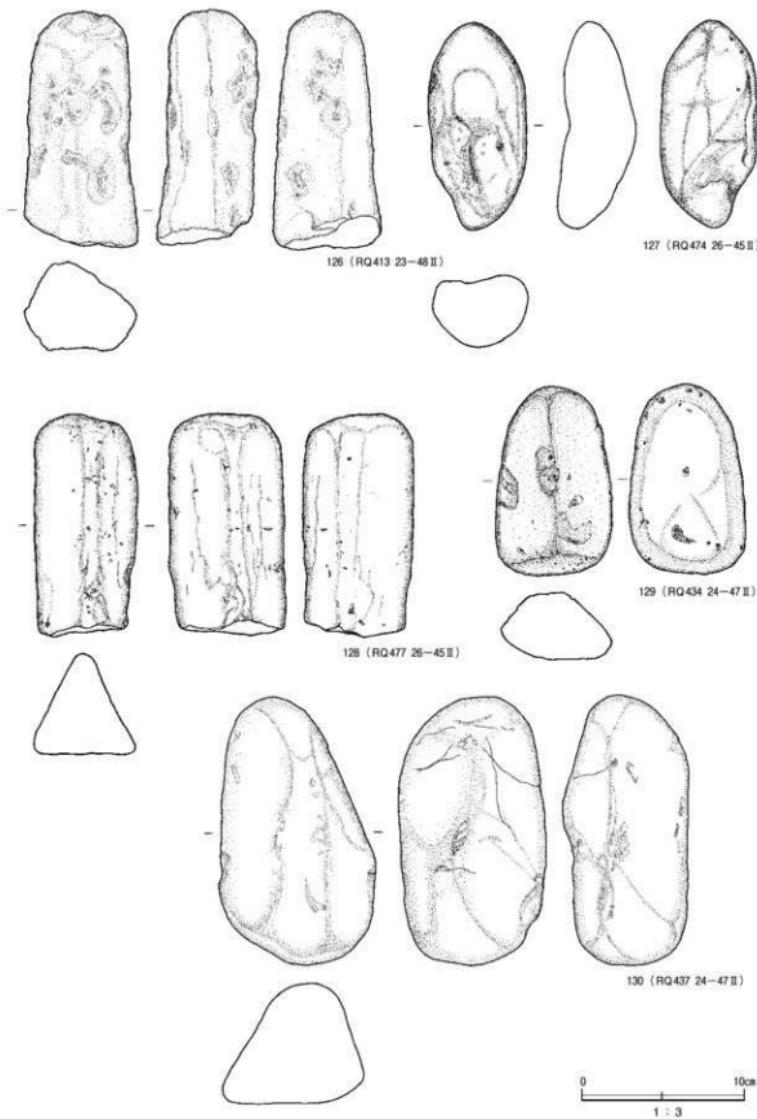
第46図 4区出土鍛石器(3)



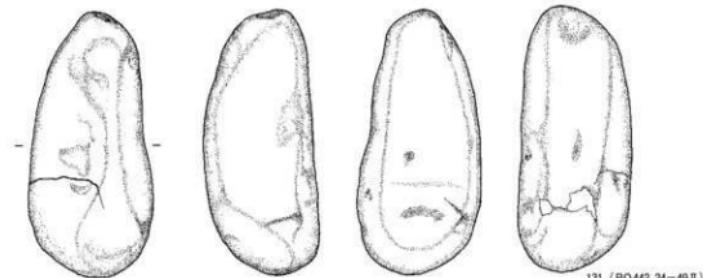
第47図 4区出土鍥石器(4)



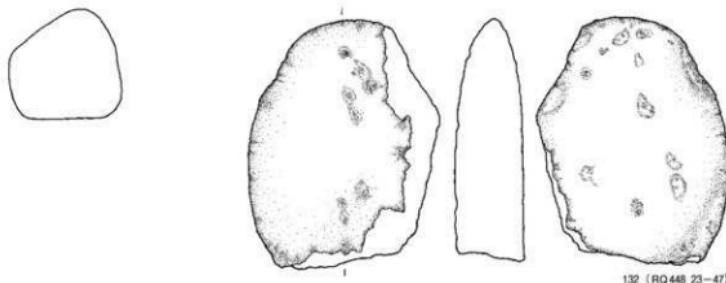
第48図 4区出土鍥石器(5)



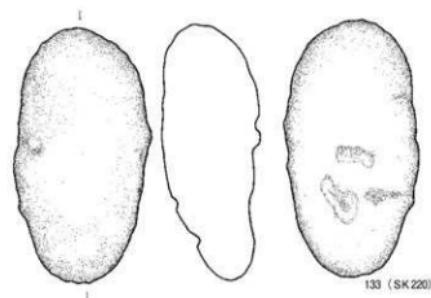
第49図 4区出土鍛石器(6)



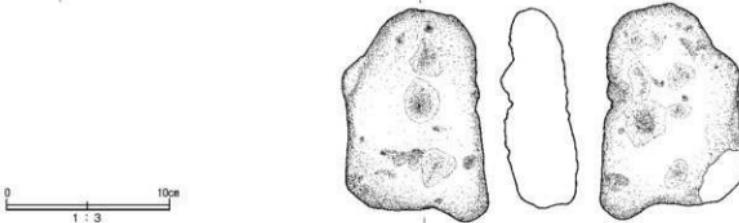
131 (RQ442 24-49 II)



132 (RQ448 23-47)



133 (SK220)



134 (RQ405 23-48 II)

第50図 4区出土石器

## 4 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

(小林祐一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・  
Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani)

### 1.はじめに

梓山a遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンバクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行った<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代を、図1に暦年代較正結果をそれぞれ示す。

<sup>14</sup>C年代はAD 1, 950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年代較正の詳細は以下の通りである。

#### 暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5,730±40年)を較正することである。<sup>14</sup>C年代の暦年代較正にはOxCal3.10(較正曲線データ: INTCAL04)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCal3.10の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年代較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

### 4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年代較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それより確かな年代値の範囲が示された。

### 参考文献

- Bronk Ramsey C., 1995 Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy : The OxCal Program Radiocarbon 37(2) p. 425-430
- Bronk Ramsey C., 2001, Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43(2A) p. 355-363
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の<sup>14</sup>C年代、p. 3-20
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac,

S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmeli, J R Soutter, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. 2004 Radiocarbon 46(3) p. 1029-1058

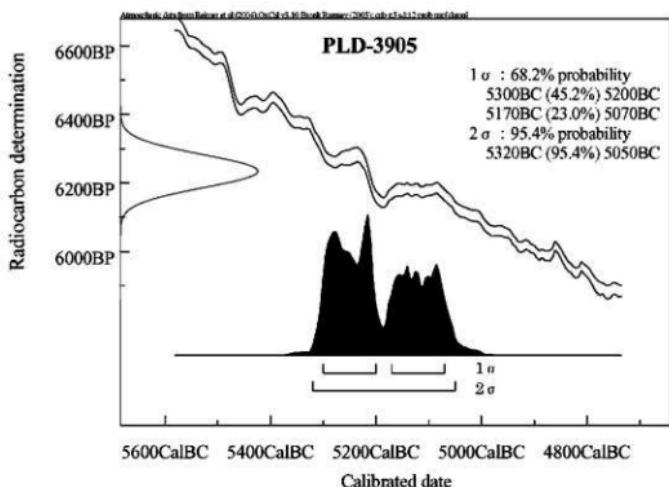


表2 歴年代較正結果

表3 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-3905	遺構：ST1 Y	試料の種類：炭化物 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC製コンパクトAMS・ 1.5SDH

表4 放射性炭素年代測定及び歴年代較正の結果

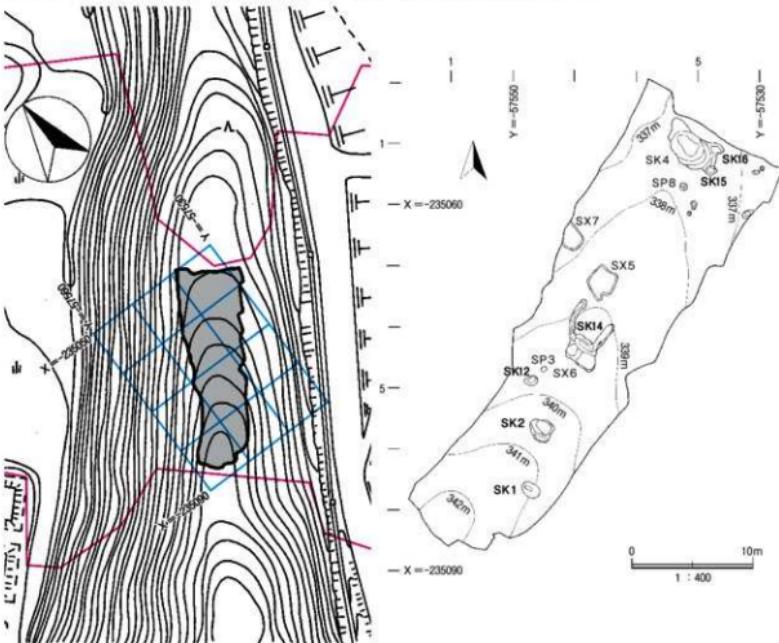
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm$ 1σ)	$^{14}\text{C}$ 年代を歴年代に較正した年代範囲	
			1σ 歴年代範囲	2σ 歴年代範囲
PLD-3905	-26.73 $\pm$ 0.16	6,235 $\pm$ 50	cal BC 5,300 - 5,200 (45.2%) cal BC 5,170 - 5,070 (23.0%)	cal BC 5,320 - 5,050 (95.4%)

## IV 梓山d遺跡

### 1 遺跡の概要

遺跡の範囲は南北方向に細長い尾根上の丘陵地帯で、南北約300m・東西50m内外のエリアである。標高は320m～346mを測る。計画法線が丘陵部を直交するため、調査対象となったのは遺跡南側の尾根上である。調査区は路線内の平坦部に設定し、南北長約40m、両端の比高差は5m以上を測った。調査区へ至る途中の遺跡範囲の北側で、現道設置による丘陵の掘削に伴い露頭が観察できる場所があり、土色変化からフラスコ状土坑の存在を知ることができる。遺跡は尾根上という地形的要因から薄い表土直下が地山となり、遺物包含層は存在しないかごく薄く遺存しているようだ。

検出された遺構は陥穴3基、土坑5基、ピット4基のほか不定形の浅い落ち込み等で、16基を登録した。分布の様子は、偏りなく散在していると言える。出土した遺物は、斜面のため流失し易いことも原因して僅少で、縄文土器2片と石器2点および剥片数点に止まる。



第51図 梓山d遺跡調査区概要図( S = 1 : 1,000 )・遺構配置図

## 2 遺構と遺物

### 検出遺構(第51~53図)

**大型陥穴**

SK 1・4・14は陥穴と認識した遺構である。丘陵上部の2-6グリッドで検出したSK 1は、尾根頂部より東側斜面に構築される。平面橢円形状で、長径1.5m・短径1.2mの規模を有し、長軸は等高線に直交している。掘り方は斜面下位の南東部において途中に平場を形成することを特徴とし、播鉢状に掘り込まれて長橢円形を呈する狭い底面に至る。検出面からの深さは約1mを測る。覆土は10層位に区分され、概ね斜面上方からの流れ込みによる堆積の様相が見られる。SK 4は調査区北端で検出した大型の陥穴である。検出段階では長径2.8m程の橢円形プランとして捉えたが、精査するうちに地山と近似した堆積土の存在が判明し、平面形・深さとも拡大している。さらに、東側において2基の掘り込みが確認され、これをSK 15・16土坑として登録した。完掘時における規模は東西約3m・南北2.3m前後で、不整な隅丸方形となった。検出面からの深さ1.9mを測った底面は、北西部に張り出す三角形様を呈する。周壁は段を形成して掘り下げられ、随所に凹凸が見られる。確認できた覆土上半の観察および完掘状況から、西端部には別遺構の重複があったと考えられる。SK 14は調査区中央において等高線と平行して位置し、SK 1・4のほぼ中間に配される。丘陵頂部に構築された長橢円形態の陥穴で、不整形の落ち込みSX 6と重複し、これによって上端部を切られる。検出長約2.3m・幅60~80cm規模を測り、底面中央部での深さは60cmである。底面西側に段を有して立ち上がり、周壁は斜面下位にあたる北辺で垂直的に掘られる。以上3基の陥穴は形態や規模が共通するものではなく、これが時期的な相違か否かは出土遺物がないため明らかにできない。

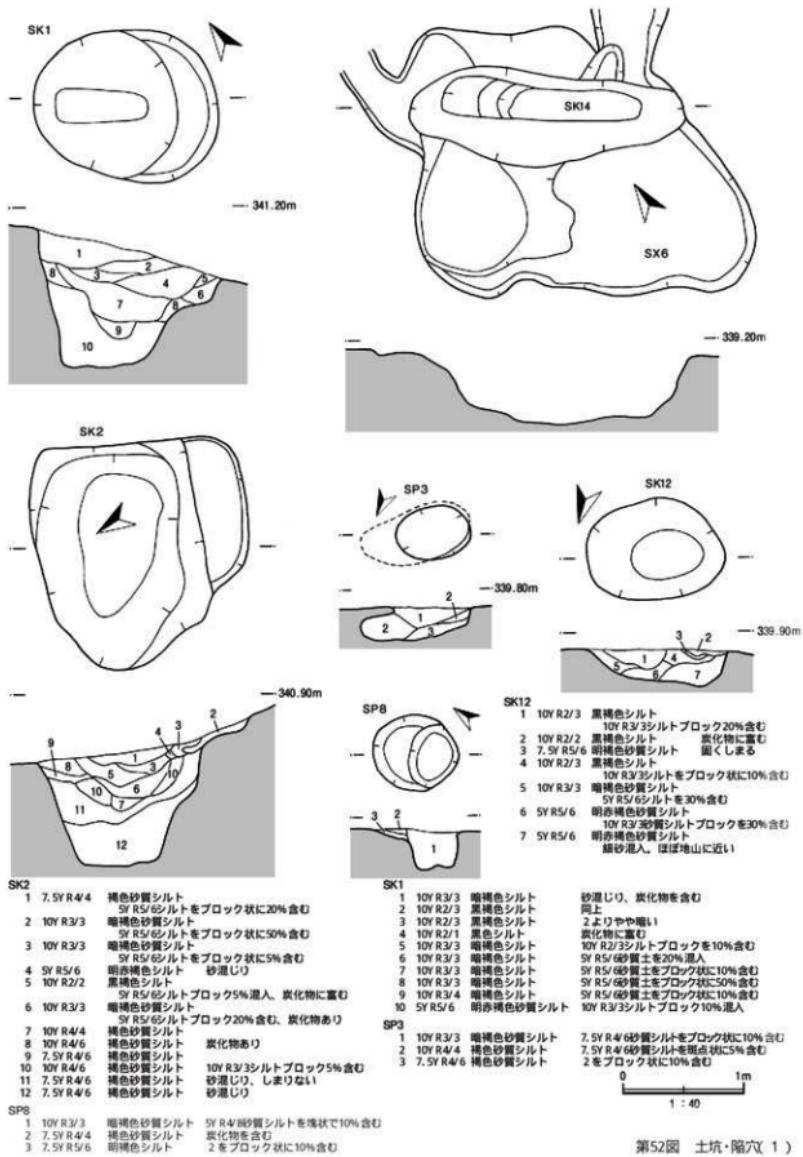
**袋状土坑**

土坑として登録したもののうち、SK 2は陥穴の可能性も考えられる遺構で、SK 1より5m北側の丘陵頂部に位置する。検出上面規模に対する底面の広さや階段状に掘られた周壁などは、獸を落として身動きを封じる構造とは異なるとの判断から土坑とした。東西長1.8m・南北長1.3m程の隅丸方形様を呈し、南側には半月形の浅い張り出しを伴う。検出面からの深さ約90cmを測り、北側周壁を除いて途中にテラス状の平場を設ける。覆土の堆積状況はSK 1同様に、斜面上方からの流れ込みの様相が強いと理解された。2-4グリッドに位置するSP12・13は、検出時に重複する2基のピットとして捉えたが、掘り下げにより長径1.1mを測る橢円形の単体穴と解った。これに近接するSK 3は袋状形態の掘り込みで、斜面下方の北東側へ壁面が大きく抉られる。上面長径60cm・深さ25cm前後の規模に対して、北東壁面が30cm程オーバーハングして底面に至る。

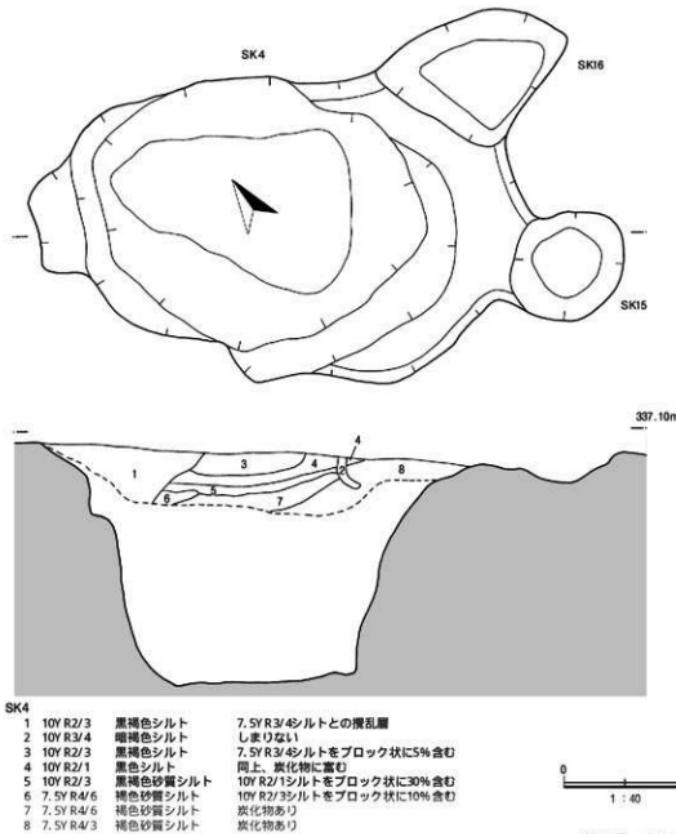
### 出土遺物(第54図)

**唯一出土した土器**

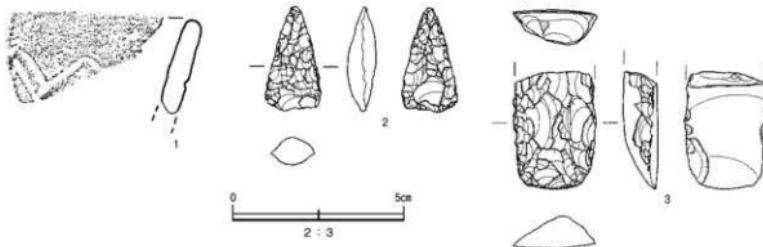
掲載できた資料は土器片1点と、打製石器tool 2点のみである。土器は深鉢の口縁部片で、1-6グリッドから出土している。口唇は整形されて平坦な面を形成し、口縁部文様として幅6mmの半截竹管状工具による鋸歯状文様が施文される。緻密な胎土で黄褐色を呈し、焼成も良好である。2点の石器は石鏟と石鎌である。石鏟は表土除去前に採取した資料で、基部側が直線状をなす平基鏟である。SX 6内から出土した石鎌は、短冊形で基部側が欠損している。片刃状で刃部は丸みを帯び、背面側は調整加工面で覆われるが、主要剥離面側は側縁部だけに浅い周辺加工が施される。



第52図 土坑・陥穴(1)



第53図 土坑・陷穴(2)



第54図 出土土器・石器

# V 町在家館跡

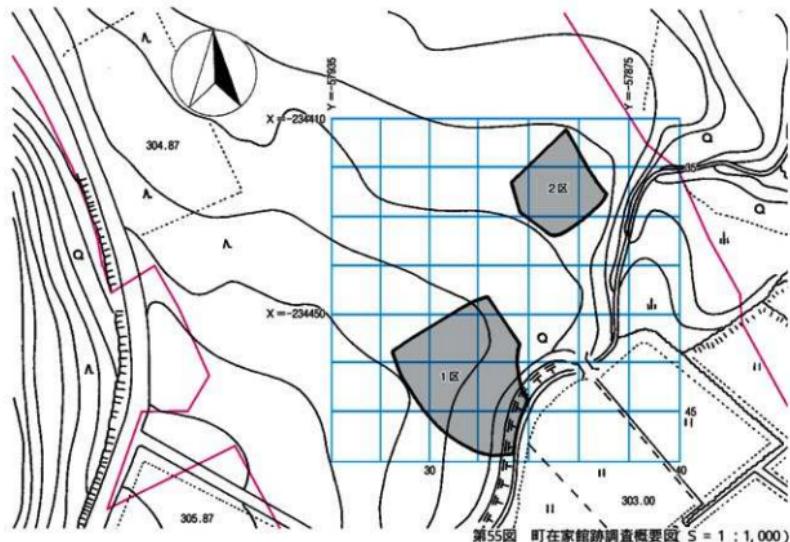
## 1 遺跡の概要

遺跡は梓山a遺跡の北西方、早坂山の東山麓に位置し、範囲は東西220m・南北250m程の方形と推測されている。遺跡が立地するのは河岸段丘上と考えられ、現地形で南東側の田面より一段高い台地状となっている。標高は297m～305m前後を測る。範囲内には昭和50年代に工作された、水窪ダムから八幡原へ通じる工業用水パイプラインが横断しており、一部分が掘削を受けている。また、水窪ダム建設時に作業員宿舎が置かれたこともあり、搅乱の痕跡が随所に残るとされる。

調査区は遺跡範囲南端にあたる段丘縁辺部の2箇所に設定し、表土除去後に遺構の延伸範囲を確認するためのトレンチを追加している。1区は北縁で搅乱が著しく、南東部を除く全域からブドウ栽培に伴う耕作棚のアンカーを据えた支柱跡が検出されたほか、近年の開発にかかる痕跡が目に付いた。2区では搅乱や倒木痕に混じって、縄文時代の所産と目される3基の土坑を検出し得た。その他、東西方向に4本設定したトレンチ内でも搅乱層が多く、館跡に関連する遺構の存在は確認されなかった。

出土した遺物は縄文土器と砾を含む石器の類であり、数量的に4箱に相当する。これらは大半が2区から出土したもので、部分的ながら包含層が遺存している状況が把握できた。

館跡関連遺構は未検出

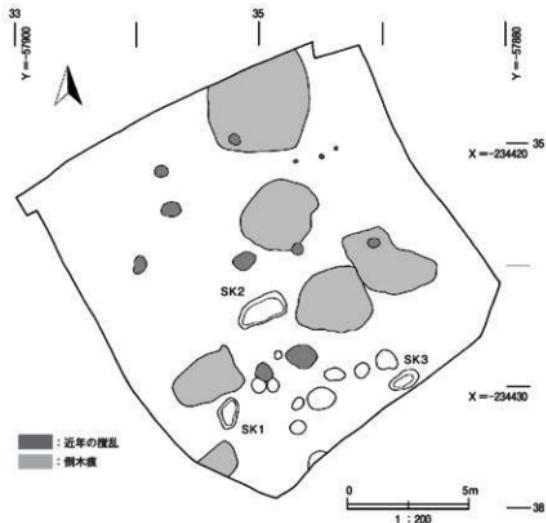


## 2 遺構と遺物

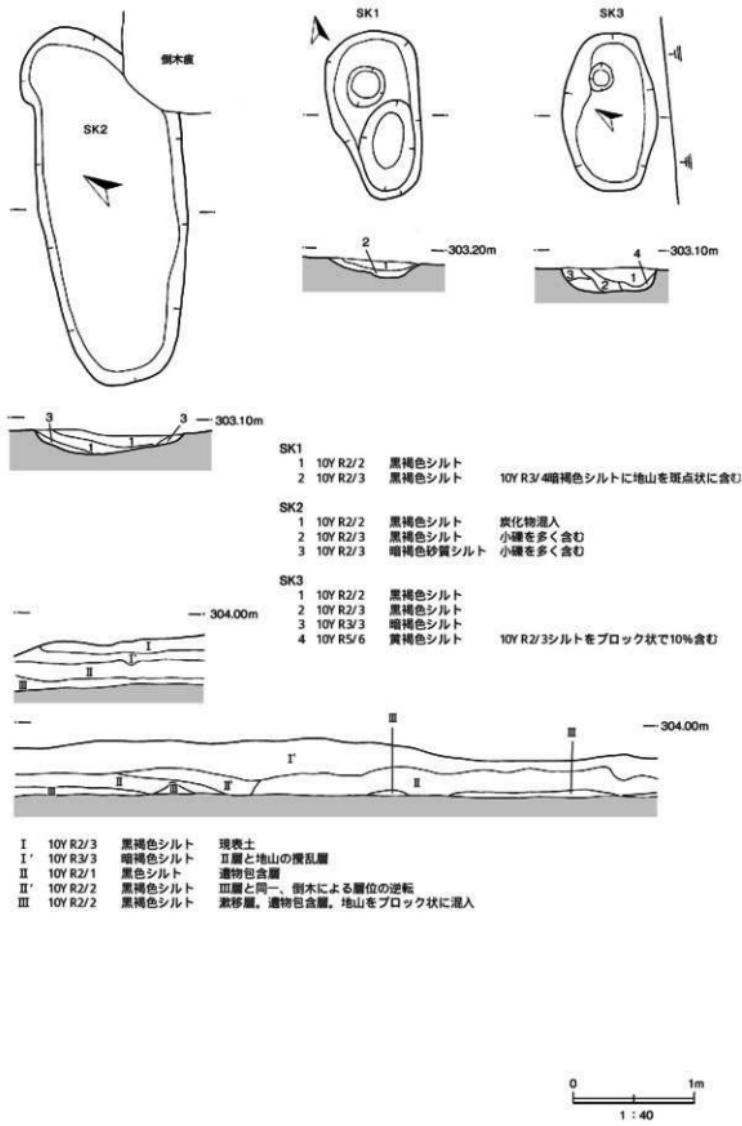
### 検出遺構(第56・57図)

**土坑3基** 2区で検出された3基の土坑は、いずれも平面形が小判形、断面形が船底形を呈しており、段丘縁辺に近い調査区南側に位置している。SK1は長径約1.4mを測り、南北方の主軸を有する。検出面からは最深15cm程の浅い掘り込みで、底面南側が一段落ち込む掘り方がなされる。SK2は東西方向に主軸を置く大型の土坑で、長径2.9m・短径約1.2mを測る。東端部が倒木痕と重複し、これによって切られる。底面中央に向かって徐々に深くなり、確認面から約20cmで地山に至る。2区南東壁際で検出されたSK3は、規模がSK1と、主軸方位はSK2と同様の土坑である。長径1.3m・深さ20cm弱で、底面は平坦であるが、東側に径20cm程のピット状の掘り込みが見られる。断面観察から、埋積途中にも一度掘り込まれたことが察知される。

**層位の逆転** (I~III)に区分され、南西壁では倒木の影響による層位の逆転が認められる。遺物の多くはII層とIII層の境界から出土している。



第56図 2区遺構配置図



## 縄文土器(第58図)

早期末葉 第I群土器 縄文時代早期末葉の条痕文土器(1)。器面の表裏に条痕文を施し、胎土中には繊維を含まず、粗・細砂粒の混入が目立つ。

前期前葉 第II群土器 縄文時代前期前葉～中葉に比定される一群。胎土に繊維を含むものが多く、文様構成の相違により以下の6類に区分される。

1類：羽状縄文が施文される類で、非結束の事例(2～8)と結束のあるもの(9・10)に細分される。前者には口縁部片(2・3は同一個体)が含まれ、平縁の口唇に斜方向の刻み目を付す。2～5・7・8には14～20mmの幅で閉端部の横位回転文が多段に施され、燃りの異なる原体を交互に付文する例もある。

2類：0段多条縄文が施文される類(11・12)。11は0段の縄4本により原体が作られ、施文はR Lとなる。器壁が薄いことから小形の土器で、内面は多方向から丹念に磨き調整を行っている。上半部の器形が窓える12は円筒形状の小形深鉢で、胎土には繊維のほか石英粒を多く混入する。

3類：結節縄文を施すもの(14)。1本の原体に2箇所の結節部を作出し、S字状の綾络文が並行している。

4類：附加条縄文を地文とするもの(15)。口縁部片の資料であり、くの字状に屈曲して口縁が外反する器形を窓せる。頸部には半截竹管状工具による平行沈線を廻らす。

5類：半截竹管やヘラ状工具等を利用して刺突文・押引文が施される類(16～19)で、口縁直下から横位平行に付文される。内面は磨き調整により平滑に仕上げられる。

6類：前類の施文具により、平行または鋸歯状沈線を描く類(20・21)。20は波状突起を有する口縁形態で、口縁部には地文の上から半截竹管で2条の平行線を引いた後、この間に鋸歯状文を付加している。21は口縁部に棒状工具で深い鋸歯状の沈線が施される。

後期前葉 第III群土器 縄文時代後期前葉に比定される沈線文系土器(22・23)。資料は波状を呈すと推測される深鉢口縁部片で、縄文地に横位平行や蛇行する多条の沈線が施文される。

## 石器(第59～64図)

石器は出土遺物4箱中の3箱を占め、その種類に打製石器・磨製石斧・礫石器の別がある。

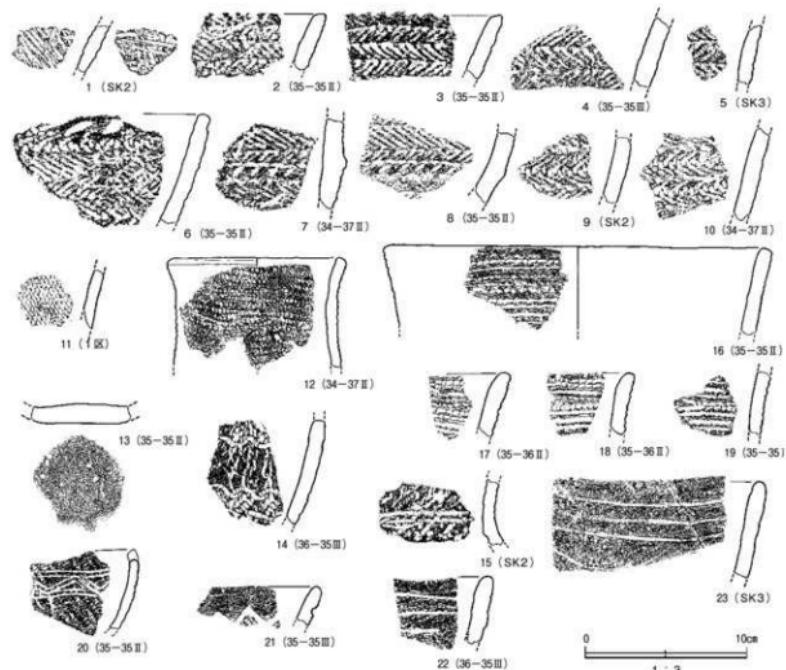
梓山a遺跡の分類に準拠

1～3は各1点ずつ認められた石鏃・石匙・石鎌である。石鏃は基部側が直線状をなす平基鏃(II類)で、一方の側縁が弧を描く。石匙は両側縁が刃部となる縦形のもので、両面に加工が施され、尖頭器のような先端部を有する(Ia類)。右側縁が直線状であるのに対し、左側縁はくの字状に弱く屈曲する。石鎌は基部側が欠損し、未成品であるが短冊形を呈する。両面加工となるもので、刃部は片刃状で直線状をなす(IIIa類)。4～9は削器で、いずれも縦長剥片を素材としている。これらは刃部の作出方法や位置関係の相違により、次のように分類できる。4～7は素材の両側縁が刃部となるものである。4は両面加工によって作出された刃部と片面加工の刃部を合わせた(II類)。素材の左側縁上半が両面に加工を受ける。5～7は片面加工によって刃部が作出され、背面側に加工が施される(IIIc類)。8・9も片面加工の刃部をもつ資料で、8は素材の背面左側縁が刃部となり(IIIa1類)。右側縁にはノッチが作出される。9は左側縁と

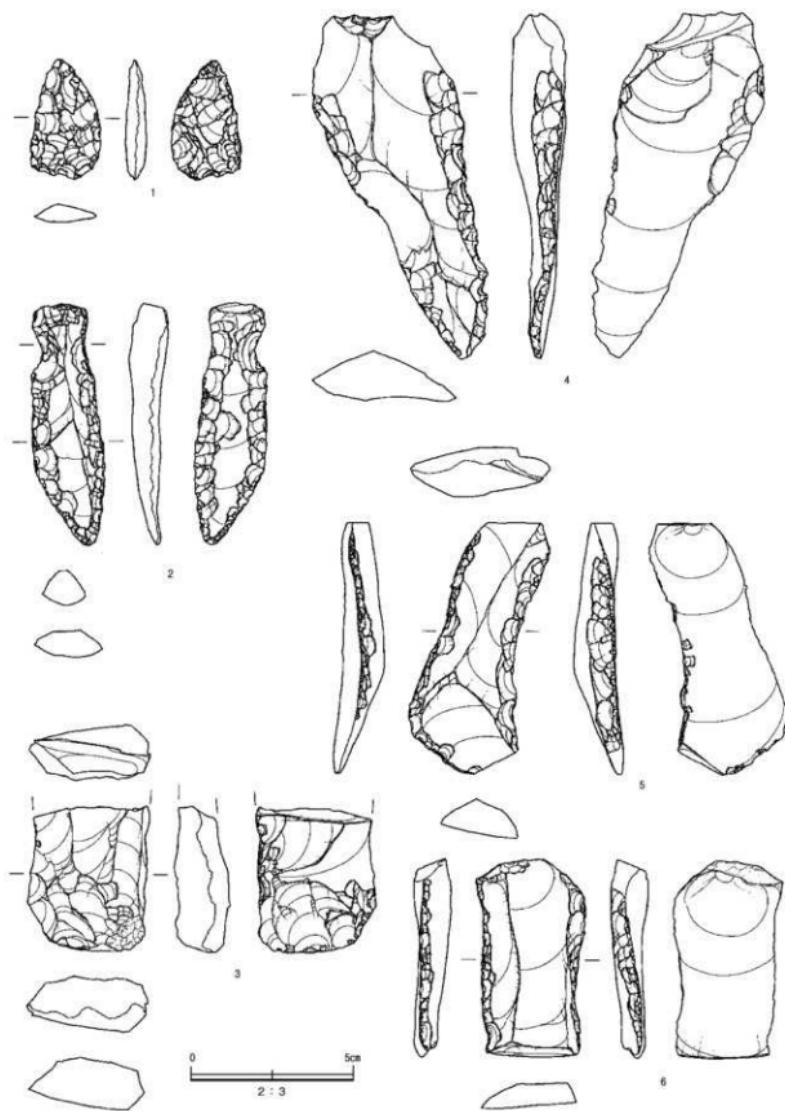
末端が刃部となるもので、左側縁は主要剥離面側に、末端は両面に加工を施している(Ⅱ類)。10~12は抉入石器で、素材の末端部や右側縁に弱い抉り込みが認められる。10は左側縁の主要剥離面側に二次加工を施しながらも、刃部を形成するような連続した加工とはなっていない。

磨製石斧(13)は刃部の一端を打ち欠いた1点が出土している。両側縁に面取りがなされる定角式のもので、刃部は残存部位から丸みを帯びた両刃のものと推察される。平面形態が長脚二等辺形、縦断面形はレンズ状を呈する。

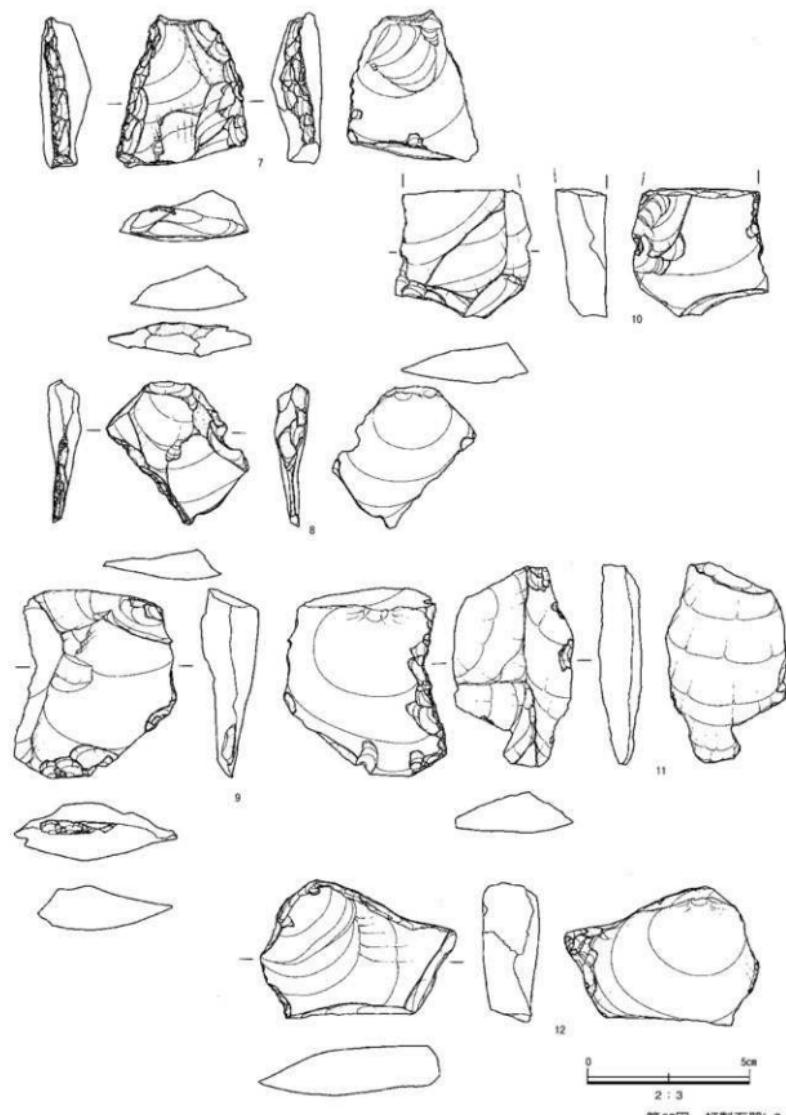
砾石器には凹石・磨石・石皿などの器種が認められた。14~17は凹石で、平面形が円もしくは橢円を呈する砾が用いられる。凹みは砾的一面に1箇所のもの(14・15)、一面に2箇所のもの(16)、扁平両面に各2箇所を有するもの(17)の三例を認めた。磨石は棒状・橢円などの形態や大きさは様々であり、二面~四面が磨面として使用されている。29は石皿と考えられる方形棒状砾で、三面に使用痕が見られ、研磨によって平滑な磨面を形成している。扁平砾を用いた石皿では、容器状に整形して外縁を有するもの(30)と、扁平な河原石の両面を敲打と磨きにより水平に仕上げたもの(31)の二例が存在する。



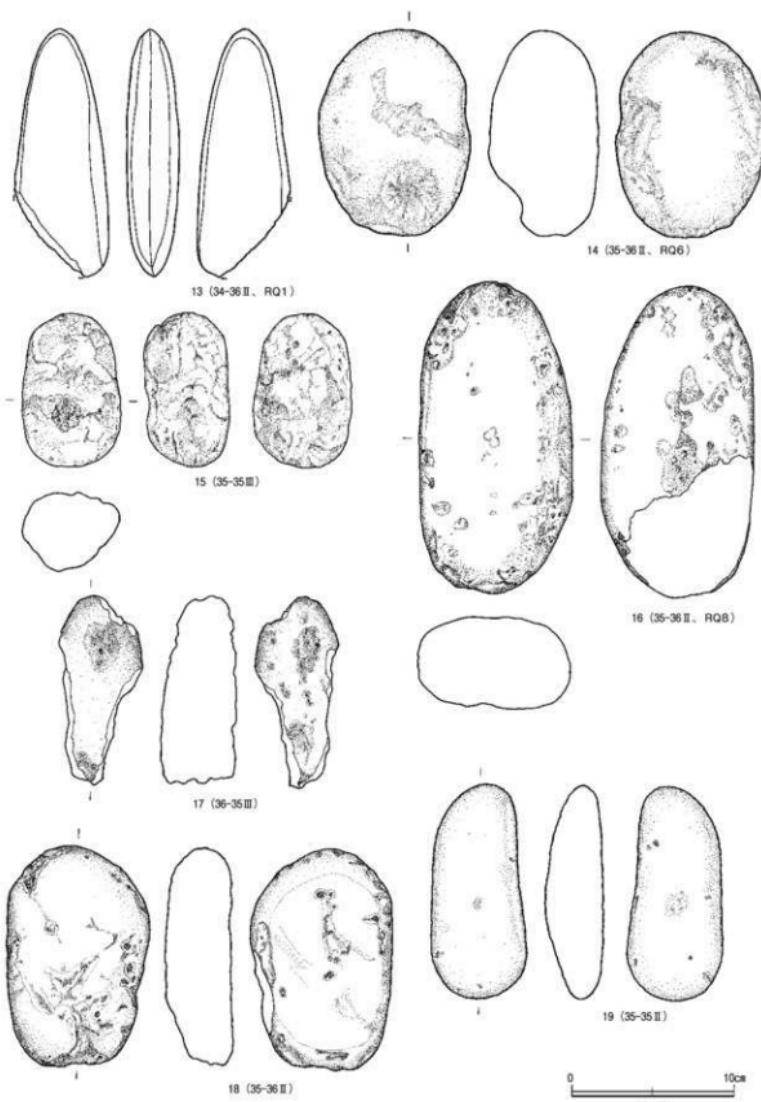
第58図 織文土器



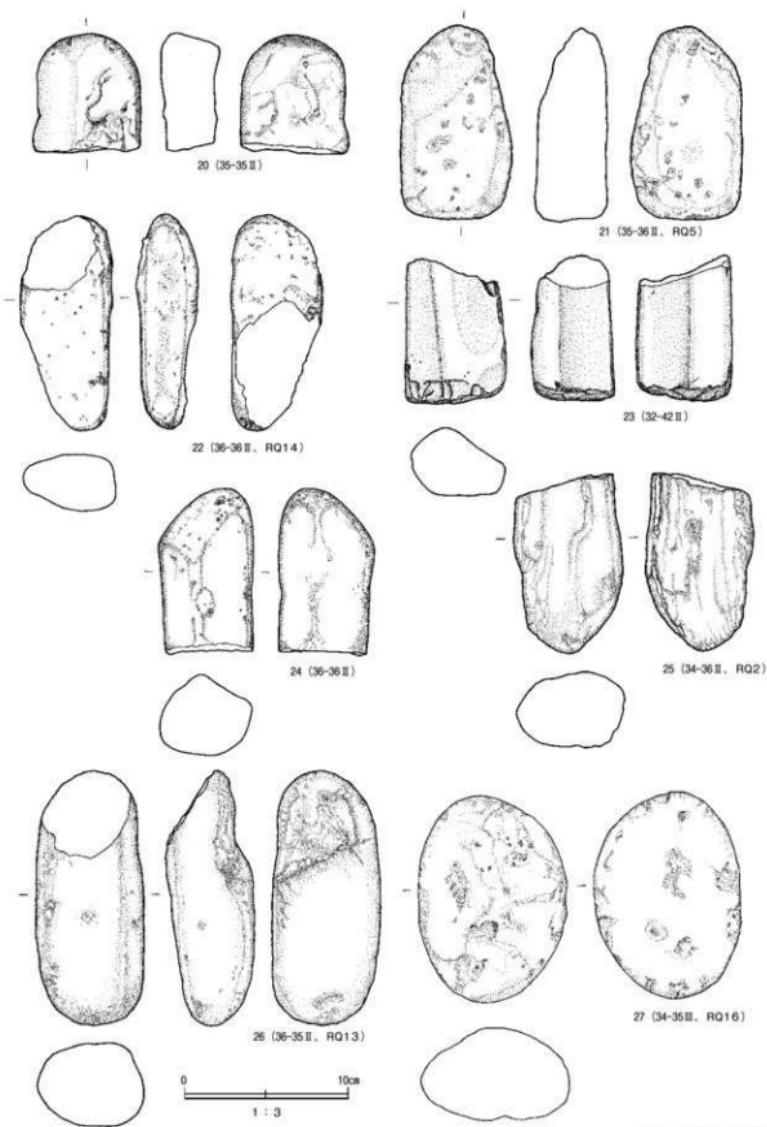
第59図 打製石器(1)



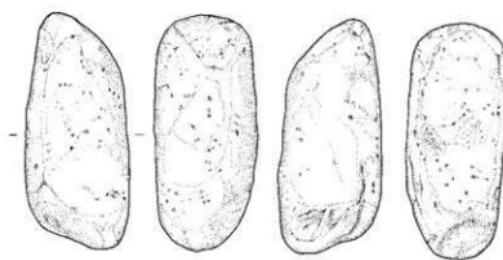
第60図 打製石器(2)



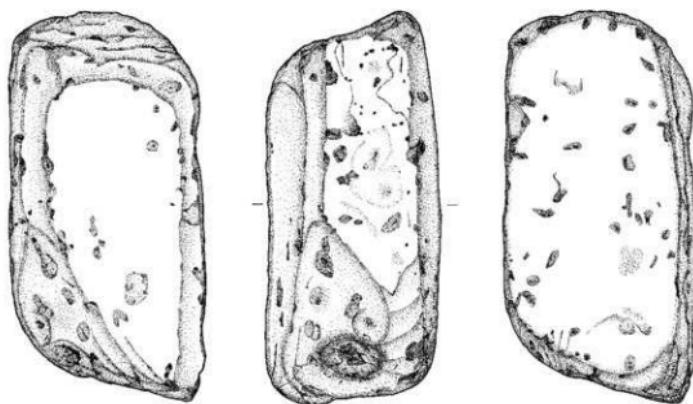
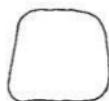
第61図 磨製石器・礫石器



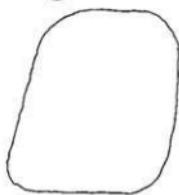
第62図 磚石器(1)



28 (35-36 II)

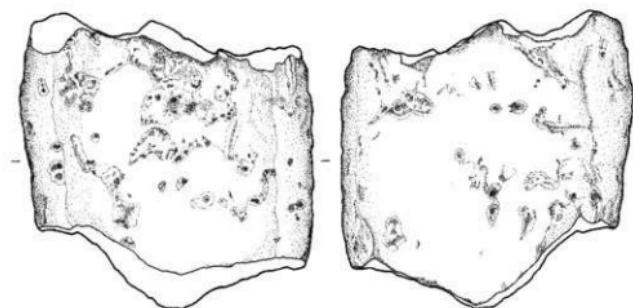


29 (35-36 II、RQ17)

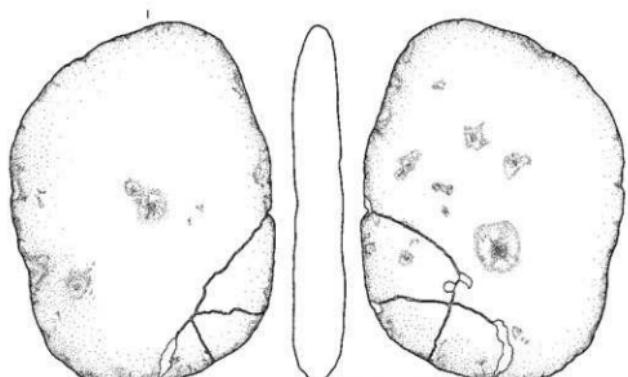


10cm  
1 : 3

第63図 碳石器(2)



30 (35-35 II, RQ15)



31 (35-35 II, RQ12)



第64図 磚石器(3)

# VI 総 括

## 1 縄文土器

梓山aほか2遺跡から出土した縄文土器は、早期中葉から前期中葉にかけてのものが主体を占める。得られた土器の大半は摩滅の著しい小破片で分類不能なものが多数あり、全体の器形や文様構成の把握できる資料はほとんどない。これらの方々は遺物包含層から出土したもので、遺構内出土により共伴関係が知られた事例も少ない。しかしながら、土器型式において連続した内容を包括しており、県内における当該期様相を理解する一端となろう。なお、県内で当該期に属するまとまった資料が出土した遺跡として、村山市赤石遺跡(佐藤・名和1981)、尾花沢市いるかい遺跡(阿部1983)、山形市にひやく寺遺跡(安部1985)、南陽市月ノ木B遺跡(黒坂1989)、大石田町庚申町遺跡(加藤1984)、東根市小林遺跡(保角1975)などが挙げられる。

- 梓山a遺跡第I群土器の中で1~4類は貝殻沈線文系土器に属し、1類と2類は関東の田戸下層式に併行する一群である。1類は太く粗雑な沈線文を施文するもので、県内の出土例のうち、南陽市須賀田大野平遺跡(佐藤・吉野1986)や小国町市野々向原遺跡(須賀井2000)で略完成形の鋭角的な尖底深鉢を認めており、沈線文のほか貝殻腹縁圧痕文や連続刺突文等により文様構成されることが知られる。2類は棒状工具あるいは範状工具による説い沈線文を施文するもので、横・斜位に抉り取ったような沈線が描出される。3類・4類は田戸上層式に併行する一群である。3類は文様要素として沈線文・押引文・刺突文が主体をなし、明神裏III式に比定される。a類に見られる尖頭状工具によるく状連続押引文が特徴的で、文様は器面を研磨調整した後に施文されるが、c類のように条痕文と組み合う例もある。4類は口辺部に描出された刺突文を文様要素とするもので、大寺・常世式に比定されよう。いずれも器壁が6mm内外と薄く、文様構成は重層的な刺突文の繰り返しによってなされる。連続刺突文による意匠は、前段階における貝殻腹縁圧痕文の置換となったものであろう。絡条体圧痕文が施文される5類は、常世式もしくは関東の子母口式に比定されると思われるが、小破片のため文様構成は不明である。6類の無文土器とした口辺部資料の2点は、焼成や器面調整の観点から4類あるいは5類に併行するものと考えられる。7類と町在家館跡の第I群土器は、関東の子母口式~茅山上層式までの広い範囲で捉えられる条痕文土器で、出土点数は少ない。施文は器面調整とも考えられるが、表裏面とともに条痕文が施されるa類では、文様効果を得るため器表面での施文を異方向から行っている。縄文条痕文土器の8類は、関東の茅山下層・上層式と併行関係にある素山式に比定され、口縁裏側にまで縄文施文が及ぶ70・85例は、ほぼ同時期とされる櫛木上層式に充てられるかもしれない。9類は早期後葉から末葉に属すると考えられる撫糸文施文の土器で、8類に伴出するものと思われる。a類は胴部と口縁部の区画として隆帯が設けられ、特徴的な方形の形態を呈する深鉢である。装飾性に乏しく地文以外の施文は認められないが、胎土の状況や纖維混入の度合いなどは8類に類似し、胴上部へ貼り付けた隆帯の存在から考察して素山式に含まれる可能性が高い。方形土器は新潟県塩谷洞穴や福井県鳥浜貝塚から出土した草創期に

属する土器群に存在し、また南九州の鹿児島・宮崎県下に分布が認められる早期の前平式や吉田式に「角筒形土器」の組成が知られている。東北南半では管見に触れる限り出土事例を知り得ないが、当然これらの系統性を有するものではなく、単品として作製されたものであろう。b類は地文上から引かれる沈線文により文様構成され、素山式に後続する大畠G式に比定されると考える。c・d類は器形の判断とするものもなく、裏面の調整は粗雑なものが多い。時期的には茅山上層式併行の範疇で捉えて大過ないと思われる。

大畠 G 式土器

茅山上層式土器

梓山a遺跡および町在家館跡の第II群土器は、前期初頭の上川名II式から中葉の大木3式期までの内容を包括する。梓山a遺跡第II群1類は、藤状の意匠をもつ繩文原体侧面圧痕文と短沈線文により文様構成されるもので、上川名II式に比定できる。2類の口縁への刻目付文土器も、これに併行するものと考えられる。3類はループ文が施文されたものであり、広範には上川名II式から大木2a式の範疇に充てられるが、口辺に三角形様の構図を作出して充填施文する92・93等は、上川名II式と大木1式の中間型式とされる宮城県桂島貝塚出土土器に類似している。これらのことから、3類の方大は桂島式から大木1式に属すと判断される。4類は羽状繩文を施文するグループであり、町在家館跡の第II群1類が相当する。掲載資料における非結束と結束の比率は、前者が64%と約3分の2を占める。羽状繩文は上川名II式・桂島式で結束されたものが多く、続く大木1式では非結束が主体となり、大木2a式に至ると再び結束事例の増える傾向が指摘されている。出土資料は結束の有無を問わず燃りの異なる2本の原体を使用したものが大半であり、町在家館跡1類に認められる短い原体による施文は桂島式の特徴と合致する内容である。したがってこれらの所属時期は、3類同様に桂島式から大木1式に求められよう。梓山a遺跡5類は0段多条原体の閉端部を利用した回転文が施文されるもので、口辺部の区画内に文様を充填し、無文帯を作出するモチーフ等は3類の92・93例に通じる觀がある。器壁が薄く、繊維の混入量や焼成は3類・4類に近い。類例は見出せなかったが、これらに併行する時期に含めて妥当と考えられる。平行沈線文が引かれる6類は、大木2a式に比定される。7類は刺突文が多段・重層的に描出される類で、ループ文と組み合うものが多いようだ。資料は底部付近から底面にかけて刺突が施されたもので、上川名II式・桂島式に併行すると理解されるが、41・103の他は胎土への繊維の含有が少ない事実から、あるいは大木2a式へ含み得るものもあるのかもしれない。8類は竹管文各種によって文様構成されるもので、町在家館跡5類・6類もこれに該当する。大木2a～3式に併行するものと思われ、8類a・bと町在家館跡5類が大木2a～2b式に、8類c・dと町在家館跡6類土器は大木3式に比定できよう。また、梓山d遺跡から唯一出土した半截竹管状工具で山形沈線文を引く口縁部片も、ここでは大木3式期の土器として捉えておくが、前期末葉の6式に所属する可能性も否定できない。梓山a遺跡9類は、貼り付けた粘土紐に半済し状の刻目が入れた装飾が施されたもので、大木2b～3式の所産と認識できる。なお、町在家館跡3類は大木2a式へ、4類は大木3式にそれぞれ併行するものであろう。その他、地文のみが観察される梓山a遺跡10類および町在家館跡2類は、以上の類型へ伴うものと判断されるが詳細は不明である。ただし、単節繩文として挙げた中にも0段多条の原体がかなり含まれていると思われる。

上川名II式土器

桂島式土器  
大木1式土器

大木2a式土器

大木3式土器

町在家館跡の第III群土器は後期前葉に位置付けられ、関東の堀之内1式に併行する網取II式もしくは南鏡式に据えておく。

表5 繩文土器編年対比表

関 東	東 北 南 半	桙 山 a	町 在 家
諸 磯	大木 3	第 9 類	第 4・6 類
黒 浜	大木 2 b	6 類( 7 類 )	5
関 山	大木 2 a	類	3 類
花 積 下 層	大木 1 ( 桂 島 )	3・4・5 類	1 類
	上川名 II	群 1・2・7 類	群
茅山上層	大畠 G	第 8・9 類	第
茅山下層	素山	7	I
鶴ヶ島台	楓木上層		群
野 島	楓木下層	類	
子 母 口	( 常世 2 )	5 類	
田 戸 上 層	大寺・常世	6 類	
	明神裏 III	4 類	
田 戸 下 層	( + )	3 類	
		1・2 類	

## 2 石 器

各遺跡から出土した石器は、土器の型式内容から大半が縄文時代早期中葉から前期中葉に属するものであろうが、遺構内等から上記の土器と伴出したごく一部の資料を除けば、その帰属時期を明確に示すだけの根拠はない。したがって、石器を時期別に分離することは不可能であるが、出土した石器の内容からその遺跡における生産活動を窺うことができると思われる。

桙山 a 遺跡では総数385点の石器が出土しており、いわゆる tool は打製石器で 71 点、磨製石器が 1 点、礫石器 68 点を数える。当該期における一般的な様相として礫石器比率の高さが窺われ、植物質食料の加工・調理に関わる作業が活発だったことを暗示している。打製石器の内訳を見ると、71 点の tool に対して剥離片が 244 点と少ない。また、礫石器中にはハンマーの機能を担った敲石と見られるものが多く、凹石・磨石等にも敲打痕の認められるものは少ない。よって、定型的な石器の多くは遺跡内に製品として持ち込まれたか、手頃なサイズの剥片に加工した後に持ち込んで剥離・調整を行ったものと考えられる。定型的器種における内訳では、木や骨に対する工具・皮なめし等の用途が想定される石籠の比率が 32% と高く、次いで石鏃と動植物の切裁具の用途を持つ削器が各 20% となり、三器種で 7 割強を占める。一方、町在家館跡では出土点数が少ないものの削器が半数に及ぶ。石鏃等の多さから後背の丘陵地を領域とする活発な狩猟活動が想起されるが、同時に植物質食料の採集・加工も活発に行われていたことも指摘できよう。

## 3 各 遺 蹟 の 様 相

### <桙山 a 遺跡>

4箇所に設定した調査区のうち、1区・2区は縄文時代早期後葉の生活舞台であったようである。出土土器は散発的ながら第 I 群 5 類から 9 類に属するもので、土器型式で関東の子母口式から茅山上層式に併行する内容を包括する。2区からは竪穴住居跡ほかの遺構が検出されており、今回の調査範囲で唯一居住域として確認された。住居跡 2 棟のうち、S T 2 は床面の状

況等から不確実な要素もあったが、ST1は方形プランに壁柱穴を廻らす構造が認められ、周溝や地床炉は存在しない。壁柱と考えられる小ピットは深さが不揃いで浅いものもあるが、住居内に若干傾く場合が多い。これら内傾するピットの存在から、放射状に屋根材を垂下させた構造の住居であったと想定されよう。縄文早期の住居跡としては、近接する八幡原N24遺跡で田戸上層式併行に位置付けられる第2号住居跡(手塚1976)をはじめ、大石田町玉ノ木B遺跡(小向1976)、南陽市須刈田大野平遺跡(前掲)などに類例を求めることができる。また、東側に隣接する法将寺遺跡では、同形態で前期初頭に属する住居跡(手塚1985)の検出例がある。本遺跡の当区域からは前期に降りる土器が出土しておらず、早期未葉以降は居住域を他に移したものと理解される。

段丘縁辺にあたる3区では、南西部を主体に袋状形態を含む土坑や陥穴ほかの遺構が検出された。その状況から遺構の分布はさらに西側へ広がる様相が看取され、住居跡が存在する可能性も考えられた。出土土器は第II群の各類を主体としたが、第I群1~3類に属する早期中葉(田戸下層・上層式)に比定できる一群を認め、これらは遺構の密度が希薄な調査区中央域に分布する傾向が窺われた。第II群土器は1・2・5・9類を除く各類で組成され、型式的に桂島式(上川名式)から大木3式までの継続が確認できた。これらの土器は遺構に伴うものが僅少・散発であったため、遺構個々の所属時期を決定するまでには至らなかったが、その大方は第II群土器を伴う前期前葉の所産と考えられる。一方、打製石器では捶器を除く定型的な各器種が一定数認められたが、礫石器は後述する4区に比較して極端に少ない状況にあった。このことから、当区域で植物質食料の加工作業がほとんど行われなかったことを意味し、主に狩猟場と食糧貯蔵のための領域であったと考察される。

4区では遺物包含層が遺存する西半部を中心とし、遺構が検出され、微高地状の高台となる中央域はかなり削平を受けていた。遺構は土坑や陥穴が主体であったが、平安期の須恵器片を伴う畝状の溝跡が重複しており、当該期には耕作地として利用されていたと推測される。削平を受けていない北西部で多くの遺物が出土し、土器は3区同様に第II群の各類が主体的に出土したが、I群土器も一定数を含んでいる。早期の田戸上層式併行期に当地の利用が開始され、一端途絶えるが茅山式併行期に再入植し、以後は前期中葉の大木3式期まで坦々と継続したものと認識できる。石器には打製・磨製・礫の各器種が存在し、数量も比較的多く、製作途中の未成品と考えられる5点の抉入石器も認められた。凹石や磨石など礫石器の多さは、背後に植生豊かな丘陵地を控えて、食料の採集・加工が活発に行われたことを物語っている。調査区東西両端部からは块状耳飾りが各1点出土しており、S X251に伴うものは完形品であった。調査中、検出遺構に墓坑と判断されるものは認めなかったが、単発的に存在する可能性もあり、隅丸方形様のSK201等はあるいはこれに該当するのかもしれない。

#### ＜桿山d遺跡＞

標高340m前後を測る南北方向の尾根上が遺跡であり、長さ約40mに設定した調査区から陥穴をはじめ10数基の掘り込みが検出された。同一時期の所産か否かは出土遺物がなく不明であるが、尾根上への構築のためにほぼ直線的な配置と見なされる。陥穴は長軸が等高線に平行した向きの構築で、獣道に配したものであろう。地形から考えても獵場と判断でき、遺跡北側にあたる尾根下部の平地が集落の主体であったことは充分に想定される。

狩猟場と食糧貯蔵の領域

植物質食糧の採集・加工

## &lt;町在家館跡&gt;

梓山a遺跡の北西方、南東側の田面より一段高い台地上に立地し、中世の館跡として登録された遺跡である。試掘調査等の結果から、今回の調査区は遺跡範囲の南端部の台地縁辺を対象に設置したが、近年までのブドウ栽培の影響による痕跡と攪乱が激しく、館跡に関する遺構や遺物は確認されなかった。2区を主体として、部分的ながら繩文時代の遺物包含層が遺存しており、土器や石器の散布が認められたほか土坑3基が検出された。

出土土器は第II群とした前期前葉を中心とする時期に主体をおくことができ、梓山a遺跡4区の様相に近いと思われる。石器では削器の点数が多いものの、磨製石斧ほかの各器種により組成される内容や礫石器の多さから見ても、梓山a遺跡4区と同様と理解される。相違点は後期の土器片が含まれることであり、集落が営まれたかは定かでないが、当地に再び生活の痕跡が遺されたようだ。前期・後期ともに住居跡は未検出ながら、主に植物質食料採集のための小キャンプサイト 規模集落、あるいはキャンプサイトであったと結論付けておきたい。

## 引用・参考文献

- |           |  |
|-----------|--|
| 興野義一      | 1967 「大木式土器理解のために( I )」『考古学ジャーナル』13  |
| 興野義一      | 1968 a 「大木式土器理解のために( II )」『考古学ジャーナル』16   |
| 興野義一      | 1968 b 「大木式土器理解のために( III )」『考古学ジャーナル』18  |
| 川崎利夫・保角里志 | 1975 『小林遺跡—绳文前期遺跡と平安時代集落跡』東根市教育委員会   |
| 小向裕明      | 1976 「玉ノ木B遺跡」『さあべい』2巻1号  |
| 手塚 孝      | 1976 「月24・清水北C 遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書』第2集 米沢市教育委員会                         |
| 山形県       | 1978 『土地分類基本調査』米沢・開 国土調査   |
| 岩瀬康治・佐藤則之 | 1980 『三神峰遺跡発掘調査報告書—東北電力送電線鉄塔移設に伴う北東部C地区緊急発掘調査—』仙台市文化財調査報告書第25集 仙台市教育委員会・東北電力株式会社宮城支店 |
| 佐藤庄一・名和達朗 | 1981 『赤石遺跡発掘調査報告書—山形県埋蔵文化財調査報告書第35集』山形県教育委員会   |
| 阿部執彦      | 1983 『いろいろい遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第69集 山形県教育委員会                                      |
| 加藤 稔ほか    | 1984 『庚申町遺跡発掘調査報告書』大石田町埋蔵文化財調査報告書第3集 大石田町教育委員会                                       |
| 小川 出・村田晃一 | 1985 『今熊野遺跡II—繩文・弥生時代編』宮城県文化財調査報告書第114集 宮城県教育委員会                                     |
| 手塚 孝・菊池政信 | 1985 『法将寺遺跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第12集 米沢市教育委員会  |
| 安部 実      | 1985 『にひゃく寺遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第92集 山形県教育委員会                                      |
| 佐藤嶽雄・吉野一郎 | 1986 『南陽市須刈田大野平遺跡発掘調査報告書』山形県南陽市埋蔵文化財調査報告書第2集 南陽市教育委員会                                |
| 黒坂雅人・渋谷孝雄 | 1989 『月ノ木B 遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第135集 山形県教育委員会                                     |
| 戸田哲也      | 1994 『施文原体 繩文』『繩文文化の研究5 繩文土器III』雄山閣  |
| 須賀井新人ほか   | 2000 『市野々向原遺跡』『野向遺跡・市野々向原遺跡・千野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第71集 財団法人山形県埋蔵文化財センター       |

## 打製石器属性表註

## &lt;石鎌&gt;

- 1 大きさ：長、幅は下図に示したように、その全長、ならびに最大幅である。厚さは最大厚である。折損品についてばくを付し、残存値を示した。単位はmmである。
- 2 桁深・基長：下図に示したように無茎の石鎌の抉りの深さ、基長は最大幅の位置より下位の長さとした。前者にはー、後者には+を付して示した。単位はmmである。
- 3 最大幅：尖頭部にあるものをA、基部・脚部にあるものをBとし、下端部にある場合には'を付した。
- 4 側縁：直線状となるものをa、凸弧のものをb、凹弧となるものをc、「く」の字状に曲がるものとdとした。

- 5 折損部位：尖頭部先端をa、左の脚部をb、右をc、円基部分をdとした。

## &lt;石槍&gt;

- 1 大きさ：長、幅は下図に示したように、その全長、ならびに最大幅である。厚さは最大厚である。折損品についてばくを付し、残存値を示した。単位はmmである。
- 2 最大幅の位置：全長を二分した場合、その上半部にあるものをA、下半部にあるものをBとし、下端にあるものはB'とした。
- 3 側縁：先端部を上に向け、調整加工により入念な方を上にして置いたときの左側を左、右側を右とし、尖頭部から基部までの側縁の形態を、直線状になるa、凸弧を描くb、凹弧を描くc、「く」の字状となるdの四種類に分けて示した。
- 4 残存部位：全長を三等分して、先端部をA、中央部をB、基部側をCとして、折損品の残っている部分を示した。

## &lt;石錐&gt;

- 1 大きさ：長、幅は下図に示したように、その全長、ならびに最大幅である。厚さは最大厚である。折損品についてばくを付し、残存値を示した。単位はmmである。
- 2 尖頭部：下図に示したように尖長は尖頭部の中間位置の幅である。II類の尖頭部の長さは先端に向かって収束する変曲点の位置から先端までとした。なお、不明瞭なものは裏面の調整加工が認められる位置から先端までとした。
- 3 尖頭部加工：先端部を下に向け、素材の背面側を上に置いたときの左側をa、右側をb、裏面の右側をc、左側をdとした。したがってaとd、bとcで縁辺を形成することになる。○印が加工のあることを示す。

## &lt;石匙&gt;

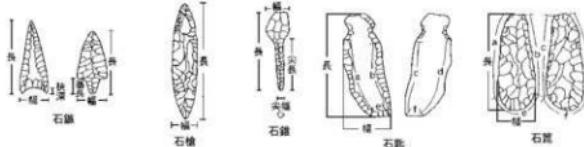
- 1 大きさ：下図に示したように、左右のノッチの最奥部を結んだ線上に垂線を引き、上端・下端の最も突出する位置からこの垂線に直交する線を引き、その距離を長とした。同じく左右の最も突出する位置から、垂線に平行な線を引いたその距離を幅とした。厚は最大厚である。
- 2 加工部位と種類：素材の背面を上にしてつまみ部を上に置いた場合、表面の左側をa、右側をb、裏面の左側をc、右側をd、また表面の下縁をe、その裏をfとした。それぞれの部位の加工状況を示した。先端の尖るものはe・f欄にxを記入し、加工のない場合はーとし、折損や破損により加工の有無が判断できないものは/とした。加工の種類は1：通常剥離、2：フルーティング様剥離、3：奥行き2mm前後の微細な剥離の三種類に分け、縁辺の全長にわたるものについてはa、縁辺を三等分した場合、その1/3以上が加工されているものをB、1/3未満のものをCとして、その組み合わせを記入した。また、一縁辺が異なる種類の剥離で構成されている場合には、上部から順に3・1・Aのように記した。なお、加工が素材の中央部に達する面的な加工が施されているものは、数字を○で囲んだ。
- 3 縁辺の状況と平均刃角：縁辺が直線状となるものをA、凸弧を描くものをB、凹弧を描くものをCとし、一つの側縁が異なる形態となるものについては上部から、B-C(上半部が凸弧、下半部が凹弧)などしていることを示す○のように上部から記載した。刃角はa・d、b・c、e・fによって構成される各縁辺について、加工の有無を問わずに2cmに一ヶ所ずつ、5度ごとに刻みを入れたボール紙を使って計測し、その平均値を記した。

## &lt;石鋸&gt;

- 1 大きさ：石器の軸線を基準として、その全長を長、見かけの幅を幅、最大厚を厚とした。
- 2 加工部位と種類：素材の主要剥離面を下に、基部側を上位に置いたときの左側縁をa、右側縁をb、末端をe、この状態から正位で裏返したときの左側縁をc、右側縁をd、末端をfとして区分した。加工種類は石匙と同じである。なお、完全に両面加工となっている素材の背面、主要剥離面のわからぬものについては、末端にフルーティングなど入念な加工が施されている方を表面とした。末端の形状でもなお表裏の区別がつかないものは、任意に表面を決定した。
- 3 縁辺の状況と平均刃角：石匙と同じ。
- 4 残存部位：完形品は空欄、上部が残存しているものはA、中間部資料はB、末端部資料はCとした。

## &lt;捶器・削器&gt;

- 1 大きさ：素材の背面側を表、主要剥離面側を裏とし、基部側を上位に置いたときの全長を長、最大幅を幅、最大厚を厚とした。
- 2 加工部位と種類：1と同様に素材の背面側を表、基部側を上位に置いたときの左側縁をa、右側縁をb、末端をeとし、b、c、fは石匙・石鋸と同様であり、記載方法も石匙の項によった。
- 3 残存部位：石鋸と同じ。



第65図 打製石器計測位置模式図

表6 石鎚属性表

&lt;桙山a遺跡&gt;

図版	No	出土区	石材	大きさ			重量 (g)	抉深 (基長)	最大幅 の位置	側縁 左 右	折損	分類
				長	幅	厚						
第33図	3	ST-2F1	頁岩	31.1	(31.3)	(13.1)	(8.61)	± 0	B	d a	c d	IV
	6	SK65F1	頁岩	19.5	13.9	3.6	0.85	- 1.2	B	b b	-	I
第34図	7	25- 28III	頁岩	33.7	18.7	6.0	3.21	± 0	B'	d a	-	II
	8	26- 29III	頁岩	36.9	(23.0)	(7.1)	(6.79)	± 0	-	- b	b	IV
	23	24- 25II	頁岩	19.1	(18.6)	(5.0)	(1.38)	± 0	B	b a	d	IV
	24	26- 46II	頁岩	23.9	(19.9)	(3.5)	(1.61)	± 0	B'	a a	d	IV
	25	27- 45II	頁岩	18.5	16.2	3.1	0.81	± 0	B'	a a	-	II
	26	25- 49II	頁岩	21.9	15.0	3.9	0.99	± 0	B'	a a	-	II
第36図	27	27- 46II	頁岩	25.9	15.4	3.6	1.23	± 0	B	c b	-	II
	29	23- 49II	頁岩	26.7	(17.6)	5.3	(2.69)	± 0	B	b a	c	IV
	30	24- 48II	頁岩	36.8	33.1	7.1	9.42	+ 16	B	d d	-	III
	28	26- 44II	頁岩	21.7	20.6	7.1	(3.66)	+ 4	B	a a	a	IV
	31	24- 49II	頁岩	34.2	26.3	8.1	5.97	± 0	B	b b	-	IV
	32	25- 46II	頁岩	45.0	36.0	8.7	11.26	± 0	B	c b	-	IV

&lt;桙山d遺跡&gt;

図版	No	出土区	石材	大きさ			重量 (g)	抉深 (基長)	最大幅 の位置	側縁 左 右	折損	分類
				長	幅	厚						
第54図	2	X- 0	頁岩	30.2	15.7	7.7	2.96	± 0	B'	a a	-	II

&lt;町在家銀鉱&gt;

図版	No	出土区	石材	大きさ			重量 (g)	抉深 (基長)	最大幅 の位置	側縁 左 右	折損	分類
				長	幅	厚						
第59図	1	35- 35III	頁岩	36.6	21.3	5.9	4.79	+ 4	B	a b	-	II

表7 石槍属性表

&lt;桙山a遺跡&gt;

図版	No	出土区	石材	大きさ			重量 (g)	最大幅 の位置	側縁 左 右	残存 部位	分類
				長	幅	厚					
第34図	9	X- 0	頁岩	(39.0)	(21.7)	(6.2)	(4.01)	B	b b	A B	

表8 石錐属性表

&lt;桙山a遺跡&gt;

図版	No	出土区	石材	大きさ			重量 (g)	尖頭部				折損	分類
				長	幅	厚		長	幅	厚	断面形	a	
第33図	4	ST-2F1	頁岩	32.1	18.2	6.2	(3.53)	3.3	8.7	2.5	カマボコ型	○ ○ ○ ○	先端 I
10	16-34II	頁岩	23.7	8.5	5.7	1.06	1.5	3.2	3.0	台形	○ ○ ○ ○ ○ ○		II
11	22-31II	頁岩	36.7	12.7	7.4	2.42	1.6	3.2	2.1	三角形	○ ○ ○ ○ ○ ○		I
33	SK202F1	頁岩	32.0	14.2	3.5	1.71	1.8	2.5	1.6	凸レンズ	○ ○ ○ ○ ○ ○		I
34	23-49II	頁岩	44.8	12.0	4.6	2.11	2.4	3.8	2.5	カマボコ型	○ ○ ○ ○ ○ ○		II

表9 石斧属性表

&lt;桙山a遺跡&gt;

図版	No	出土区	石材	大きさ			重量 (g)	加工部位と種類				縁辺状況と平均刃角				分類				
				長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a-d	刃角	b-c	刃角			
第33図	1	13- 6II	頁岩	44.3	21.3	4.8	5.36	A	A	B	A	A	A	B	40	A	33	A	50	II b
第34図	12	20- 35II	頁岩	63.3	29.5	8.4	16.25	A	A	-	A	x	x	B-A	55	B	55			I a
	35	26- 46II	頁岩	51.4	28.3	6.3	9.31	B	A	-	B	x	x	B	30	B-A	45	x		I b
	37	24- 50II	頁岩	66.5	28.0	4.10	8.20	A	A	-	A	A	B	B	45	A	43	B	25	II c
	36	26- 45II	頁岩	(61.1)	(30.8)	(10.4)	(19.19)	A	A	B	B	B	B	B	50	B	50	B	50	I c
	38	26- 49II	頁岩	49.8	28.7	8.5	11.22	A'	A	B	B'	A	A	C	45	B	43	B	45	下半 II a
	39	SK214F1	頁岩	48.0	38.7	7.4	11.41	A	A	-	B	A	B	A	30	C	35	A	43	II c

&lt;町在家銀鉱&gt;

図版	No	出土区	石材	大きさ			重量 (g)	加工部位と種類				縁辺状況と平均刃角				分類				
				長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a-d	刃角	b-c	刃角			
第59図	2	35- 36	頁岩	73.6	21.3	11.1	16.26	A	A	A	A	x	x	B	48	A	52	x	-	I a

表10 石館属性表

&lt;桙山古道跡&gt;

図版	No	出土区	石材	大きさ			重量 (g)	加工部位と種類						縁辺状況と平均刃角				分類			
				長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a-d	刃角	b-c	刃角	e-f	刃角		
第34図	13	SK6F1	頁岩	81.5	39.9	12.7	41.44	A	A	-	B	A	B	A	53	A	53	B	60	IIa	
	14	SK6F1	頁岩	(72.4)	38.4	15.2	(26.67)	A	A	A	-	-	-	A	60	A	68	-	-	B	V
第35図	15	15-34II	頁岩	86.9	37.5	16.1	52.27	A	A	-	-	A	-	A	65	A	68	B	75	IIc	
	16	23-26II	頁岩	72.7	50.1	16.9	72.36	A	A	-	-	A	-	B+B	80	B	75	A	85	V	
第36図	17	20-30III	頁岩	77.6	37.3	13.1	38.49	A	A	A	A	A	A	A	70	A·C	62	A	55	IIa	
	18	24-26III	頁岩	87.3	43.5	11.2	38.67	A	-	B	-	A	-	A	60	B	58	B	58	IV	
第37図	40	23-49II	頁岩	52.7	32.4	13.4	20.53	-	C	A	B	A	-	A	80	C	65	B	65	IIa	
	41	24-25II	頁岩	51.6	32.8	11.5	19.60	B	A	B	C	A	-	A+B	B	65	A	65	IIa		
第38図	43	24-45II	頁岩	(85.7)	45.4	13.2	(46.98)	A	A	A	B	A	B	A	70	A·C	73	B	73	B·C	I
	44	24-44II	頁岩	55.5	31.5	13.2	18.61	-	A	A	A	C	A	C	70	B+A	65	B	75	IIa	
第39図	46	24-45II	頁岩	40.8	38.6	11.5	20.21	A	A	B	A	B	B	B	65	B+A	65	B	65	IIIa	
	45	23-43II	頁岩	31.9	25.8	11.5	10.94	A	A	A	-	A	C	75	A	75	B	65	V		
第40図	47	22-44II	頁岩	70.6	42.3	19.3	62.29	A	A	B	C	A	B	A	70	A	77	B	80	IIIc	
	48	26-45II	頁岩	45.8	29.7	12.0	15.41	A	A	A	-	A	A	A	50	A	50	B	80	IIa	
第41図	49	27-46II	頁岩	33.5	26.7	9.1	8.34	A	A	A	A	A	B	50	A	50	A	65	IIIb		
	50	23-47II	頁岩	36.5	24.7	9.3	6.34	A	-	A	A	A	A	A	58	A	-	A	65	I	
第42図	52	24-47II	頁岩	53.1	24.9	12.4	10.35	A	C	-	-	-	-	B	20	B	65	*	V		
	53	26-48II	頁岩	48.1	31.7	11.7	18.93	A	A	A	A	A	-	A	68	B	60	B	55	IIa	
第43図	51	30-44II	頁岩	(32.7)(3.5)(6.0)	(7.46)	-	A	B	A	A	B	B	B	60	B	50	-	-	V		
	54	26-47II	頁岩	70.5	44.5	14.2	39.48	A	C	-	-	A	C	63	A	65	B	68	IIc		
第44図	55	25-47II	頁岩	(50.9)	29.9	12.0	(16.25)	B	A	A	A	B	A	75	A	80	B	75	B+C		
	42	23-47II	頁岩	45.8	33.4	12.2	(16.82)	A	A	A	A	A	A	75	A	65	A	60	IIa		

&lt;桙山古道跡&gt;

図版	No	出土区	石材	大きさ			重量 (g)	加工部位と種類						縁辺状況と平均刃角				残存 部位	分類	
				長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a-d	刃角	b-c	刃角	e-f	刃角	
第54図	3	SK6F1	頁岩	34.4	23.0	9.7	9.34	A	A	-	A	-	A	45	A	50	A	30	C	IIa

&lt;町在家鉄道&gt;

図版	No	出土区	石材	大きさ			重量 (g)	加工部位と種類						縁辺状況と平均刃角				残存 部位	分類		
				長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a-d	刃角	b-c	刃角	e-f	刃角		
第59図	3	35-36III	頁岩	45.5	35.5	13.9	32.30	A	-	A	-	A	A	B	53	A	-	B	63	C	IIIa

表11 搾器・削器属性表

&lt;桙山古道跡&gt;

図版	No	出土区	石材	大きさ			重量 (g)	加工部位と種類						縁辺状況と平均刃角				残存 部位	分類		
				長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a-d	刃角	b-c	刃角	e-f	刃角		
第33図	2	11-9II	頁岩	91.8	50.7	20.7	79.16	C	A	C	-	A	C	B	70	A	55	B	80	-	II
	56	24-49II	頁岩	59.0	55.0	14.7	52.96	A	A	-	-	A	C	B	55	A+B	53	B	63	-	II
第34図	5	5T1F2	頁岩	21.0	23.8	4.1	2.27	A	-	A	A	A	B	40	A·C	-	B	45	-	IV	
	19	23-30II	頁岩	(33.4)(26.5)(11.8)	(6.99)	A	-	-	x	x	A	-	-	55	A	65	-	-	C	IIIa1	
第35図	20	20-34II	頁岩	65.2	40.5	11.0	37.22	-	-	A	x	x	B	50	B	-	-	-	-	IIIa2	
	21	24-27II	頁岩	(33.4)(32.5)(13.1)	(16.67)	-	-	A	-	-	B	75	C+A	63	A	-	-	-	-	IIIb2	
第36図	22	25-29III	頁岩	44.8	37.5	6.7	11.75	A	A	B	-	-	-	B	30	B	50	C	-	III d1	
	57	25-47II	頁岩	61.8	19.5	9.0	12.79	A	C	C	-	-	B+C	55	A	-	-	-	-	IIIa1	
第37図	58	SK220F1	頁岩	74.0	49.6	12.7	42.43	A	A	-	A	B	C	65	A·C	70	A	60	B	II	
	59	25-29III	頁岩	73.3	33.2	6.9	16.86	A	A	A	-	C	A	48	B	45	A	25	-	IIIc	
第38図	60	25-49II	頁岩	83.6	111.4	19.5	146.19	C	A	A	A	B	A	B	55	B	46	A	60	-	III d
	62	26-45II	頁岩	(37.5)(8.9)(10.2)	(10.92)	-	-	A	-	A	C	33	A	38	B	25	C	38	-	-	IIIb1
第39図	61	24-48II	頁岩	51.6	43.0	17.0	42.75	A	B	B	B	B	B	65	A	68	B	75	-	IIIa1	
	63	27-46II	頁岩	92.0	63.5	14.8	99.94	C	A	A	-	A	C	45	B	47	B	65	-	I	
第40図	64	23-47II	頁岩	40.7	46.3	7.5	10.36	-	-	B	-	A	-	A	25	C+B	40	B	40	V	
	65	27-46II	頁岩	(32.0)(45.9)(11.6)	(17.76)	B	B	C	A	-	B	35	B	50	-	-	A	35	-	IIIb2	

&lt;町在家鉄道&gt;

図版	No	出土区	石材	大きさ			重量 (g)	加工部位と種類						縁辺状況と平均刃角				残存 部位	分類	
				長	幅	厚		a	b	c	d	e	f	a-d	刃角	b-c	刃角	e-f	刃角	
第59図	4	35-36III	頁岩	112.4	43.1	15.5	55.10	B	A	C	B	x	x	B+C	60	B+B	59	-	-	II
	5	35-36III	頁岩	76.7	35.2	10.2	27.47	A	A	-	B	-	A	57	C	62	B	50	-	IIIc
第60図	6	34-37III	頁岩	59.9	33.5	8.3	24.29	A	A	-	-	A	48	B+C	63	A	65	-	-	IIIc
	7	32-42II	頁岩	(40.6)(39.9)(14.3)	(28.04)	A	A	-	-	x	A+A	65	A	48	B	73	-	A	35	-
第61図	8	32-42II	頁岩	43.3	33.1	10.5	13.59	B	B	-	-	x	A+A	65	A+A	65	A	65	-	IIIa1
	9	34-37III	頁岩	57.0	49.5	17.7	40.14	-	C	-	A	B	C	70	A+A	48	A+A	70	-	II



写 真 図 版

---



梓山 a 遺跡



1区全景



S T1・2住居跡検出状況

梓山 a 遺跡



2 区遺構換出作業



5 T1住居跡精査風景



SK12 陷穴



ST1住居跡東西ベルト土層断面



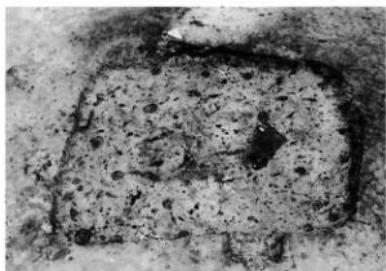
ST2住居跡南北ベルト土層断面



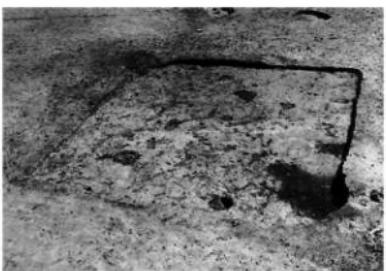
ST1住居跡南北ベルト土層断面



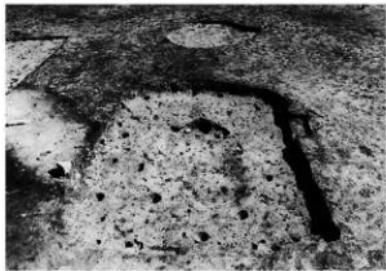
ST2住居跡東西ベルト土層断面



ST1住居跡床面検出状況



ST2住居跡床面検出状況



ST1住居跡完掘状況



ST2住居跡完掘状況

梓山 a 遺跡



ST1住居跡完掘状況



ST1・2住居跡完掘状況①



ST1・2住居跡完掘状況②

梓山 a 遺跡



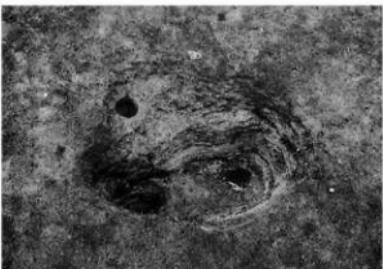
SK31-32 土坑



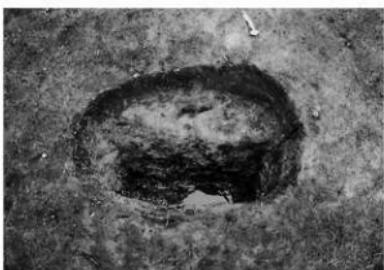
SK59 土坑



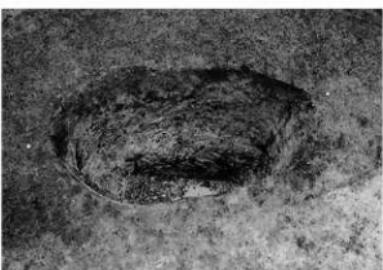
SK59-61 土坑 SK60 陷穴



SK43 陷穴



SK60 陷穴



SK57 陷穴



SK69 土坑 SK70 陷穴

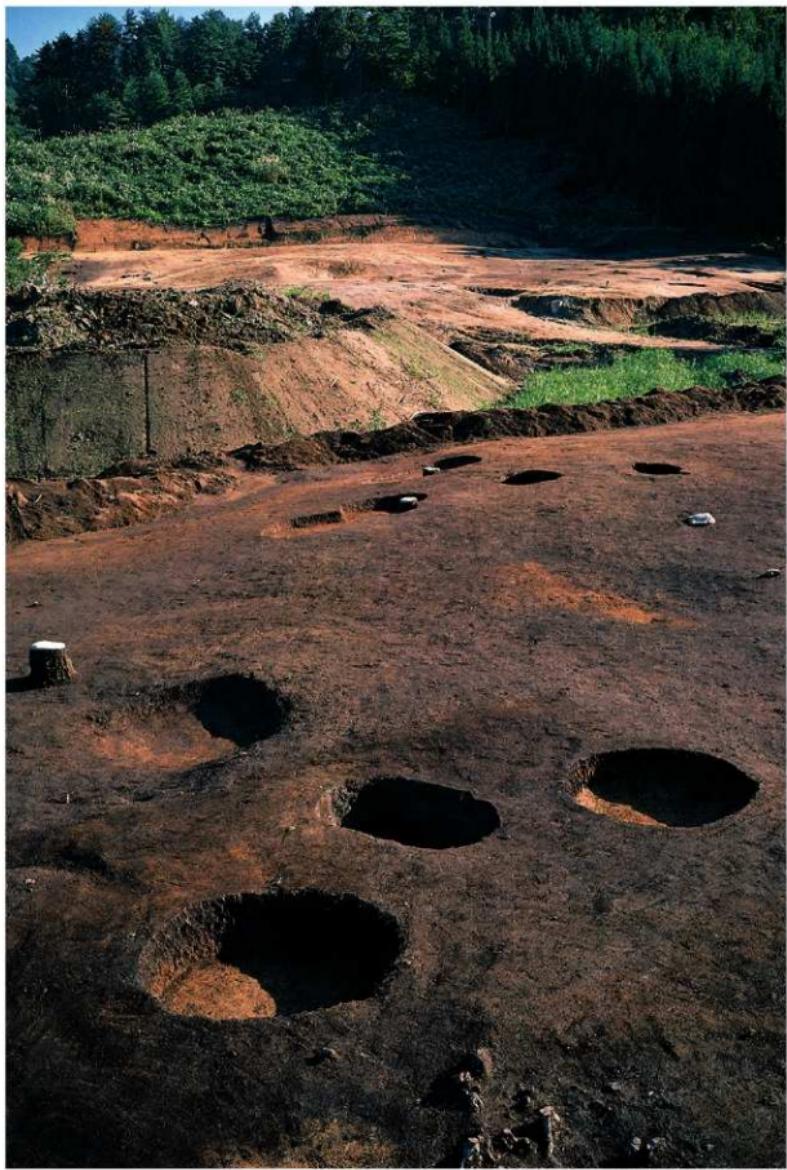


SK94 陷穴



3区遺構完掘状況(南西部)

梓山 a 遺跡



3区遺構完掘状況(中央部)



4区西端部遺構検出状況



SD215溝跡ほか検出状況



4区東端部遺構検出状況

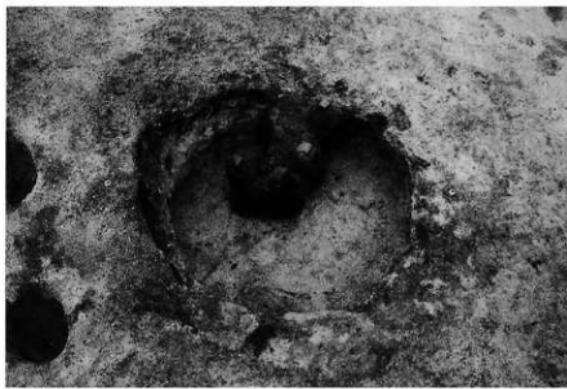
梓山 a 遺跡



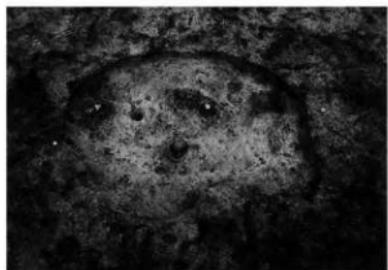
SK214土坑



SK220土坑



SK224土坑



SK248 土坑



SX251 落ち込み



SK234 陷穴

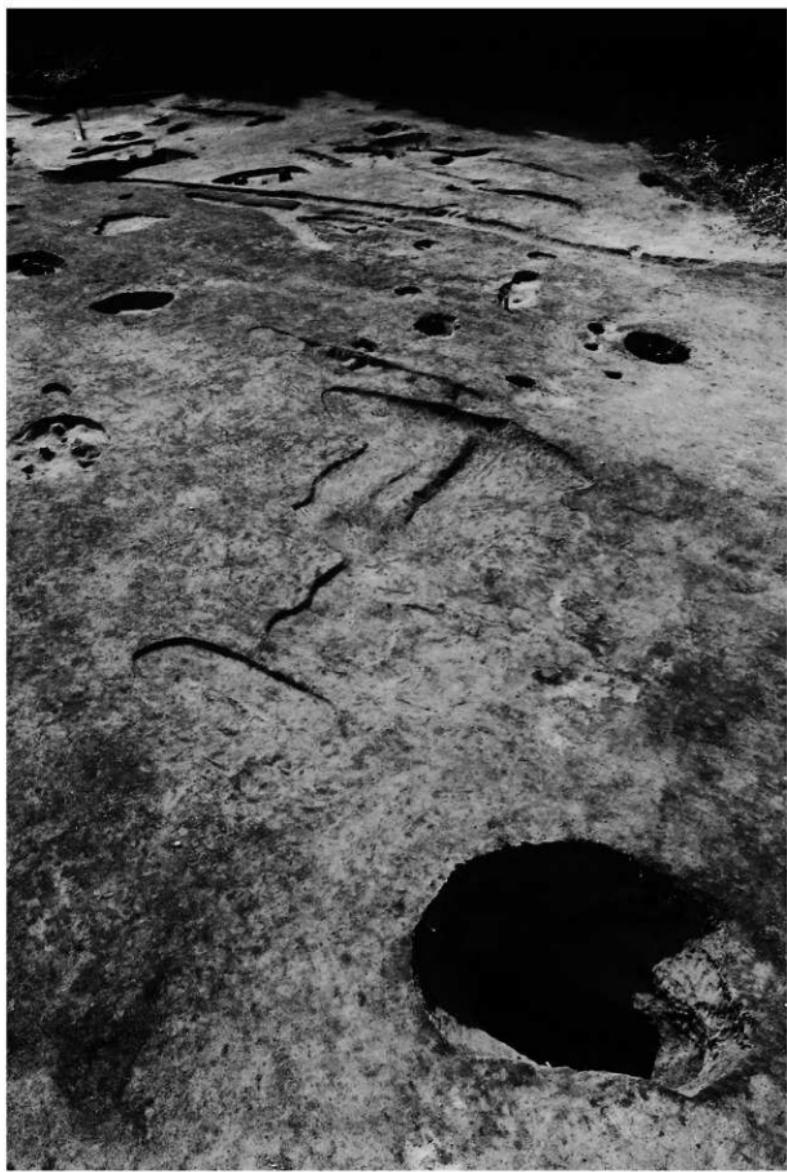


SK254 陷穴



SK245 陷穴

梓山 a 遺跡



4 区遺構完掘状況(西半部)



繩文土器出土状況①



繩文土器出土状況②



繩文土器出土状況③



石匙出土状況①



石匙出土状況②



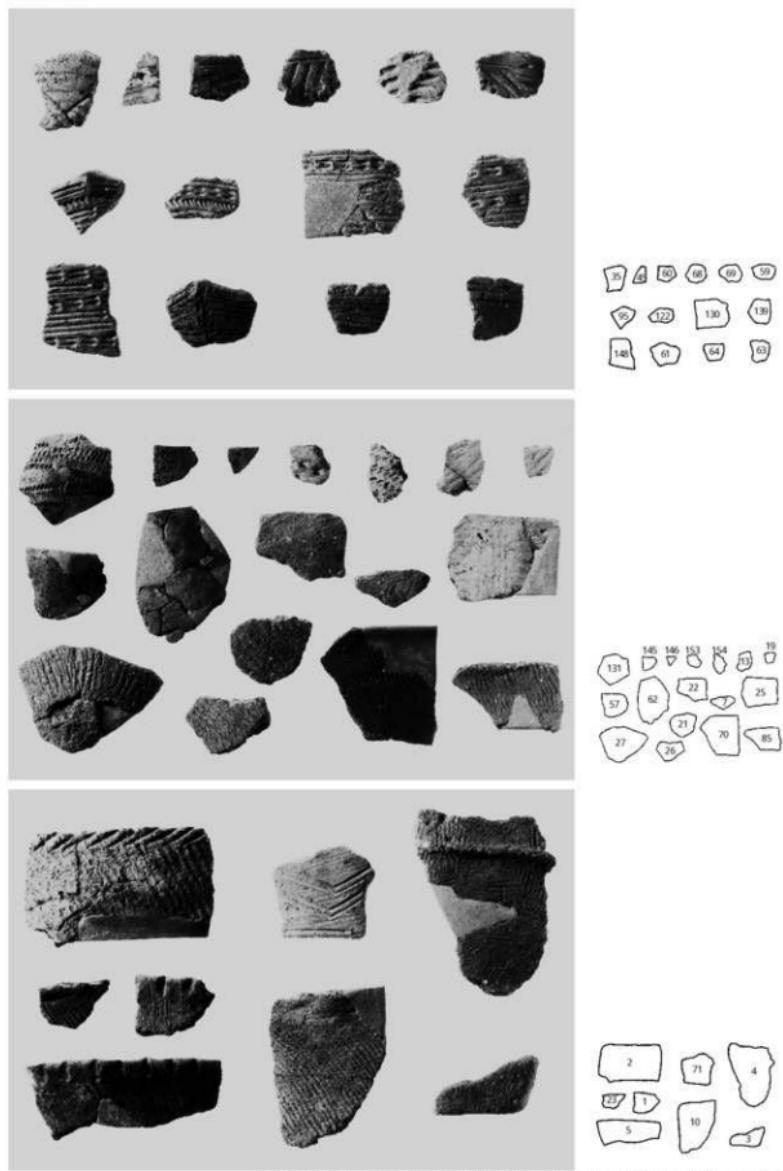
珠状耳飾り出土状況



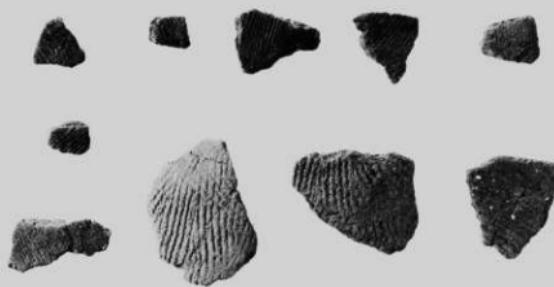
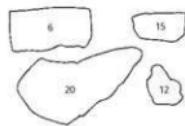
磨製石斧出土状況



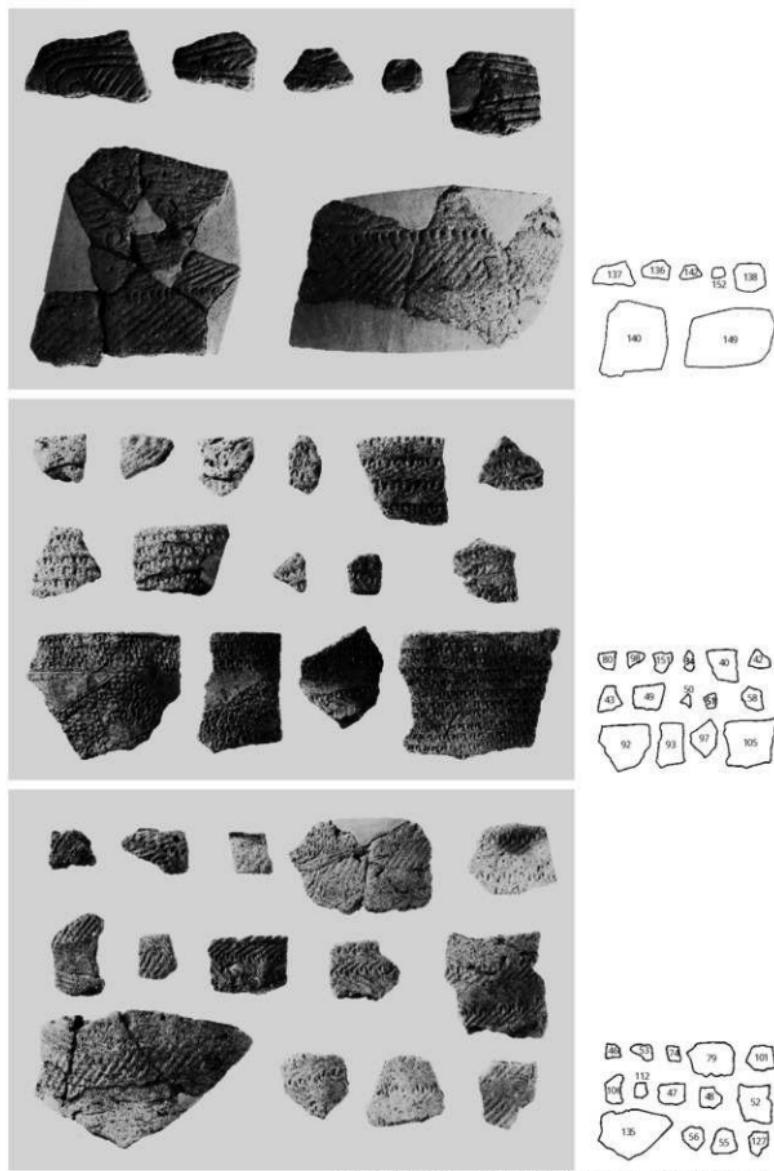
凹石出土状況



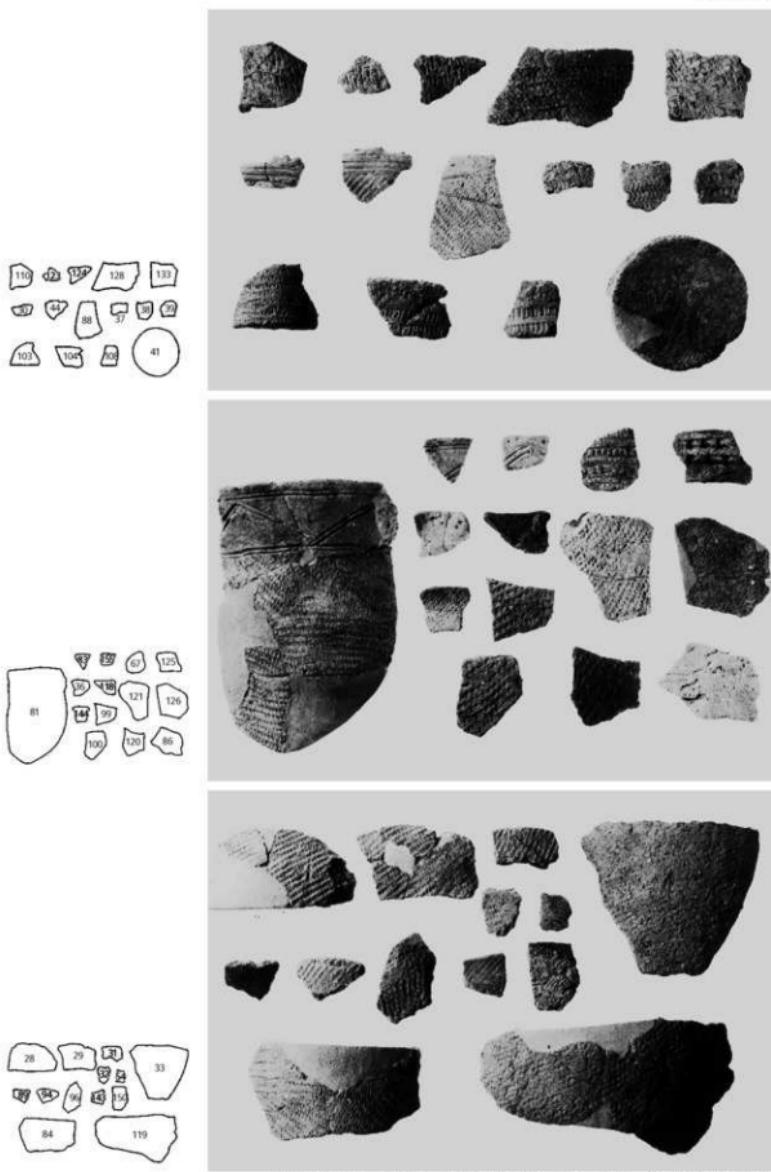
上段：第Ⅰ群 1 ~ 3 類土器，中段：第Ⅰ群 4 ~ 8 類土器，下段：第Ⅰ群 9 a ~ c 類土器



上段・中段: 第 I 群 9 d 類土器, 下段: 第 II 群 1 類土器



上段：第II群1類土器，中段：第II群2・3類土器，下段：第II群4類土器



上段:第II群5~7類土器，中段:第II群8~10類土器，下段:第II群10類土器



96



76



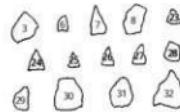
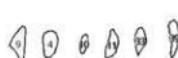
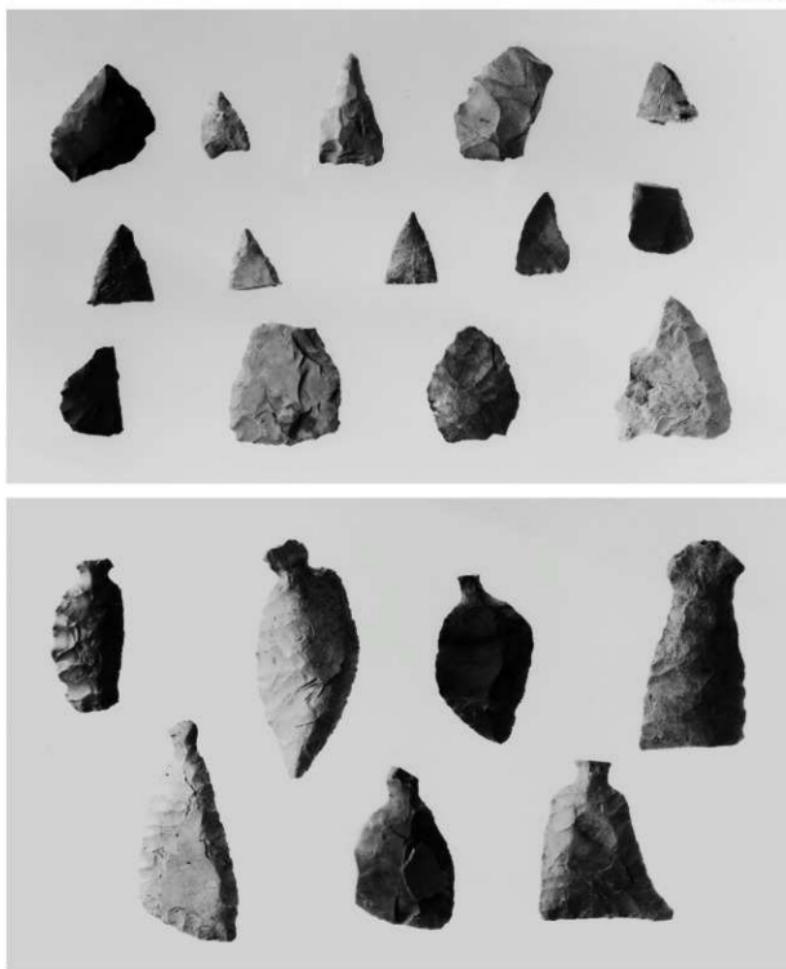
91



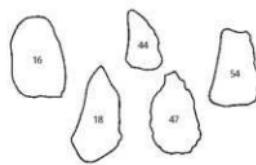
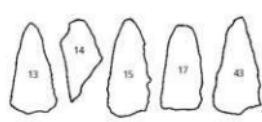
109



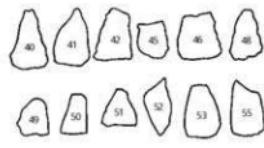
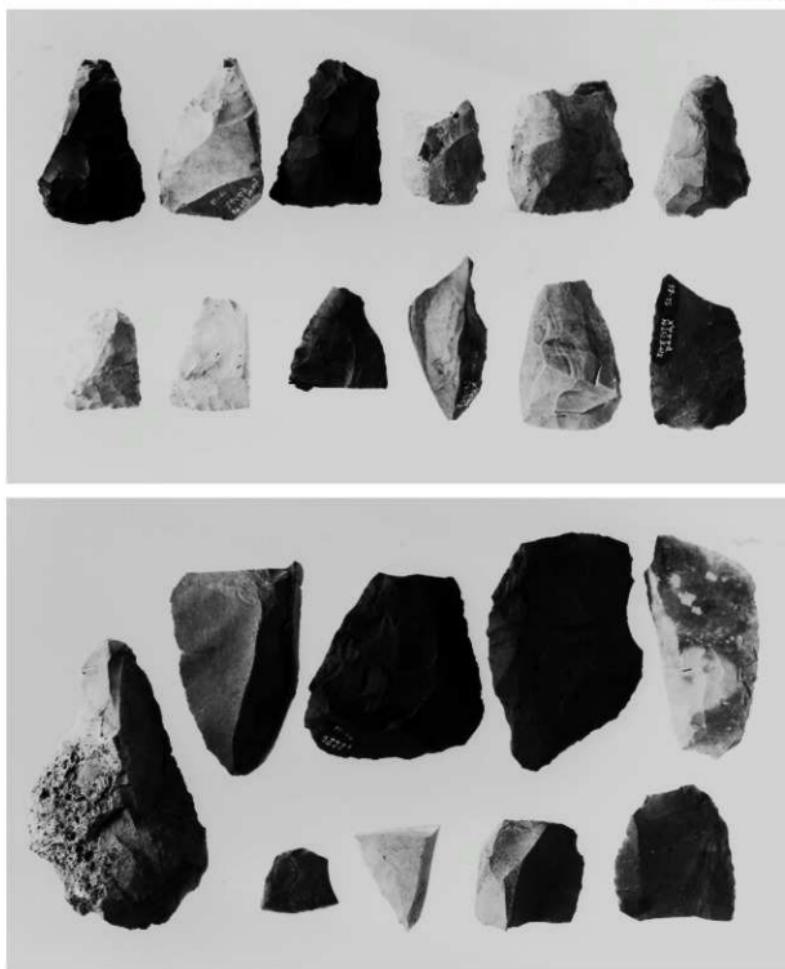
上段左:第Ⅰ群土器, 上段右・中段左:第Ⅱ群4a類土器, 中段右:第Ⅱ群10類土器, 下段:石槍・石錐



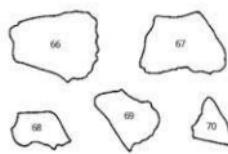
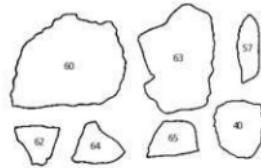
上段:石簇, 下段:石匙



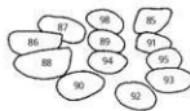
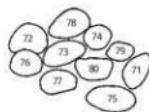
上段・下段：石器



上段：石鎋，下段：撲器・削器



上段：削器，下段：抉入石器



上段左:珠状耳飾り, 上段右:磨製石斧・有溝砥石, 中段・下段:凹石・磨石



97 103 105  
100 101 104



111 117 106  
108 102 109 107 112  
96



99 113 114  
119 115 120 118 116

凹石・磨石

124  
125  
122  
121  
129  
126  
128  
127  
123



134  
133  
131  
132  
130



凹石・磨石

梓山 d 遺跡



遺跡遠景



調査区抜根作業



SK1陷穴



SK14陷穴



SK4陷穴，SK15·16土坑

梓山 d 遺跡



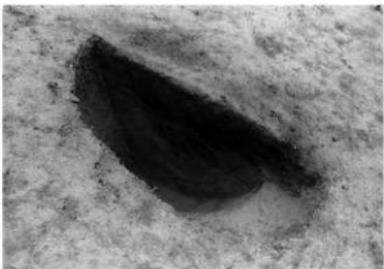
遺構検出状況(北東から)



遺構検出状況(南西から)



遺構精査風景



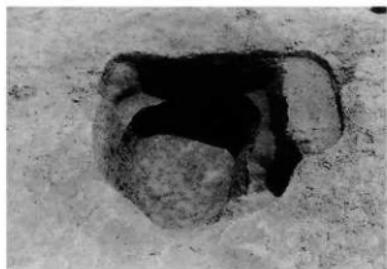
SK1陥穴土層断面



SK2土坑土層断面



SK4陥穴土層断面



SK2土坑



SK3-12土坑



調查区完掘状況



出土遺物

町在家館跡



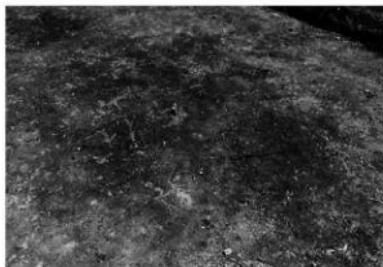
遺跡遠景



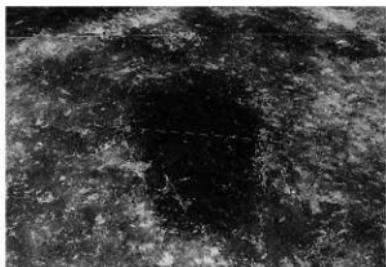
1区遺構検出状況



2区遺構検出状況，壁面基本層序



2区遺構検出状況



SK1土坑検出状況

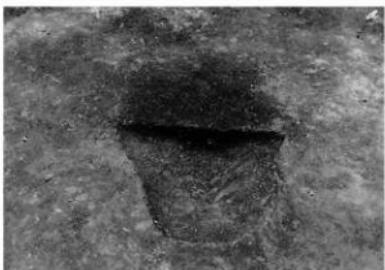


SK1土坑土層断面

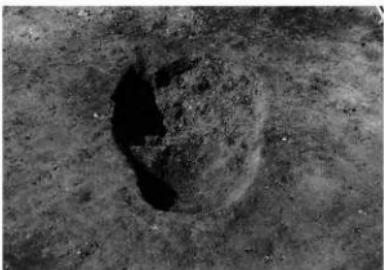


SK1土坑完掘状況

町在家館跡



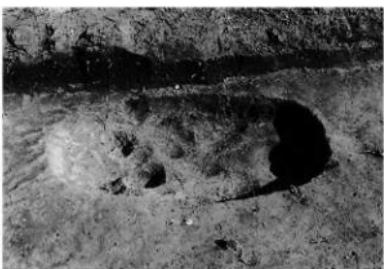
SK2土坑土層断面



SK2土坑完掘状況



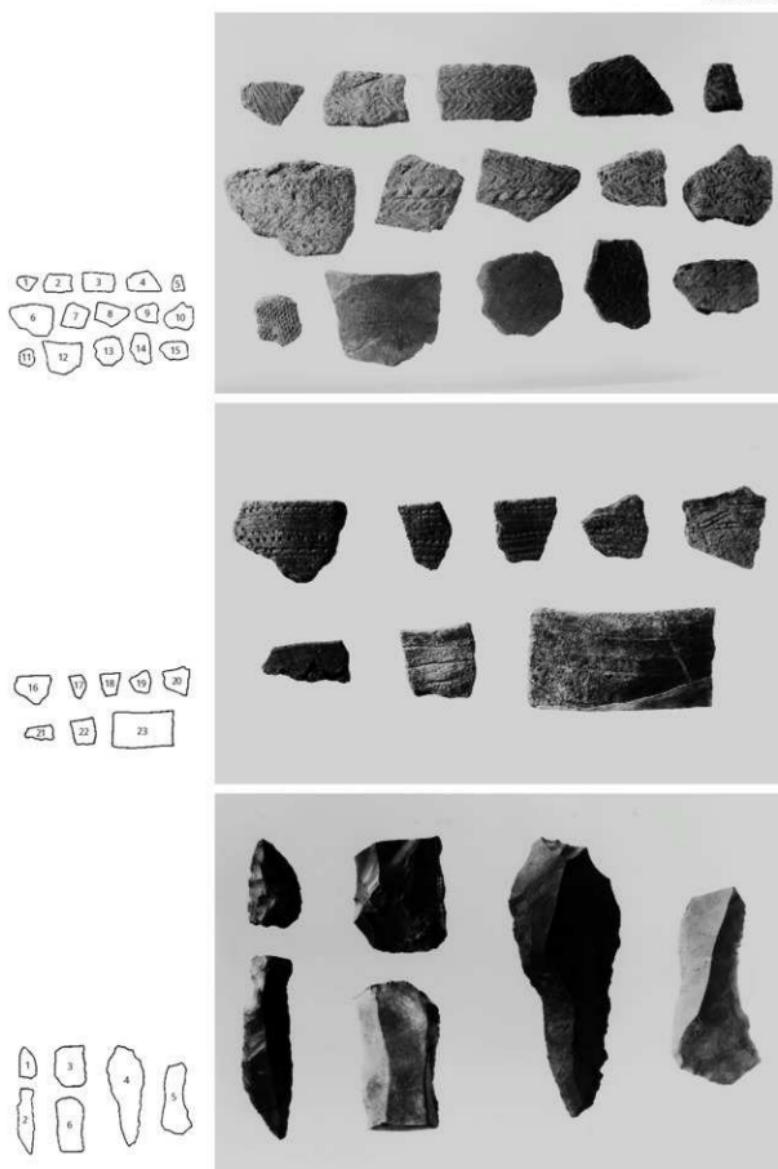
SK3土坑土層断面



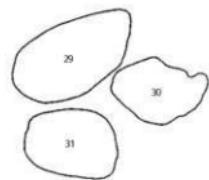
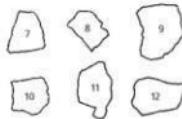
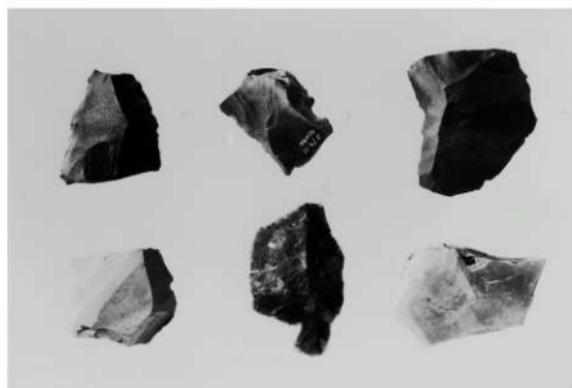
SK3土坑完掘状況



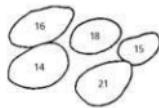
2区遺構完掘状況



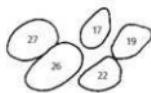
上段:第Ⅰ群土器・第Ⅱ群1~4類土器, 中段:第Ⅱ群5・6類土器・第Ⅲ群土器, 下段:石鎌・石匙・石鋤・削器



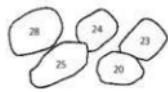
上段:削器・抉入石器, 下段左:磨製石斧, 下段右:石皿



16  
18  
15  
14  
21



27  
17  
19  
26  
22



28  
24  
23  
25  
20



凹石・磨石



## 報告書抄録

ふりがな	すさやまえーいせき・すさやまでーいせき・まちざいけたあとはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	梓山a遺跡・梓山d遺跡・町在家館跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第151集						
編著者名	渋谷孝雄 須賀井新人						
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター						
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301						
発行年月日	2006年3月28日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
すさやまえーいせき 梓山a遺跡	山形県 よねおか 米沢市 よねざわし ばんせいじゅういちやさかわ 万世町梓山 あざとまちひばるやま 字馬乗場		A-278	37度 53分 12秒	140度 10分 21秒	20040607 ~ 20041014	5,600
すさやまえーいせき 梓山d遺跡	山形県 よねおか 米沢市 よねざわし ばんせいじゅういちやさかわ 万世町梓山 あざとまちひばるやま 字田ノ上	6202	A-297	37度 53分 18秒	140度 10分 16秒	20040615 ~ 20040702	425 東北中央自動車道 相馬尾花沢線(福島 島 - 米沢間)建設
まちざいけたあと 町在家館跡	山形県 よねおか 米沢市 よねざわし ばんせいじゅういちやさかわ 万世町梓山 あざとまちひばるやま 字町在家		A-373	37度 52分 59秒	140度 10分 32秒	20040701 ~ 20040803	800
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
梓山a遺跡	集落跡 狩獵場跡	縄文時代 (早期・前期)	竪穴住居 陥穴 土坑	2 9	縄文土器 珠状耳飾り 磨製石斧 打製石器 礫石器	2 1	住居跡は縄文時代早期 末の所産である。打製石 器には定形的な器種が 存在し、活発な狩獵活動 が窺われた。
	集落跡	平安時代	溝	5	須恵器		(文化財認定箱数:11)
梓山d遺跡	集落跡 狩獵場跡	縄文時代 (前期)	陥穴 土坑	3	縄文土器 打製石器		遺跡は山腹の尾根上に 立地する狩獵場跡であ る。 (文化財認定箱数:1)
町在家館跡	集落跡	縄文時代 (前期・後期)	土坑	3	縄文土器 磨製石斧 打製石器 礫石器		今回の調査範囲内には縄 文時代のキャンプサイ トと考えられ、中性の館 跡に関する遺構・遺物は 確認されない。 (文化財認定箱数:4)

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第151集

梓山 a 遺跡

梓山 d 遺跡発掘調査報告書

町在家館跡

2006年 3月28日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999 3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号

電話 023-672-5301

印刷 山形印刷株式会社  
〒999 2327 山形県山形市桜田東3丁目7番31号  
電話 023-622-6291